253
267

事故本
切り取り
P. 295～302
305～310
1990.3.30

始

25
267

國民教育奬勵會編纂

教育及道德

東京 民友社 發行

253-267

教育及道德

◇國民教育奬勵會

創立の趣旨―事業―資產―將來の計畫◇

國民教育奬勵會は、何時、何の爲に、起されたか。又何如なる事業を爲しつゝあるか。これ本書の讀者が、最も深き興味を以て、知らんと欲する處であらうと思ひます。

◇本會創立の趣旨　は言ふ迄もなく我立國の基礎たる國民教育の奬勵發達を期せんとするものであつて、それが爲に、本會は特に國民教育に從事する小學教員諸君の精神的並に物質的向上發展を計ることを以て、其目的とし、國民新聞創刊一萬號紀念事業として創立された者であります。そこで國民新聞社長德富猪一郎氏は、先つ本會の資金として金一萬圓を提供し、之に一般有志の寄附金を加へ、之を以て獨立の財團法人として、大正八年十月文部大臣の認可を得ました。本會は廣く、天下同憂の士を叫合し、其力を戮せて、國民教育奬勵の大使命を果さんとするものであつて、國民新聞社はそれが爲に、其有する力の一切を擧げて、之に提供して居ります。

◇第一年度の事業概要

◇此處に本會創立以來の事業の概況に就て語れば、先づ第一年度に於ては、事業費として金一萬二千圓を支出し、(一)小學教育研究資金の贈呈並に既に研究を遂げたる者の審査表彰、(二)講習會の開催、以上二つの事業を行ひました、研究資金の方は、審査の結果大正九年七月合格者二十人に對

し總額金四千圓を贈呈、成績表彰の方は、十二人の合格者に總額一千六百圓の表彰金を贈呈した。講習會は同年三月第一回現代研究科講習會を東京に於て、次で同年八月第二回理科講習會を東北帝國大學に於て開いた。

◇第二年度の事業概要

◇次に第二年度に於ては事業費として二萬餘圓を支出し、(一)自由研究資金贈呈、(二)女教員縣外視察費贈呈・(三)講習會開催の件等を行ふ事となつた。其結果大正十年五月各府縣知事の推薦に據り、東京府外十の府縣から選定された十五人の候補者に對し、一人三百圓總額四千五百圓の研究資金を贈呈し、他の二十二縣より推薦された女教員二十二人に向て、一人五十圓總額一千一百圓の縣外視察費を贈呈した。次に講習會は、同年三月第三回女教員大會並に學術講習會を東京女子高等師範學校に於て開き、第四回(男教員)を同年八月京都比叡山に於て開き、何れも頗る盛んであつた。猶以上の自由研究資金とは、優良なる少壯有爲の男教員に向て、在職の儘六ヶ月間後顧の憂なく勉强させる爲に、本會より金參百圓を贈呈するといふのである。

◇第三年度の事業概要

◇次に第三年度に於ては、事業費として金一萬九千圓を支出する事を評議員會に於て議決を經たる上、先づ前年度に引續き自由研究資金及女教員縣外視察費を贈呈する事とし、新に朝鮮、臺灣を加へて自由研究候補者二十名に對し總計金六千圓、縣外視察の女教員候補者二十四名に對し金一千二百圓を贈呈した。次に講習會は大正十一年三月倫理及教育に關する講習會を廣島高等師範學校に於て開會。夏の講習は本會々長たる澤柳博士等歐米教育視察團（澤柳博士を團長とし、小西京大教授、長田廣嶋高師教授、下村文部省參事官、伊藤文部書記官の一行五人）の歸朝を待つて、其の視察談を聽く計畫であつた爲に、開期を延期して十月七日から四日間、東京女子高等師範學校講堂に於て之を開きました。

◇猶右の外此の年度内に於ては種々なる事業を行つた。先づ第一に、中等學校入學試驗問題につき、文部省、東京府、市學務當局者及び東京府・市内の各官、公、私立中學、高等女學校長七十四名を會同、入學難を緩和すべき具體的方法を攻究する爲め隔意なき意見の交換を行つた。其結果數回の特別委員會及び小委員會等を開いて協議を遂げた上、試驗期日の協定、及び其他極めて適切なる十數項の決議を得て、其趣旨の貫徹を期するため五名の實行委員を擧げて之を依囑した。

◇次に大正十一年は、恰度學制頒布五十年に當つたので、本會に於ても之を紀念せんが爲に、同年十月一日を以て『教育五十年史』を編纂發行、續いて十月十日澤柳博士一行の講演會出席者及び朝野の教育者數百名と共に、長くも久邇宮殿下の臺臨を仰いで、目出度く學制頒布五十年祝賀式を擧行。猶帝國教育會外十二教育團體の決議により、本會に於て『教育尊重の歌』を國民新聞紙上にて懸賞募集する事となり、其結果豫定の通り當選歌詞一篇を得たので、山田耕作氏の作曲を附して發表し、十月三十日の學制頒布紀念當日、各學校に於て之を齊唱した。猶此外に東京市内の小學教員三千名に對し數回に渉り軍艦便乘の事、歐米圖畫展覽會の開催等種々なる事業を行ひました。

◇本年度の豫定事業

◇次に本年度即ち第四年度の豫定事業としては、(一)女教員縣外視察、(二)研究資金贈呈並に研究成績表彰、(三)入學試驗問題調査、(四)講習會等其他種々なる事業を行ふ筈でありますが、講習會は是れ迄通り全國的の者を開く外に、最う一回冬期に於て地方的の者をも開く事となり、取り敢へず新潟縣下に於て之を開く事となつた。

◇本會の資産　は國民新聞社長德富猪一郎氏の寄附金一萬圓を基本とし、之に一般寄附金を加へ、最近の調査で寄附金累計二十八萬五千餘圓に達しましたので、其中の基本資金約二十萬圓の利子と、乙種寄附金とを以て、其年度内の事業費に充てる事になつて居ります。

◇將來の計畫　は多々あるのでありますが。殊に即今の事態は、益々本會の任務の、重大なる事を痛切に感じさせるのでありますが、それが爲には、所詮今より一層多くの資金と、一般有志の援助とを要するのであります。どうぞ此際直接間接に大方諸君の援助を與へられんことを切に祈る次第であります

大正十一年十二月

東京市京橋區日吉町國民新聞社内
財團法人 國民教育奬勵會

はしがき

現代の行き詰まつた教育を展開して、其處に新しい生命と光明とを見出すべく、今や我教育界に於てはいろ〳〵な苦心と、努力とが、拂はれつゝある。或は自由教育と言ひ、或は創造主義の教育といふが如く、其他一時世間の問題になつた一切衝動皆滿足といつた樣に、殆ど數へきれぬ程の、多くの新らしい主義思潮が各方面に於て、唱へらるゝに至つた。誠に我普通教育の將來の發展の爲に、慶賀に堪えぬ次第である。

併しながらさて、其の何れに適從すべきかといふ段になると、甚だ惑はざるを得ない。そこで此際教育者のとるべき最も賢明なる方法は、唯一つ退いて深く考へ、靜に研究する外にない。大に研究の功を積んで、自ら一家の見を立て、自ら其の歩むべき道を見出すべきである。

國民教育奬勵會は、右の如き趣意を以て、昨年三月廣島高等師範學校に於て、特に教育及び倫理に關する講習會を開いた。時恰も平和博覽會の開會に際し、人心悉く東京に向ふ時であつたが、全國各地方の小學校から來り會する者、實に五百六十餘名の

はしがき

多數に及んだのは、主催者の甚だ滿足する處であつた。

廣島高等師範は、豫ねて教育と倫理の方では、多くの權威ある學者を、克く網羅して居るといふ定評があるのであるが、此の時の講習會では、更に東京より吉田熊次博士、京都より藤井健治郎博士を招いて、之に出てもらつたので、少なくとも教育と倫理の方面では、殆ど全國の精鋭を此處に集め得たといふ世評であつた。今や漸く、其の講演集成り、之を世に公にすることを得たのは、本會の最も光榮とする處である。

唯茲に本會の嘆惜をく能はざる處は、岡部博士が、此時の講演を最後の名殘りとして、不歸の客となられた事である。本會は、此の悲報に接するや、直に澤柳會長の名を以て、謹で弔意を表した事を、此の機會に於て會員諸君に報告して置きます。

猶最後にもう一つ村岡、三浦兩講師の講演は講師の都合で、本書に收める事を得ず、又藤井博士の筆記は餘儀よく檢閲を經ずに印刷に附して了ひましたから、此處に其の事をお斷はりして置きます。

大正十二年六月五日

財團法人 國民教育奬勵會

教育及び道德 目次

第一講 聖美の世界と教育……一

廣島高等師範學校教授 福島政雄

一、緒言＝二、本能の無意識化＝三、藝術非遊戯論＝四、藝術と宗教＝五、美感と緊張味＝六、藝術と教化力＝七、靜觀性＝八、主觀客觀の融合＝九、プラトーのファイドラス篇＝十、結論

第二講 兒童の思惟の研究……六三

廣島高等師範學校教授 文學博士 岡部爲吉

一、情意の教育と知識＝二、兒童の思惟作用＝三、思考と思惟＝四、思惟作用の特質（周遍性、思惟の轉

移、易簡性、推展性）＝五、智的活動と情意系統＝六、結論

第三講　文化と教育……一二〇
廣島高等師範學校教授　佐藤熊治郎

一、文化の意義＝二、價値＝三、生命＝四、實用主義の價値觀＝五、批判＝六、理想主義の價値觀＝七、價値の體系＝八、文化價値と教育の內容

第四講　國際教育及國際道德……一七六
文學博士　吉田熊次

一、國際主義の意義＝二、國際主義の由來＝三、國際主義と道德及教育

第五講　道德の本質……二四七
文學博士　西晋一郎

第一、善論＝第二、義務論＝第三、德論

第六講　道德と經濟……三一〇
文學博士　藤井健治郎

一、事實と理論＝二、理論の種類＝三、輓近兩者の關係の殊に緊急となれる事實＝四、依存說＝五、並存說、

教育及び道德

國民教育奬勵會編

第一講　聖美の世界と教育

廣島高等師範學校教授　福島政雄

一、緒言＝二、本能の無意識化＝三、藝術非遊戯論＝四、藝術と宗教＝五、美感と緊張味＝
六、藝術と教化力＝七、靜觀性＝八、主觀客觀の融合＝九、プラトーのフアイドラス篇＝
十、結論

【一】緒　言

美の世界とは自然美の世界と藝術美の世界との二つに通常別けられ、此の二つを總

稱して言はれて居る。吾々の心が美の世界に逍遙する心持を見ると、自己の利害を離れた極く自由な心持である。然し自由と云うても決して放縱、我儘な心持ではなく、吾々の主觀に映じ來る表象の姿其の儘に隨順して、それに從つて少しも念願とか禱りなどの心持が無い、謂はゞ無礙圓融の狀態で、其の吾々の主觀に映じ來る對照が何であらうと、それが經驗的の事實に於てどうであると云ふやうなことに對しては寧ろ冷淡な心持、其の樣な心持が吾々を支配する其の時を美意識の狀態と謂はれて居る。然らば斯の如き心持を以て自然美、或は藝術美の世界に逍遙すると云ふことが教育の理想に對していかなる關係を有して居るかと云ふことを、少し考へて見たいと思ふ。教育の理想と云ふ問題を精しく申すと時間を要するので、それは略して、私は豫て斯樣な事を考へて居る。教育の理想の中心、教育の理想の焦點となるものは何であるかと云ふと、恩の自覺である、と斯樣に豫て考へて居る。尤も恩と云へばいろ〳〵の意味に於て常識上使はれて居るが、私の今恩と云ふ言葉を使ふのは次の樣な意味である。吾々が今此所に存在して居る、自分の存在して居る其の根本の因、根本の源に遡りて考へると、其所には實に無量無邊と云ふか、限りなき因緣力が働いて、而して自分の存在が此所にあることになつた。其の自分と云ふものが此所に存在するやうになつた根源たる無量無邊の因緣力、之を吾々が顧みるときに、そこに吾々の恩の自覺と云ふことが微かに芽出し初める。斯樣な事を思ふて居る。そこで其の恩の世界と云ふものは絕對廻向の世界と云ふのが最も適當であらうと思ふ。ところがそれに對する美の世界と云ふものは無心隨順の世界である。而して結局此の二つの世界は別々に居るべきものでなくして必ず一味融合しなければならぬものである。而もそれが何所で溶け合ふかと云ふと教育と云ふ吾々の生命と生命との接觸、其の活動の上に於て融合するところがなければならぬと思ふ。吾々が毎日生活して居る此の世界は欲望の世界と謂うて宜いのであつて、道德と云ひ教育と云ふものも、或る意味に於ては吾々の欲望を整理しようとするものである。或は自然を理性化するとか、欲望を合理化すると云ふ言葉が使はれて居るのは正しく此の消息を物語つて居るものである。然し此の理性化、合理化と云ふことは、吾々の欲望を微溫化してそれを統一しようと云ふやうな意味ではなく、吾々の潑溂たる欲望を其の儘にして、而も之を融化すると云ふことでなければならぬ。幼稚なる子供がだん〳〵成長せんとする其の柔らかき芽を壓迫して所謂

となしい少年、おとなしい青年とすることが、教育の眞意義ではなからうと思ふ。ところが此の本能の潑溂として居る欲望を其の儘にして融化すると云ふことは、決して容易な事ではない。吾々の欲望を斷滅して、謂はゞ聖者の生活に入ると云ふことが、小乘的の涅槃思想と云ふべきものならば、それは決して教育の理想に適ふものではない。欲望の潑溂として動いて居ると云ふことが、吾々の活きて居ると云ふことである。而して欲望が沈靜してしまつたと云ふことは、吾々が死んだと云ふことを意味して居る。生と死と云ふものを相對立させて見ると、到底調和することの出來ない一種のアンチノミーのやうな觀を呈する。ところが其のアンチノミーの統一される所に眞の教育の理想が實現されると云ふことを申述べたいのである。

【二】本能の無意識化

極く卑近な精神上の事實から例を取つて見ると、吾々の精神と云ふものは進歩發達するものであつて、其の進歩發達の一面はどう云ふ所にあるかと云ふと、それは確に欲望の無意識化と云ふことに存して居ると思ふ。子供がだん〳〵成長し來る順序として、先づ立つことを學ぶにあたつては、子供に取ては立つと云ふことが欲望の中心となる譯である。而して自覺的練習をして居る中に、立つと云ふことが出來るやうになると、今度は欲望の中心が他に移つて、歩むと云ふ欲望が中心になつて來る。さうすると前の立つと云ふ欲望は無意識化されて來ることになる。此の場合無意識化されたと云ふのはどう云ふことかと云ふと、此の立つと云ふ活動が無くなつたのではなくして、詰り立つと云ふ活動が無礙自在に、何の意識もなく行はれるやうになつたと云ふことが無意識化されたと云ふことになる。而して歩行むと云ふ事の練習が積んで、それが無意識化されると、今度は走ると云ふことが欲望の中心となる。斯の如くにして吾々の欲望とか本能とかゞ、次から次へ無意識化されて行くと云ふことが即ち吾々の生命の發達と云ふことになると同時に精神の發達である。吾々の本能生活全體が斯樣に無意識化して、何の滯りなく行はれると云ふことが、即ち教育と云ふものを極く有效、有利にする基礎になると考へられる。然し無意識化と云ふことが、自然の間に行はれる範圍と云ふものは限局されて居るのであつて、殊に人類の物質的の進歩と云ふものは欲望本能の無意識化と云ふことを阻碍する一面を有して居る。然し又人類文明

の一面に於ては其所に無意識化を助くるものも產み出されて居る。それが眞の藝術であらうと思ふ。故に藝術美は自然美と相待つて、欲望の無意識化と云ふことのプロセスを無限の世界に接觸せしめ、欲望の融化を行ふものである。即ち吾々が美を味ふ時に於て恍惚として、自他、彼此の區別を忘れると云ふのは、それは欲望が寂靜に歸したと云ふやうなものではないのであつて、畢竟欲望が無意識化に因て、至極自由に活動せしめられて居るから其の存在を忘れると云ふ、斯樣な狀態である。元來吾々は大なる活動と云ふものに對しては、割合に感受性の無いものであつて、極く小き譬へを取れば吾々の耳で振動數を聽く、それには振動數の範圍があるので、其範圍以下の振動數は無論音響として聽き能はぬのであるが、其の範圍以上餘り多過ぎても音響として聽くことが出來ない。それと同じやうに、餘り大きいものになると吾々の耳では聽かれないことになる。然るに此の美の世界の最も微妙な力は吾々の全部を擧げて無意識裡の大活動中の人たらしむる働きを有して居ることで、其の大なる働きは無我の世界に於ける大活動であるから、吾々はそれを活動として感じないのであるけれども、然し吾々の全存在、全生命を擧げて最も微妙なる其の活動中に入つて居るのである。

或人は斯樣な美の世界に入ることを、一時的の解脫と言うて居る。さう云ふ人は又斯樣な事も言ふ、「藝術と云ふものは吾々に一時的の解脫を與へ、宗敎は吾々に永遠の解脫を與へる」と。又宗敎の信仰の上から藝術を論じ、藝術の世界と云ふものは如何なるものであるかと云ふと未だ到らざる一種の懈慢の世界と見て居る人もある、藝術の世界が懈慢の世界であると云ふことに就いては、吾々は十分に考へなければならぬことゝ思ふ。

【三】藝術非遊戯論

藝術の世界を一種の怠惰の世界、懈慢の世界と見るのは藝術を一種の遊戯として見るものであらうと思ふ。然し此の藝術的の作品を一種の戯作と見た時代は、是は藝術の歷史上から言うても未だ幼稚な時代であつたと思はれる。否なそれのみでなく、千古の傑作と謂はれて居るものは、いかにそれが戯作のやうな表皮を被つて居たとしても、いかに時代的の着色を帶びて居たとしても、其の根柢には必ず微塵も戯れを許さざる深き體驗其のものが、其所に躍如として動いて居ると云ふことがなければならぬ。

又所謂近代の藝術と云ふものに至りては、極く深き體驗其のものを其の儘表現すると云ふことに餘程心を苦しめて居る。それが歴々として眼に映ずるのである。要するに極く緊張したる生命を其の儘表現しようと云ふことが、藝術の中心問題となつて居るやうに思はれる。例へば近代の文學が自然派文學、自然主義と云ふ道筋を取て行かなければならなかつたと云ふやうなことは、如何なる意味かと考へて見ると、自然主義の極端なものは極く醜いものを、其の儘描き出さうとして居るやうに見える。醜いものは美しいものゝ反對であるが、其の醜いものも描寫しなければならぬやうになつたのは、如何なる所以であらうかと考へると、餘りに過去の藝術と云ふものが戯作と云ふ氣分を多く持つて居たと云ふこと、即ち人間の深き體驗と云ふものを包むには、どうしても美を以てしなければならぬと云ふことを、故意的にする態度が優つて居たからではあるまいかと思ふ。その故意的の態度は人生の苦とか、醜惡などを描寫するときに於てすら、それに一種の假裝を施して表現しようとして居る。其の爲に吾々の苦み、吾々の醜さと云ふやうなものが、其の儘如實に現れて居るなら、そこに一種の體驗美と云ふ如きものが現れて居るべき筈であるのに、之を壓へ隱してしまひ、さうして其の上に所謂假裝を施して居る。是が所謂戯作的傾向であつたらうと思ふ。それで今申した體驗美と云ふ者を目掛けて驀直に進み來り、そこに現出したものが自然派であると思ふ。此の自然派の藝術は近代的ではあるが、眞の體驗美と云ふやうなものゝ世界を現す爲のプロセスとして取らなければならなかつたことゝ考へられる。然らば其の體驗美とは如何なることであるか。今體驗美と云ふのは吾々人生の如實の姿、人生の有の儘の姿をジーッと凝視して、所謂美しいもの、醜いもの、苦しいもの、樂しいもの、凡て何物も避けることなく、悉くそれ等のものを包容し統一して之を活かすと云ふ所に、其所に體驗美の世界があると思ふ。極端な苦、極端な醜を描寫するとしても、其の苦、其の醜が所謂樂とか美と共に統一されて居る味ひである。此の統一と云ふものは、決して苦と樂と美と醜とを胡麻化して居ると云ふやうなものではないのであつて、最も鮮かに苦も樂も美も醜も共に其の儘現はし出して居る、斯樣な統一でなければならぬと思ふ。さうしてだん〳〵考へて來ると、藝術の眞諦と云ふものは毫も懈慢を許さゞる人生、或は自然と云ふものゝ表現でなければならぬ。而して藝術の世界と云ふものは、決して吾々に一時的の解脱を與へると云ふやうなものではない。

成程吾々の美に醉ふと云ふやうな氣分の上から言へば、それは一時的であるかも知れぬけれども、吾々がそれに因て人生の深味に沈潛せしめられて行くことから言へば、一時を永劫に卽せしめて、ヒユーマニチー乃至はネーチユアの世界そのものゝ中に於て、我他、彼此と云ふ如きことを超絕した彼岸の味ひ、其の樣なものを味はしむるのが藝術であると云ふことになる。それには藝術は單に美と云ふことのみでは言ひ足らぬので、莊嚴と云ふことを加へなければならぬ。美と莊嚴とを統一し、尙一層それに深味が加はり、聖なる美と云ふ所まで行かなければならぬと思ふ。斯樣にして藝術といふものは、微塵の隙もなく充實してゐるものでなければならぬ。隨つて藝術化すると云ふことも、決して其所に餘裕を見る如き意味のものではなくなつて來る。詰り慢の世界の如く見るのは醉夢的傾向を誇張して見るものであつて、眞の藝術の世界は其の樣なものではないと謂はなければならぬ。次に然らば藝術と宗敎とはどう云ふ所で區別せられるかと云ふ問題が當然起り來るのである。

【四】藝術と宗敎

此の宗敎と云ふものに就いては、宗敎學者などがいろ〳〵煩雜な事を論じてあるやうであるが、其の樣な問題を此所に申述べる要はないので、唯宗敎の眞諦は何所にあるかと云ふことを一口に言へば、我の問題に徹底的に沈潛すると云ふことになる。徹底的沈潛すると云うても、吾々が思索の上で徹底するのみでなく、思索も無論含むのであるが、吾々の全我が生命、全生命を擧げて沈潛すると云ふことになつて來る。ところが斯樣な宗敎の世界と云ふものを、之を具體的に表現すると云ふことになつて來ると、どうしても藝術とならなければならぬと思ふ。即ち或る特殊な具體的なものを捕へ來り、其の具體的のものによつて宗敎の世界を現はし出すと云ふことになると、それは單に宗敎と云ふのではなくして、宗敎的藝術と云ふことになる。而して宗敎は吾々の自己一人の問題に歸する。ところが藝術は如何と云ふと、千萬人を一を融化させると云ふやうなものであるが、其の千萬人を融化させる藝術が、各々の人にして自己一人の問題に覺醒せしめ、而して各人を宗敎の世界に導くと云ふことは、是は出來得ることである。然し藝術と云ふものは、具象性と云ふことに於て正しく藝術特殊の領域を有するものであつて、斯樣に考へ來るときは、佛敎に於ける大乘の敎典、それ

は勿論いろ〳〵の教典があるが、其の中の或るものは十分の藝術として認めらるべきものである。併し藝術の領域と宗教の領域と異つて居るところは如何なる所にあるかと云ふと、それは宗教の領域に於ける焦點は飽くまで我であつて、其の我は如何なる意味の我であるかは別問題として、兎に角飽くまでも我と云ふものである。ところが藝術の世界に於ける焦點は、必ずしも其所に在るのでなくして異なる所がある。此の世界の萬象、或は人世の全體を見渡すと總て皆な宗教の世界に入るものではあるが、然し斯樣なものが凡て我と云ふものに因て、統一されて居るといふ相を有して居ると云ふ方面において、其所に宗教の特殊相が現れて居ると云ふことが言ひ得られる。藝術の方の焦點となるものは、必ずしも我と云ふものではなくとも、それは我であると も言はれるが、我でなくともあらゆるものが、藝術の焦點となることが出來るのである。それ故に藝術は宇宙、或は人生のあらゆるものを其の焦點として其所に藝術の世界を描き出すことの出來るものであると言ひ得られる。今之を假りに藝術の對象の周流性と名を附けて置く。要するに藝術は第一に具象性と云ふ點に於て、宗教と區別され、第二に對象の周流性と云ふことに依て、宗教と區別される特殊性を有して居ると云ふことを申したのである。一の具體的の例を取れば、此處に聖母マリアの繪像がある、それは基督教を信じて居る人に取つては、基督教の救濟と云ふ意味に於て自己一人の問題に深き內的關係を有して居る。其の點から考ふればそれは宗教的の藝術である。而もそれは自己が今救はれて居ると云ふ法悅其のものではなくして、マリアを描いた繪像と云ふ具體的のものを持ち來り、それによつて表現されてある點が藝術特有のものであると申すのである。ところが同時に聖母マリアの繪像が次の樣に見らるゝ場合がある。即ち是は人類の母が美しく表現されたものである、と云ふやうにも見られ得る。斯樣に見る場合に於ては必ずしも自己一人の中心問題に直接に觸れて居るとか、直接にそれを取扱つて居ると云ふものでは無くなつて來る。詰り吾々が一本の百合の花のやうな美しいものを見て居る、其の時の感じと似たやうな場合になつて來る。斯樣に見られ得る所に於て、藝術の周流性としての特殊性を見ることが出來る。然し飜つて考へると之を逆にして一本の百合の花を見ても、其の百合の花から其所に宗教の世界を見ると云ふことも出來得る譯であつて、宗教の世界に於ける我と云ふものが、だん〳〵大きく擴充されて行く其の結果、我と云ふものを焦點とした廣大なる世界が、

其所に點出された一本の百合の花を我に最も親しいものとして、之を見ることも出來得るのである。其の時此一本の百合の花は宗教化して來る譯ではあるが、然し此の場合に於ても忘れてならぬことは、宗教の世界として見るときは飽くまでも其の焦點となつて居るものは百合の花でなくして、我と云ふものが焦點となつて居ることである。斯樣な區別を忘れてはならぬのである。尙又藝術と云ふものは物を美化すると云ふことも考へなければならぬ。宗教の世界に於ては如實の相を見、有の儘の姿を見る。それに對して藝術は裝飾を施して表現し來ると、斯樣に考へられて居る。此の點に於て藝術には餘裕があるもの、眞劍味がそれだけ缺けて居るものと云ふやうに考へられて居る。然しこれは宗教の世界を照らす調和統一の太陽が、無限の彼方にあると云ふことの爲に、吾々はその太陽を直接に見るよりも、寧ろ其の光りに照された自己の現實を直視せしめられる。それに對して藝術の世界を照す月があると假定すると、其の月は割合に近き所にあつて、其の光も亦柔かである。而して吾々は月に照された世界を見ると同時に、月其のものをも見ることが出來る。宗教の世界に於ては照されたるものは見ることは出來るけれども、照すものは太陽であると假定すれば、太陽其のもの

を直視することは、吾々には非常に困難であると同じやうなことになつ來る。即ち宗教の世界に於ては、照されたるものは見ることが出來るが、照らす根本を直視することが困難である。藝術の世界に於ては照されたるものを見ると同時に、照らす其のものをも見ることが出來る。斯樣な差別があるので、一方を太陽に譬へ、一方を月に喩へられると多少其の心持の差別が解るやうにならうと思ふ。而して吾々が其の太陽に照されたる世界を見るときは、其の世界に於ける美しきものは殊に美しく、醜いものは特別に醜く見えるのであるが、藝術の世界に於ては微かに光によつて見る有樣であるから、マザ〳〵と醜いものが照し出される趣きが少いと云ふやうな相違がある。換言すれば宗教の世界は一味の光の徹底したるものであつて、藝術の世界はいろ〳〵の統一の下に在る光の世界に於て、雜多なるものを其の中に認めしむることが出來ると云ふても宜からうと思ふ。それで調和と云ふことから言へば、宗教の世界は永劫の調和であり、藝術の世界はどうかと云ふと、永劫の調和を背景にしたところの此の調和、あの調和、是が藝術の世界であると云ふやうに考へて見ると、藝術を宗教から區別する第三の特色が其所に現れて來る、それは畢竟種々なる調和の世界を表現するといふ

こと、それが藝術の第三の特色と云ふことになり、雜多な調和が其所に表現されて居ることになる。而して其の雜多調和と云ふものが矢張り美の世界を作つて居る。然らばそれは眞劍味を缺いて居るものであるかと云ふと、決してさう云ふものでなくして、寧ろ吾々は究極に於て、其の所に到達しなければならぬ一味の眞劍なる世界に入り行く種々の門を開いて居るものが藝術である、と斯樣に言うても差支なからうと思ふ。斯樣な藝術の特色のある爲に教育、教化と云ふ事の上に藝術の價値が非常に大きくなつて來ることになる。藝術の爲の藝術と云ふやうな事を多く藝術家などによつて言はれて居るやうであるが、それは無意味な言ひ事であるやうに思はれる。人生の歸趣と云ふことが藝術の本義でなければならぬので、人生を離れて藝術と云ふものはないのである。故に吾々は功利的の立場から其の樣に申すのではなくして、而も此の人生と離れぬ藝術と云ふものゝ教化力と云ふものを、重く見なければならぬことになる。然し吾々が眞劍に人生と云ふものを沈潛して行く、それの歸趣するところは何所かと云ふと宗教の世界であることは言ふまでもないことであるから、詰り藝術の具象性と、藝術の周流性と、藝術の調和の雜多性と、此の三つの特色を有して居る此の藝術が、吾々の我と云ふものにあらゆる方面から迫り來つて、いかに我と云ふ問題に無頓着であつても、何か深き刺戟を與へずには置かぬと云ふやうな力を有して居るものが藝術であると云ふことになつて來る。

【五】美感と緊張味

茲に又起り來る問題は、然らば美と云ふものがいかにして人に迫り來りて、いかなる感應影響を人に及ぼすものであるかと云ふことである。若し吾々が前に述べた如く美と云ふものは單に一時的の夢の如き解脱を與へるものでなくして、最も切實に吾々の人格の根に迫り來るものであるとすれば、此の美と人格との呼應する所に、其所に最も注意すべき最も微妙なる教育、教化の働きが行はれなければならぬ、而して此の美と人格との交渉はいかにして行はるゝか、是が非常に興味ある問題ではあるが、動もすれば淺薄な方面に流れ易い問題である。此の美の種類と、尙ほ人格との交渉に就いてだん〳〵考へて見たいと思ふ。

美の種類と云ふものを感覺を基として考へると、言ふまでもなく最も著しきものは

形、色、音、斯樣なものを通して感ずるもの、具體的に言へば繪畫、彫刻、音樂の如きものを始として、それ等を包括したやうな文學の如きものであらうと思ふ。然し茲に其の繪畫論とか、彫刻論、文學論などを持ち出すのではなくして、唯茲に言はうとするのは感覺を通して吾々に迫り來る美感であつて、其の美感の迫り方がいかに切實であるか、其の切實の度合に就いて少し考へて見たいと思ふ。最も漠然としたものから言へば所謂有機感覺であつて、斯樣な有機感覺の如きものは無論直接に美を感ずるものでない。然し美感に深き關係を有することは明かである。然らば有機感覺のいかなる狀態が美感に都合が好いかと云ふと、淺薄に考ふれば有機感覺が極く悠つたりとしたやうな狀態に在るとき、それが美感を助けると云ふやうにも思はれるが、深く考へると必ずしもさうではない。前に述べた藝術の根本美から言へば弛緩した有機感覺、吾々の生命の動きが緩んで居るときに、眞の美の世界に觸れるかと云ふことを考へると、どうもさうではないやうに思ふ。吾々が眞の美に觸れるのは、謂はゞ吾々の生命が弛緩と緊張との間に躍如として動いて居る間に、眞に美の世界に觸れると云ふことになる。斯くして所謂莊美（サブライム）と云ふことの意味が深いものになつて來る。斯樣な事から考へると、有機感覺と云ふものゝ意味はそれが躍如として活きて居なければならぬ。唯暢びりとした氣持の好い狀態、弛緩して居ると云ふことだけでは眞の美には觸れぬと云ふことになる。故に極端な例を取ると、阿片を喫んで一種言ふべからざる美感を感ずると云ふことがあつても、それは眞の美の世界に觸れたものではなからうと思ふ。次に美感に關係深きものは嗅覺である。嗅覺は普通高等なものでなくして、劣等な感覺と謂はれて居る。ところが此の嗅覺と云ふものが、美感には頗る深き關係を有して居る。然らばいかなる所に關係を有して居るかと云ふと、東洋に於て特に發達して居る香であつて、香を焚くと云ふ所に深き關係を有して居る。元來美感と云ふやうなものゝ成立の根柢と云ふ如きものを考へると。それは男性と女性との性的關係、生理的に基礎があると云ふ人がある。成程それも一面の眞理はあるらしい。然しそれは一面の眞理に過ぎずして、性的關係の結果として種々なる美の世界が產み出されて居ることは爭ふべからざる事實であるが、性的關係其ものはどうであるかと云ふと、一の欲望の世界である。而して其の欲望なるものは不定なグラ〳〵した動搖的の欲望であるゝ爲に眞に緊張した美感を妨害するものゝ如く考へられる。ところが東洋に發達し來れ

る香の藝術とも謂ふべきものは、性的關係のいろ〳〵の欲望を鎭めて緊張した美の世界に吾々を導いて行く力を有して居る。それは誰もさう感ぜらるゝことで、東洋風の香の匂ひを嗅ぐときは、焦だつて居るやうな欲望がジッと鎭まる。それは香其のものの性質のみでないかも知れぬが、香が嗅覺を刺戟する、其の性質が欲望を鎭靜せしむる働きを有して居る。それは植物の薔薇の花などから採取した香水などの香を嗅ぐ時は餘程違つて居る。香水の匂ひなどは刺戟的であるが、此の香の方は鎭靜する力を有し、落着かしめることになる。其所に吾々の嗅覺と美感との關係が極く切實であると云ふ意味がある。吾々の欲望を鎭靜すると云ふことは、鎭靜すると同時に吾々の純粹な生命が高調すると云ふことを意味することになり、而して純粹な生命が高調して來るときに、初めて其所に純靜な美感の世界に導かれ行くと云ふことになつて居る。斯樣な事は比較的東洋人には、能く〳〵諒解されて居ることゝ思ふが、基督敎も源は東洋から出たものであつても、基督敎の舊約聖書などを見ると、神の前に匂ひのするものを捧げる、それは何を捧げるかと云ふと、豚を焙つて其の肉を捧げると其の匂ひが高く天に昇ると云ふやうなことが、創世記などに書いてある。斯樣な匂ひとは全く違つた趣きが東洋の香にあると思ふ。それ故に西洋趣味と云ふやうな方面に沒頭して居る人には此の香と云ふものが、純一な美感の世界に吾々を導くと云ふ消息を解することは餘程困難のやうに思はれる。次に聽覺と視覺であるが、是は所謂美學などの研究に依ると、優等な感覺であると稱せられ、隨つて美と最も密接な關係を有して居ることは勿論であつて、耳に美を感ぜしむるものは音樂であり、眼に美を感ぜしむるものは形とか色と云ふことになる。而して吾々が音樂の美に感ずると云ふのは何であるかと云ふと、即ち吾々の生命の共鳴と云ふことである。色彩とか形狀とか云ふやうなものゝ美に感ずるのは、吾々の生命と云ふものを其所にプロゼクトすることである。吾吾の生命を擴充すると云ふ意味がそこにあると思ふ。何れにしても吾々の生命が純一に緊張して行く所に眞の美の世界が存する譯である。耳や眼に觸れる美感の世界と云ふものは其の內容が大に豐富である。其の內容が豐富であると云ふことは、研究資料が非常に豐富であると云ふことになる。今日の美學の研究などと云ふことは、斯樣な方面に於て餘程精細な研究が行はれて居るやうである。即ち美感を喚起する感覺的材料としては視覺、聽覺の範圍に含まれるものが最も豐富であると云ふことになつて居

る。ところで玆に一つ考へなければならぬことは、斯樣に豐富であると云ふことが、藝術の眞の意味に對していかなる關係を有して居るか、之を考へなければならぬ。吾吾は藝術をして藝術たらしめ、眞美の世界を成立せしむる、其の中心となる感覺が視覺、聽覺の二つであると云ふことには固より反對でなく、全く其の通りであるが、然しそれと同時に視覺、聽覺の內容と云ふものが豐富であることが、眞美の純一の世界に觸れる上の妨碍になりはせぬかと思ふ。吾々が線香や名香を焚き、それに依て美の世界に導かれ行く、其所には懈慢を許さず、弛緩を許さぬことゝ思ふ。名香を焚き、其の名香の薰りによつて美の世界に導かれないものは、全然導かれないのであつて、導かるゝものは端的に導かれる。斯樣なことになるので、導かれざるものはいかに名香の薰りを嗅いでも風馬牛で分らぬと云ふことになる。ところが色彩、形狀、音樂と云ふやうな場合に於ては、材料が非常に豐富である爲に、吾々の心が好い加減に彷徨ふと云ふやうな事が起り易い。恰も美の世界其のものゝ中に自分が入つて居るやうな感になつて、自分自身を欺き、而して美を會得したやうな心持で居ると云ふことがあり易いやうに思ふ。隨つて純一な緊張した美の世界に進ませられて行く趣きが薄いやうに思はれる。斯樣に矛盾したやうな事が起る。材料が豐富でないならば美の世界は成立たぬであらう。然し材料が豐富である爲に、純一な美の世界に入ることが困難であると云ふことになる。其所を能く分別せずして、單に耳や眼によつて美感の世界に觸れようとするやうになると、其の樣な態度は所謂デイレッタントの態度であると思ふ。斯樣な事がある爲に希臘は往昔から音樂と云ふやうなものが、敎育上非常に大切なものにされ、プラトーなども音樂の敎育上に於ける價値などを、非常に重んじて居るに拘らず、實際今日に於ても音樂敎育と云ふものは、其の價値が疑はれて居ると云ふやうなことがある。詰り極めて微弱な效果を及ぼして居ると云ふやうなこともある。そこで吾々の眼とか耳とか云ふやうなものは極めて鋭敏なものであつて、純眞の美の世界に導くプロパビリテイーを有して居るにも拘らず、其の豐富なる資料に於てどうも淺薄な所に彷徨ふことが多いやうになる。畢竟美育と云ふ問題は近づき易くして眞の所に入り難い、近づき易くして徹底し難いと云ふ趣きがある。此の狀態のモウ少し甚だしいのは、いろ〳〵の感覺の複合性とでも言うて宜いやうなフアンターヂーの世界、文學の世界であると思ふ。ところが文學の大部分と云ふものは單に吾々の慰

みであるかの如く考へられ、吾々が人生を直視するに堪えずして之に美ど云ふ霞の衣服を着せて見やうとする。それが文學であると云ふやうに考へられて居る。此の考の誤りであることは前に申したのであるが、モウ少し其の事を述べて置きたいと思ふ。此の文學の領域と云ふものは非常に豐富であつて、或る意味に於ては音樂、繪畫の世界も悉く文學の領域に含まれて居ると言ふても宜しいと思ふ。其の爲に文學其のものが既にいろ〳〵の世界に彷徨され易い性質を有して居る。故に文學に深く入り行く人は自然彷徨性を發揮して、純一な世界に直に入ることを忘れると云ふことは有り得べきことである。又實際吾々は多く其の實例を見て居る。例へば玆に戀愛と云ふ世界がある。戀愛と云ふやうな題目は文學に於ては最も好んで取扱はれて居るものである。若し文學の領域から斯樣な世界を取除いたならば、非常に寂寞たるものになつてしまふであらう。然し此の戀愛と云ふやうな心持は元來浮虛性を有するものである。然るに其の浮虛性を有する戀愛を其の儘肯定して、或は其の美しい一面、或は其の醜い一面を表現しようとするのが文學である。而して其所にいろ〳〵な彷徨を行ひ、種々なる相に於ける戀愛を見せようとして居る。斯樣な點に於て文學と云ふものは、吾々の憧憬せんとする心に極めて能く合致するものとなる。詰り吾々の憧憬する心と云ふものはいろ〳〵な幻を描き出し、それを自分の持物にしようと思ひ、而して其の幻を常に肯定して行かうと云ふやうなものであつて、それが戀愛を歎美する文學として現はれて居る。然し是は決して文學が藝術としての眞諦を其所に發揮したものではなからうと思ふ。若し文學と云ふものが藝術の眞諦に觸れるものであるならば、いかに彷徨しても最後の方針、最後の目的の方向に於て微塵も動搖しない、ジッと定つた我の根本義に參するものでなければならぬと思ふ。我國の文學に於ける源氏物語は全篇悉く戀愛の世界を表現したものであるやうに言はれて居る。それに就いて儒者の方では此の物語を排斥し、源氏物語は淫亂を敎へる書物であると云うて居る。一方佛敎徒の人はイヤさうではない、源氏物語は大乘の經文の精神を現してゐると云ふやうに辯じて居る。これ等に對して本居宣長は總てのそれ等の說を排して、源氏物語は文學として其の中心點として狙つて居る所は「もののあはれ」と云ふことであると有名な玉の小串に論じてあるのは、其の時代から考へて非常な卓見であることは疑ひないのであるが、然し其の「もののあはれ」と云ふのは單に吾々の心の浮虛性から戀愛を肯定した、

さう云ふ心持を言うて居るものならば、宣長其の人も未だ藝術の眞諦を盡して居らぬと思ふ。私の考へる所では源氏物語の如き古典文學も、其の儘極めて切實に我の根本義に迫つて來るものである。斯樣に見ざるを得ないことになる。源氏物語は五十四帖であるが其の中の前篇と言はれる四十四帖は、光る源氏の華やかな戀の世界を表面に現して居るやうである、けれども實は其の裏面に戀愛の浮虛性と云ふものを沁々と反省させる所に人世否定の心持が其所に裏附けられて、實際吾々がアレを讀むと源氏は淋しい人と云ふ感じが起る。而して今度は戀愛否定を正面から描き出してあるのが、後編の宇治十帖であつて、前編に於ては吾々の我と云ふものが碎かれて行く有樣を裏面から寫し、後編に於ては其の碎かれて行く姿を正面から寫し、其の我と云ふものが碎かれる姿が正面と裏面から寫し出されてある。是が「もののあはれ」と云ふことになると思ふ。故に同じ戀を描き出すとしてもロセッティー、ブラウニングが戀を讃美して「ラブ、イズ、ベスト」などと言うて居るのとは、源氏物語は趣きが違つて居ると思ふ。斯樣に考へ來つて、藝術と云ふものを其の純眞なる世界に觸れしむる最も切實な題材は何であるかと考へると、それは死の問題であると思ふ。此の世界から浮虛性と云ふものを除き去り、最後に嚴肅な統一を與へるものは、どうしても死の問題でなければならぬ。斯樣な意味に於て現代西洋の藝術と云ふものも、藝術の眞諦に向つて歩を進め來つて居ると云ふことが言はれ得ると思ふ。或は基督敎の經典の中にあるものとか、佛敎大乘の經典にあるものは、藝術として最高に位するものであらうと思ふが、玆に一つ考へなければならぬことは、所謂戯作の如きものは藝術の價値を全然取去らるゝものであるかと云ふことが問題になつて來る。イブセンとか露西亞のドストエフスキーのやうな人の作品のみを讃美して、例へば我國の近松のやうなものは地下に葬つてしまはなければならぬか。斯樣な問題が起つて來る。是が亦大に興味ある問題であつて、元來吾々は藝術の眞諦と云ふやうなことを、客觀的に存在する藝術品其のものに求めやうとして居るけれども、是が第一に方向を誤つて居るのではあるまいか。要するに藝術の眞諦と云ふ問題になると、決して藝術品其ものに在るのでなくして、我の生命の最も奥深き所に眞諦は存することになる。故に此の我と云ふものゝ沈潛することの淺さとさは戯作として見らるゝと云ふことになるけれども、我の世界に沈潛することが深ければ深い程、今度は戯作と云ふものゝ範圍がだん〳〵狹まつて行く

くやうに思はれる。今まで戯作であると思つたものが戯作でなくなり、戯作の範圍が縮小され、戯作でないものゝ範圍がだん〳〵擴められて行き、戯作と思つたものも戯作でない方に取入られると云ふことになる。故に若し我の問題に沈潛することが其の極度まで達したならば、今度は藝術上の戯作と云ふものは、悉く消滅してしまはなければならぬと思ふ。而して一切の藝術品と云ふものが皆な其所に躍如として我と云ふ生命の根本義に參與する。斯樣にならなければならぬ。吾々は濫りに戯作を排斥して露西亞の文學は淺いとか、ドストエフスキーのものが一番良いと云ふやうなことを言ふのは詰り自分の淺薄であることを物語るに過ぎない。そこで第一に吾々の進むべき方向と態度がキチンと定まらなければならぬと云ふ問題になる。淺薄なる吾々が心を振り起して眞の藝術と云ふものに向ふ態度と云ふものは、絶對無限の世界に向つて進むと云ふことにならなければならぬ。ところが一方に於て藝術の世界と云ふものが豐富である爲に、常に彷徨ふと云ふことが附隨して居る。其の彷徨の性質に對し常に嚴肅な導きを與へるものは死の問題であらうと思ふ。故にあらゆる意味に於て、嚴肅な死の問題に觸れて居る藝術が吾々に對して特殊な意味を有して居ると云ふことが言はれ得る。

【六】藝術と教化力

斯樣に藝術の眞諦と云ふものが、我の根本に觸れると云ふことから、藝術の世界に人間の人格が發露すると云ふことは、教育、教化の上に非常に意味を有することになる。ヴインデルバントが美の事を論じて居る中に、美の中には普遍妥當性が無いと言うて居る。そこで人間、個人から言へば趣味性の現れと云ふものは、最も微妙な點に於て其の一個の人格を物語り、又人格の力となる。隨つて教育、教化の上に大なる働きを有して居る、斯樣な事も言ひ得られる。又概念の世界に於ては互に共通の點が多い、人間なら人間と云ふ概念を其所に齎らして來ると、其の人間の概念に就いて一致しないものは普通の意味に於てないのである。それに趣味と云ふものが加はると、其所に個性が現れ來ることになる。趣味の最も微妙な點に於てデイフエレンシエーションの差別があり、個性と云ふものも最も鮮明に現れて來る。隨つて最も切實に個性と個性の觸れ合ふ世界が其所に開かれる。斯樣な方面から考へると、自ら趣味性と云ふ

ものを深く養はずして、單に概念の分離結合と云ふことを事として居る學者などは、教育、教化の上に於て自分と云ふものゝ上に、二重も三重も皮を被せて生命と生命との觸れ合ひを成るべく避けようとして居る、實に詰らぬものと云ふことになる。

又一方から言ふと趣味性に於て普遍妥當性がないと云ふことは、個性と個性との分離と云ふ問題となり、玆に教育、教化の上に於ける一種のアンチノミーの世界があることになる。何故かと云へば最も個性的のものが最も痛切に人に迫ると同時に、今度は最も痛切に個性と個性、人間と人間との分離を其所に感ずると云ふ事になつて來る。故に人格と云ふものが、其所に個性が鮮かでなければ教育、教化に於ける影響と云ふやうなものに一つも意義の無いことになる。然し個性が鮮かである故に人格と人格との永遠の分離、人間の生命と生命とが永遠に分離すると云ふことが、切實な問題になつて來る。故に此の趣味の極く微妙な世界の中に、最も深く分け入つて居ると云ふやうな人に取ては教育、教化の世界と云ふものは無限に深き闇黑な淵として、現はれ來ることになる。其所には人間の生命と生命とが融化することに導く無限のプロセスがある。又其所には教育、教化の人としての無限の淋し味の世界が開かれて來る。斯うなると藝術と云ふものは果して教育、教化の上に於て終局的の意義を有して居るものであるか、斯樣な疑問が起る。吾々は美の世界に於て果して此の教育、教化の上に終局の滿足を得ることが出來るか、斯樣な疑問が起る。前に述べた如く美の世界と云ふものは藝術として如何なる表現を得て居るにしても、其の中心として常に動いて居るものは我と云ふものゝ生命である。我と云ふものが中心となつて無限に動いて行く所に美なるものにも懈慢を許さぬ、弛緩を許さぬ趣きが生じて來る。そこで教育の理想と美の世界と云ふやうな事を考へて、唯藝術品のみを彼是言ふと云ふことは、決して其の當を得たものではない譯である。畢竟問題の急所はいつも我の生命と云ふものに存在するのであつて、美の世界に吾々の人格の投射的にプロゼクトすることは所謂個性を現はすものであるから、其所に一種の彷徨、一種の弛緩を生ずる虞があると云ふことを最も深く考へなければならぬ。吾々は藝術上の作品の上に於て、自己を凝視することを力强く暗示せられても、それに依て教育、教化の事が成し遂げられたと考へたならば非常な誤りである。其の樣な事なら芝居を觀る方が遙に宜いと云ふことになる。觀劇のやうな事は教育、教化の上から言へば決して眞實なものではない、と云ふ

所以はいかに吾々が緊張した眼で演劇を觀て居たとしても、自分の我と云ふものが劇其のものゝ中にプロゼクトされ投射されて、劇其のものゝ何所かの焦點に自分が統一されて居る。其の場合に於ては一種の遊戯を行つて居るに過ぎないことになる。若し吾々が立派な藝術として演劇を觀て、我と云ふものゝ生命が動いて居る、其の世界の中に劇其ものゝ世界を、此方に取入れてしまふと云ふことになるならば、其の焦點は永遠に我の生命にあつて、觀劇と云ふことは其所に消滅してしまはなければならぬ。其所に二つのものが一時に成立つものではない。若し戀愛を寫してある藝術の焦點に我と云ふものゝ生命を投射して、單に其の戀を樂むとか、或は悲むと云ふ位の三昧境に入つて居るやうなものであれば、藝術は一種の酒のやうな他愛ないものと云ふことになつて來る。然し藝術が我の生命の根本義に觸れると云ふ意味は、決して藝術を酒のやうに取扱ふと云ふ意味ではない。若し吾々が戀愛を寫してある藝術に觸れることに依て我の生命と云ふものゝ永劫の浮動性、永劫の浮虛性を悲しむと云ふときに、初めて藝術と云ふものが我の根本義に觸れると云ふことになる。此の時に於ける焦點は永劫の我と云ふものが焦點になつて居るので、其の藝術品の中に投射せられ、遊戯化された我と云ふものが焦點となつて居るのではない。

從來藝術の事を論じて居る人は、獨逸語のゲーゲンシテンデゲフュール、(假りに投射感情と譯する、プロゼクトされた感情である。)斯樣な言葉をつかつて居る。それは何の事かと云ふと、吾々が客觀的に繪畫を見る、藝術品を見る、其所には悲しい場合を描いてあるとして、さて吾々が其の繪畫を見るときに、悲しいと云ふ感情の起るのは、自分の主觀の感情である。主觀の感情であるのに恰も客觀的に其の繪畫、其の作品、其ものに悲しいと云ふ感情があるやうに思ふ。其の感情を投射感情と謂ふ。然し斯樣に主觀から客觀に投射する、プロゼクトすることのみを仕事として居る。其の事が教育、教化と云ふことに直に關係するかと云ふと、どうもさうではないやうである。畢竟それは一種の憧憬の狀態であり、ロンギングの狀態である。憧憬れると云ふのは自己反省が極めて薄弱な心の狀態で、プラトーの如きは憧憬れの心持を、前の世を想ひ起す想起說と結びつけて、吾々の魂が絕對界を思慕すると云ふことを說いて居るが、然し絕對を思慕することが、單に想起と云ふことのみから起るものとは思はれぬ。自己の我の現實、現象界の痛ましい有樣、其の現象界の焦點となつて居る我が永劫に流

轉し行く姿、其所に起り來る思慕の心持は、單なる憧憬と云ふやうなものではない。自己を投射すると云ふことは、浮虛の世界に一歩を踏出すと云ふことになる。無限に彷徨するのを其の儘宜いとする方へ一歩を踏み出すことになる。ところが吾々の此の浮虛なる自己、我と云ふものゝ生命に動いて居るあらゆる形相、あらゆる姿に對してヂッと反省の眼を振り向けるとき、吾々は投射感情といふものが決して教育、教化の眞の道標べをするものでないことを感せざるを得ない。教育、教化の中心問題が自己一人の問題であると云ふ限りに於て、投射感情が飜つて我に歸つて來ると云ふときに、初めて藝術の理想から教育、教化の理想に觸れると云ふことになる。前に申した教育、教化の中心理想とも云ふべきことは、無限絶對の恩の自覺と云ふことにある。其の恩の世界と云ふものも亦投射される。而して一種の藝術品として、投射されて現れて來る。實際吾々が詩經の蓼莪、或は心地觀經の報恩品の如きものを見ると、恩の世界が藝術的に表現されたものとして、非常に美しいと云ふことを感ずる。或時は吾々は之を讀んで其の藝術品に醉ふて居るやうなこともあり、又吾々自身恩と云ふやうなことを力說して其の美に醉はんとするやうな傾きもある。吾々が一種の耽溺を行はんとする非常な危險は、此所に在りと謂はなければならぬ。詰り恩と云ふものを美しいものとして、それを客觀的に眺めて、其所に投射された投射感情を樂むと云ふことは、教育、教化上に於て非常に危險なことである。恩の世界を藝術化すると云ふことは教育、教化の眞諦から言へば、一のプロセスに過ぎないので、其の藝術の世界に進む自己が碎けて、永遠の寂寥なる自己に覺め來るときに初めて教育、教化の上の恩の問題が動いて居る自己、動いて居る我に於て生きて來ることになる。斯樣な意味に於て藝術の眞諦に觸れながら、而も尙ほ恩の世界を偶像化せず、常に自己の問題に痛切に轉化して來る。其の一二の例を求むると、舊約全書の約百記とか、新約のヨハネ傳とか、佛教の方では觀無量壽經、無量壽經等が著しきものであつて、新らしい所謂藝術品から求むればドストエフスキーの作品中の或ものがそれであらうと思ふ。

然し斯樣なものも單に藝術品としてのみ吾々が眺めると云ふならば、吾々は永劫の彷徨をなすに過ぎぬと云ふことを忘れてはならぬ。趣味性は前に申した如く人格の最もデリケートな微妙な世界を物語るものであるが、恩と云ふ世界に動き出で來る人格は其の趣味性を、悉く我の生命の最も奥深き所に向つて沒了してしまはなければなら

ぬ。趣味に豐かな人格が、教育の理想に最も深き交渉を有して居ると速斷することは出來ぬ。いかに趣味性が豐富であつても教育、教化の上には駄目であると云ふやうな例は比々として見ることが出來る。若し吾々の趣味の浮虛性と云ふものに人格が漂はされるとき、其の人格は恩の世界を蹂躙して、我が趣味に生き、美に生きると叫ぶやうになるものである。戀愛至上論の如きは其の樣な所から動き出て來たもので、趣味に生きる、美に生きると云ふやうな叫びは、さも美しさうに見える、それだけ人目も惹き易いが、同時に其の浮虛性の中に全人格を破滅すると云ふ意味が含んで居る。吾々の心の中の何所かに斯の如き浮き〳〵した一種の浮虛性を有し、其の浮虛性を以て轉々として行くと云ふ傾向、而も強い傾向を有して居る。それ故に美の世界は一種の懈慢の世界、怠惰の世界と言はれる罪は何人にあるか。吾々は其の罪を藝術品に塗りつけようとする傾向を有して居るが、實は藝術品に其の罪があるのではない。浮虛性の自分其のものに根本の罪がある許である。眞實の世界に於ては些の怠りもない。唯恩の世界を自己の上に切實に見ることをなくして、一種の概念的偶像として見る所に吾々の懈慢、吾々の弛緩が生じて來るのである。若し自分が眞に自己といふものを直視したならば、そこに總ての懈慢を破る悲痛な全我の命が動いて居る。此の悲痛の全我の動きの前に、總ての藝術と云ふものは我の前に森嚴である。我の生命は其の前にあつて、泌々涙を流すより外にないと云ふことになつて來る。此の時に於て所謂藝術の世界と教育、教化の世界とがピタリと合致することになる。

【七】靜觀性

モウ一つ美學上ベシヤウリヒカイト、（セレニティー、靜觀性）と云ふ方面から同じ事を考へて見ようと思ふ。美を論ずる人は美の世界は欲望を離れた趣があると云ふことを力說してゐる。詰りそれが美意識の靜觀性である。之に就いて欲望の無意識化と云ふことを前に述べたのであるが、其の無意識化の究極する所に靜觀性を見ると云ふことになる。無意識化とは前に言ふ如く欲望を斷滅するのでなくして、寧ろ欲望と云ふものに無碍自在の自由な境涯を與へる、それが無意識觀である。ところで欲望に無碍自在の境涯を與へると云ふのは、いかなる事であるかと云ふことを考へなければならぬ。吾々の欲望は無限であつて、一の欲望を充たすと、又更に他の欲望が起つて來

る。然し欲望の充足といふ點においては、何所かで行詰まる所がある。此の無限の欲望を次から次へと適當に滿足してゆくことを、人間の進歩とか進化と云ふて讃美して居るならば、吾々の前には決して永遠の美の世界は開けぬであらうと思ふ。然し單に一時酒に醉ふたやうに、美に醉はされるといふことによつて、一時吾々の欲望を瞞着しようとする如きことは、決して美の眞諦ではない。吾々の能く言ふことで、毎日毎日實に煩瑣な生活の仕事に齷齪して居る間は、美と云ふやうな事に心を向ける餘裕がない、それは餘裕が出來てからの事である、と斯樣に言ふが、然し其の齷齪した生活の中に美を見ることの出來ないやうな人ならば、いかなる世界へ行ても永久の美の世界を知らずに過ぎる人であると思ふ。齷齪した生活を離れて悠つくり美の世界を樂しむと云ふことは、美と云ふものを一種の酒に醉ふたやうな世界に在るものと考へて居るからである。美の眞諦としてのセレニティーと云ふ心持は、決して一時酒に醉ふた如き狀態ではない。然らば美の眞諦に觸れて行くと云ふことは如何なることであるか。いかにしてそれを知り得るか。是は人世を活動、進歩、進化と云ふやうな正面から見るやうな觀察では、決して解することの出來ないものであると思ふ。吾々には非常に執着性があつて、一時も其の執着性は吾々を離れぬ。或は執着を離れて解脫したと言ふ人もあるが、其の樣な人は解脫したと云ふことに執着して居るのである。一の執着が去れば又更に他の執着が來る。不斷に姿を變へて次から次と執着が現れて來る。此の執着が人生のいろ〳〵な姿に投射せられて行く、其所に美の眞諦は到底得られぬのである。普通の常識に從へば執着をせず、諦らめた所に美の世界が現れると云ふやうに考へられて居るが、吾々が眞に徹底的に諦めると云ふことが出來るであらうかと云ふことが問題となり、其所に非常な困難が横つて居る譯になる。吾々は本音を吐けば到底諦めることは出來ないのである。それ故に吾々の執着の永遠性と云ふか、どこまでも執着して行くと云ふ心を持つて居るからセレニティー、靜觀と云ふやうな境涯を自分で會得することが出來ると云ふやうなことを考へたなら、それは非常に傲慢なことにならうと思ふ。そこで美の世界の問題は、聖の世界の問題とどこまでも接觸して行かなければならぬ。其の接觸なしには決して終局的の解決は得られない。美も聖美と云ふことにならなければ最後の解決は得られぬと云ふことになつて來る。此の靜觀、セレニティーと云ふ心持は、吾々が聖の世界に觸れしめられて行くことに依て、吾々に與へ

られるので、即ち吾々に廻向される、吾々はいかにして聖の世界に觸れしめられて行くかと云ふことを論ずれば、それには種々な問題が含まれて居るが、簡單に言へば吾々の執着性を、終局的に斷滅することは不可能であといふことを、其の儘吾々の全生命を以て體驗して、そこに闇黑な深淵に向つて永遠に墜ちて行く、自己を內我の生命を以て感ずるときに、其の諦めの出來ない心の無限の動きの生命を見て、こゝに全我の否定と云ふことに當面するとき、茲に人生と云ふものは活動とか進歩と云ふ方より寧ろ無限の流轉と云ふ否定の全相、否定の姿のみが現れ來りて、進化主義も滅してしまひ、成住壞空の波の中に漂ふて居ると云ふことになり、人生の根本的無意味と云ふことを沁々味はなければならぬやうになる。詰り人生を何か意義あるものにしようとするところに吾々の全我の歩みと云ふものが碎けてしまふ。其の碎けて行く全我の內容を成して居るものを其の儘取り入れ、攝取して捨てざるもの、詰り全我の內容其のものゝ中に沁々と浸り入り、永遠に死する我に向つて永遠の生命を注いで來るもの、是れ即ち佛敎に於ける絕對他力の廻向である。此の廻向に依て吾々は聖の世界に觸れしめられ、茲に吾々は初めて所謂經驗我としての、我の到底斷ずることの出來ないやうなものを斷ずることが出來るやうに爲さしめられる。人生の根本を斷ち切られ、佛敎の所謂一切を空と觀ずる空觀の眞義に徹底されることになる。而して前に恩の世界として吾々が美しく現はし出さうとしたものも皆な碎け、皆な空想の世界のものとなり、而も其の碎けて行く所に概念化することの出來ない、久遠刼の恩の世界、永遠の恩の世界が現れ出で、それに吾々が觸れしめられる。是に於て吾々は人生に於ける何物をも終局の恃みとすることなく、其所に安心して立つことが出來るやうになる、而も吾々は人生を脫れることなく、人生其ものに隨順して、常に自己の根本義に歸らしめられつゝ一種の超越した心を廻向せしめられつゝ、生活して行くことになる。斯の如き廻向に接してセレニティー、靜觀の根柢を與へられ、いかに吾々が人生の生活上齷齪して居るとしても、其の齷齪して居る其の儘のものがそのまゝにこれを空觀せしめられることによつて、自己の全欲望が絕對廻向の世界に捧げられ、其所に無限の滿足を得しめられ、欲の無意識化の究竟の心を廻向される、此の心を吾々の生命の背に負ひ、此の心を根柢として自然に人生が變つて來ることになる。畢竟人生のいろ〳〵な姿の美とか、自然の美とかに徒らに執ふ心持から變つて來る。或は人間のいろ〳〵な姿が靜觀性と云

着し、春の花、秋の紅葉のいつまでもあれかしと祈るやうな、美に醉ふたやうな世界に憧憬れる、其の樣な美は聖の美でなくて迷ひの美である。素より吾々は有漏の世界、迷ひの世界に彷徨うて居るものであるが、それが眞如に裏付けられた有漏の美を見る心に變つて來る。眞如は無漏の美であつて、吾々に靜觀性を與ふる根本である。吾々の欲望の無限性が絶對廻向の世界に觸れることに依て、靜觀性の眞美が初めて得られる。それから教育、教化の事を考ふれば單に活動とか進歩と云ふことを眞向に振翳したのでは教育、教化の理想は眞美に觸れぬことになる。昔の人が凝滯なく物に接する心などと言ふて居るが、此の心が即ち眞美を見る心であると解して宜いと思ふ。要するに教育、教化の理想と云ふものが悉く我に於て碎け、聖の永劫の世界に觸れ、聖の世界を通じて美の世界に觸れると云ふことでなければならぬ。活動とか進歩とか云ふやうなものが皆な碎けてしまふ所に、全活動を離れざる寂靜があると云ふことになる。詰り人生と自然とを空うし、しかもこれに隨順して居るものゝみが味ふことの出來る美の眞諦の世界が其所にある。教育、教化と云ふことは眞に自己を沈潛せしむると云ふことによつて、其所まで導かなければならぬと思ふ。詰り人生と自然が空うされることによつて、空であることが分ることに依て人生と自然とが、悉く眞如の美に照し出される境涯である。欲望の活動、欲望の跳梁が進歩の標となり、單に欲望を刺戟することのみを仕事として居る教育、教化であるならば、それは眞の教育、教化ではないと思ふ。然し單に消極的に欲望を壓へつけるとか、制限しようとするのも誤つて居る。詰り欲望の自由の境涯を許し、而も之に依て自己の生命の奥底にある欲望の根柢を絶對廻向の前に融化せられざるを得ない所に至らしめると云ふことが、欲望を導く根本中庸の道である。美育と云ふ問題は煎じ詰めたところ必ず此所まで來なければ徹底しないものになる。

【八】主觀客觀の融合

又美を論ずる人が美意識の要素として、斯樣な事も言ふて居る。それは主觀と客觀の融合した狀態である。此の主觀と客觀との融合はいかにすれば出來るかと云ふと、唯一時的に恍惚として醉ふたと云ふやうな狀態も主觀、客觀の融合には違ひないが、然し主觀客觀の融合と云ふことは、モウ少し深き根柢を持たなければ眞に成立し得な

いと思ふ。我を忘れ恍惚として自然の美に打たれる。自然の美に浸つて居る一瞬間、それが眞如の世界に觸れて居るのであると云ふやうな事を言ひたくなるが、其の樣なことを言ひたいのは普通の心であつて、是は決して容易に許されることではなからうと思ふ。そこで恍惚として醉ふと云ふやうな事は、決して美意識の本質でないと考へなければならぬ。吾々の我を全く捨てゝ無我になると云ふことは容易に出來るものではない。恍惚として醉ふたやうな心持になり、それに依て無我の境に入りたるものとして、醒めた後其の事を反省して我も亦眞實の世界に觸れたと云ふのは、一種の傲慢な心である。宗教の信仰を得んとする人が非常に法悅の狀態になつたとき、自分は信仰を得たと云ふならば、それは信仰でも何でもない。若し其の樣な事を以て主觀、客觀の融合の美意識でありとすれば、詰り美の世界は一種の夢のやうなものであると論ずる人があるかも知れぬが、私は決してさうでないと思ふ。藝術は輕い意義に於ける戲作に過ぎぬと云ふ立場から言へば、さうも言はれるか知れぬが、吾々は眞善、美の無限に合一し融合して行くことの要求の上から、決して夢のやうなものとは考へられぬ。然らば主觀、客觀の合一とは何を意味するかと考へると、美に恍惚たる境涯に出入する我が深い無限の反省に導かれ行くと云ふことにならなければならぬ。或人は美の世界に入る心持を醉ひ、且つ醒めよと言ふて居る。是は深い意味のあることゝ思ふ。吾々は現實の有樣を見ると、醉ふて覺めたそれで終りと云ふやうな直線狀にはなつて居らぬ。飽くまでも曲線になつて居る。詰り無限のサークルの上に醉ふては醒めを繰返して居る。是が實際の有樣である。或は醉ふたとき美を見て覺めたときに、醉ふたとき眞如に觸れた自分を反省する。即ち眞と眞でないものとの間を出たり入つたりして居る、眞と妄とを一貫して動き、或る動き方を肯定し、或る動き方を否定すると云ふ如きは、畢竟自己の渾然たる生命を見ずして、生命の脫殼のやうなものを眺めて居るに過ぎぬと云ふことになる。吾々は其の樣な餘裕綽々たる心で何を摑むことが出來るか、斯樣な疑問を提出せざるを得ない。ところで吾々には差迫つたる生命の直視と云ふ問題がある。生命其のものを直視すると常に吾々の生命は混沌たる姿を其所に示して居る。此の生命は或は肯定せられ、或は否定されると云ふやうな餘裕あるものでなくして、全否定に際會すると云ふことになる。少しも常住性を持つて居らない。常に流轉の波上を漂ひ、醉ふときが眞であるか、醒めたときが眞であるか少しも腹の定つ

たところのない、決定心無き自己に對し純一な悲みは、肯定せんとする自己が永遠に否定せられて行く自己の現實の姿を見る、即ち無限に沈淪する我と云ふことになる。故に單に一度醉ひ且つ醒めると云ふやうなことでなくして、無限に醉ひ且つ醒める自己の浮動性の其ものに沈潛して其の姿を直視して沁々と涙を流すとき、初めて吾等の遊戯的なる主觀、客觀の融合などと云ふことが消滅して來る。而も斯かる自己に對して之を沾ほす絶對廻向の雨露と云ふものが眞の主觀、客觀の融合と云ふことを齎らすものである。即ち吾々が藝術品に對して吾々の主觀の光を以てそれを照して、其所に主觀、客觀の融合を感知しようとして、しきりにあせりもとめて居るときに、思ひがけぬ後ろの方から大きな光が照して來たと云ふやうなことであつて、其の時吾々は非常な驚きを感ずると同時に、今までいろ〳〵遊戯心などのあつたのが、悉く消滅してしまふことを感ずる。それと同時に其の大いなる光りの前に無限に暗き自分を其所に發見する。而して其の無限に闇き自己に慚愧して、而も其所に眞の主客の融合が齎らされる。詰り吾々の生命の奥底から無碍の永刼の光に照されることによつて、其所に常住な主客融合の根柢を與へられ、自己の無限の暗さを直視せしめられる心から主客融合の世界に導かれて行く。此の時の心は決して醉ふたやうな心ではない。此の根柢的の主客融合と云ふ體驗に達して、醉ふたものは醉ふて居るまゝ、醒めて居るものは醒めて居るまゝ、明瞭に眞實の美を見せしめられると云ふことになる。眞實の美は藝術品其の物に存するのでなく、又吾々の小主觀に存するのでもない。吾々の主觀の底の底から滲み出る根本主觀とも謂ふべきものゝ光、絶對廻向の光の中に存するからである。自然が其の儘に美しいとか、人生が其の儘に美しいとか云ふやうなことを吾々の小主觀が傲慢に宣言することが出來るものではない。飽くまでも絶對廻向である。吾人の前にある自然や人生と云ふものは、それがいかに美しくとも流轉の姿であり、暗黑の形であり、無常の姿である。吾々の限りなき果なき欲望の底に欲望が起り來る心の底の底に入つてこれを悲愍する絶對の廻向、是が世の光であり、吾々の光でなければならぬ。吾々は此の人生によつて、又此の自然によつて大なる光、根本主觀の世界とも謂ふべきものに歸入せしめられて行く故に、流轉して居る自然によつて、暗黑なる人生によつて却つて不斷の絶對の光に觸れしめられて行く。是に於て全生命を解放せしめられ眞實の美を見せしめられ、而して深甚なる主客一如の大海にある身たる

ことを知らしめられる。主觀、客觀融合の心の上においては、あらゆるものが美となる、醜いものも美、暗いものも美となり、世界の萬象、人生の諸相が永劫に我と共にほゝ笑むと云ふことが現れて來る。

【九】プラトーのファイドラス篇

前來述べ來つたことの意味をモウ少し明にする爲に、プラトーの美に關する論を考へ合せて見たいと思ふ。プラトーの美に關する論は對話篇、ファイドラス篇に最も美しく述べられてある。プラトーの對話篇の數多くある中で、ファイドラス篇は最も神韻漂渺たるものとせられて居る。此の對話の行はれた場面はアゼンスの郊外イリッソスと云ふ河畔の綠樹の木蔭で對話が行はれた。其所でファイドラスとソクラテスが相對して美を論ずゝと云ふことになつて居る。最初はファイドラスの非戀愛論で、戀愛を非とする　を書いて來たものを朗讀する。其のあとでソクラテスが愛に關する論を說き出すと云ふことになつて居る。最初の方は必要はないが、ソクラテスがいかなることを述べたかと云ふと、御承知の如くプラトーの對話篇中にはいつもソクラテスが活動して居る。然しソクラテスに依つて述べられたことは、詰りプラトーの考であつて、此の時はソクラテスは先づ誤れる愛を說て居る。どう云ふものが誤つた愛であるかと云ふと、愛せらるゝ方のものが極く無力なものになることを希ふやうなことは誤つた愛である。斯樣な誤つた愛は愛せらるゝもの、方は徒らに美を飾り、愛する方はそれを喜ぶと云ふことに陷る。斯樣な愛は排斥すべきものである、と云ふやうに先づ愛を總て否定して居る。其の樣な愛は例へば狼が羊を愛するやうな愛であつて、狼が羊を愛するのは、ひつ裂いて喰ふ自分の私慾の材料とする爲に愛するので、それは眞の愛ではない。其の樣な愛ならば否定すべき愛である、と云ふことを先づ述べて、其の後に眞の愛を述べて居る。其の眞の愛を述ぶる初めに、ソクラテスは一種の狂氣、物に狂ふ心を非常に讃美して居る。總ての偉大なるものは狂氣の產物であつて、其狂氣は神の賜物であると言うて居る。而して其の神の賜物である狂氣なるものは、所謂普通思慮深いと云ふやうな態度より遙に尊いものである。何となれば極く思慮深いと云ふやうなことは、人間にのみ存することであるけれども、狂氣なるものは神より與へられたものであるからと、斯樣にまで斷言して居る。尙又狂氣なるものは總ての

苦みから人間を解放するものである、と斯樣に讃美して而して敎育の根本動力の如きも亦此の狂氣にある。畢竟狂氣と云ふものは人の魂を捉へて其の魂を醉はしめ、謳はしめ、幾多の人の壓迫を斷たしめ、それに依つて永遠に人々を敎化して居るものである。斯樣な事を叫んで、それから靈魂の問題に說き進み、靈魂は不滅なることを述べ、何故に靈魂は不滅であるか、凡て永遠に活動するものは不滅である。吾々の靈性は永遠に活動するものであつて不滅であると言ひ、此の邊からソクラテスの話は非常に高調し來り、此の靈魂の意味、靈魂の姿を說かんが爲め譬喩を取つて物語つて居る。其の譬喩は靈魂と云ふものは翼のある馬に車を附け、一人の御者が之を御して居るやうなものであつて、神の靈魂の馬及び御者は總て氣高い訓練を受けて居る。ところが神以外の人の靈魂の馬及び御者は、いろ〳〵樣々になつて居て、神以外の場合に於ては御者が二頭立の馬を御して居るやうな譯になつて居る。而して其の二頭の馬の中の一頭の方は、非常に美しく非常によく馴されてあつて柔順である、ところが一頭の方は非常に醜くして躾けも惡く性質も惡い。其の樣に相異つた馬を駢べた二頭立の馬車を御して居るのであるから、之を巧く御することは甚だ困難な事であり、又非常に嫌やな事である。是れだけが有名な靈魂の譬喩である。こゝでプラトーがソクラテスをして言はしめて居るのは、此の靈魂の中でも最も純なる神の靈性と云ふやうなものは、若し眞、善、美の世界を空に譬ふれば、最も自由に眞、善、美の空を天驅けるとが出來る、其の樣に神の靈は偉大なる自由を有して居る。ところが人間の靈魂と云ふものは其の樣に空を飛び翔ることが出來ぬ。人間の靈魂は常に二頭立の惡い方の馬に惱まされてゐる爲に非常に努力をして、辛うじて微かに眞理を窺ひ見ることが出來る位のものに過ぎぬ。決して神の靈に隨つて行くことなどは出來ぬものとなつて居る。是に於て人間の靈性、靈魂には非常な混亂が起り、戰ひが起り、壓迫が起つて來る。而も其の靈魂の御者が不適當である場合には馬が疲勞する。隨つて多くの自由に天翔る靈魂が翼を失ふやうになり、而して徒らに煩悶しても何の效もなく、大なる眞理を見ることも許されないで、地上の萬物の假りの相と云ふものに執着することゝなる。是が即ち人間としての誤りで、又人間としての破れである。斯樣に人間の靈魂が自由なる翼を失つて地上に墜ち來るとき、靈魂の階級が九つに分れる。其の第一の階級に屬するものは賢者、又は眞の美を愛する人、第二の階級は正しい君主、政治家、將軍、第三

の階級は財を能く治むることの出來るもの、第四の階級は醫者、體育家の如きもの、第五の階級は豫言者、又は牧師の類、第六の階級は詩人又は俳優、第七の階級は手工業、織物等の如き、又は農業に從事するもの、第八の階級はソフイスト、人民に阿諛諂ふやうな事をする小人、第九の階級は暴虐の君主、斯樣な九つの階級が地上に於て分れることになる。此の地上に墮落し來つた靈魂が是から樣々な流轉、輪廻の運命に出逢ふことになる。即ち靈魂自體の輪廻する相が種々樣々であつて、或る靈魂の如きは數千年の間此の地上に於ていろ〳〵の生物から生物へと轉々するものもある。唯然し哲學者の靈のみは其の中でも特選せられたものであつて、又眞實の愛を有するものも亦同じく特選せられたものである。其の眞實の愛はいかなる所から起り來るかと云ふと、詰り純なる靈の世界其のものを想起することから起り來るものである。純なる精神の世界を想起して其所に憧憬れる、其の心が眞の愛である。而して最も强く眞の靈の世界を想起し、最も强く憧憬するものが哲學者である。哲學者は力强く其の想起をして、力强く其所に惹きつけられて行く點に於て、最も完成せられた人に近い。斯樣な人は人生の混亂と煩瑣との間から遙かに逃れ出て、唯神の生活に聽從するものである。然るに世の群盲はそれを理解せずして、斯樣な哲學者を避ける。何故かなれば神が彼等哲學者を恍惚の境に導いたことに就いて、何等理解を有つて居ないからである。斯樣に述べ來つて美の論が又一層高調に達して居る。人間が此の地上に於て美しいものを眼に見るときに眞實の美を想起し、眞實の美を想起したときに人間の魂に翼が生へて來る。而して鳥が高き天空を翔るが如き態度を以て高き所に憧憬れる。さうして此の地上の周圍に何事が行れて居るかと云ふことさへ、氣附かないややうな心持が高調して來ると彼は恰も狂人の如くになる。斯の如き狀態が畢竟プラトーによつて最も神聖な境遇と考へられて居たやうに思はれる。然し斯樣な純なる靈の世界を想起することを續け得るものは極めて少數な人であつて、此の果敢なき吾々の地上の生活に於て、永劫の憧憬、永遠の努力を起すと云ふ點に於て大に意味がなければならぬ。是だけが美に關して最も高調した叙述の部分を、極く簡單に述べたのであるが、之に就いて少し私は考へて見たいと思ふ。玆に注意すべきことはプラトーが先づ地上の愛と云ふことを說いてそれを否定し、物に狂へるやうな心、狂氣となつて此の現し世を超脫して行く、其の趣きを豐かなる神韻を以て描き出し、靈の世界の想起と

云ふ根柢の上に人間の永遠の憧憬の心を肯定して、而も此の否定と肯定との間を何を以て結びつけるかと云ふと、人間の惱み、人間の破れと云ふことを以て叙述の上では結びつけて居る。此の點が注意すべき所であると思ふ。斯樣にして吾々の生命の現實に最もいたましく觸れて來るものはどこであるかと云ふと、今の人間愛の否定と人間の靈魂の破れと云ふ、此の問題であらうと思ふ。一體人間の愛を直に肯定することは西洋思想の特徵であるかの如く考へられ、殊に今日は愛と云ふやうなことを言ふのが流行するやうであるが、然し吾々は自己の內省の眼を鋭くすると、人間の愛と云ふことは最も相對的のものであつて、主我的のものであることを認めざるを得ない。プラトーが先づ人間愛を否定して居るのは、理由あることゝ言はなければならぬ。眞の美と云ふものは決して相對愛の世界に於て、眞實の意味において存することは有り得ないのである。然らばプラトーは相對愛を否定して、次に物に狂うた狂氣の心持を讃美して居るのは、眞實の美の世界に入り行く叙述の端緒になつて居る。物に狂うた狂氣は愚者の心である。プラトーは此の狂氣を二つに大別して、第一は病的の狂人、第二は凡ての重荷、足枷、手枷、凡ての干涉、凡ての法則などに擒れない神の如き自由を狂氣と云ふのである。斯樣に述べて此の神の如き自由の狂氣を更に四種類に別ち、第一の種類は豫言者、卜者の如きものゝ狂氣、卽ち希臘のアポロの神から來たもの、第二種類は說敎者、牧師の狂氣、是はディオニソスの神から來たもの、第三種類は詩人の狂氣、是はミューズの神から來たもの。第四種類は愛の狂氣、是はエロスの神から來たもの、斯樣に四つ列べて居るが此の中で最も高尙であると、プラトーが言うて居るのは第四の愛の狂氣である。いかなる手枷、足枷も慣習、法律なども無視して、さうして、神の如く自由になる狂氣と云ふものは、決して小智を弄して慧かしく立廻るものなどの味ひ得られぬところのものであつて、プラトーの言ふて居るやうな最高の狂氣を味ひ得るものは、普通常識の意味から言へば愚者でなければならぬ。故にプラトーが神の世界を象徵として述べて居る美感、卽ち眞理直觀の世界、眞理を其の儘直觀し得る世界を想起して、それを思慕する人、斯樣な人を普通凡俗の眼を以て見たならば、是は愚者であると言はるゝに違ひない。プラトーの述べて居る言葉を以てすると、凡俗は彼を罵りて、「見よ此の愚か者を」といふ。斯樣な嘲笑の叫びは凡俗が愛智者を

罵つて叫ぶ語である。しかも斯樣な愚者であつて初めて眞の美を見ることが出來る譯である。然しプラトーの言では斯樣の愚者と嘲けらるゝ哲學者は、矢張り賢者であると云ふて居る。九つの階級に於ても第一は賢者たる哲學者である。それが人間の最上階に位することになるので、賢者が美の世界を想起する力を、最も豐かに惠まれて居り、最も高尙なる狂氣を豐かに與へられて居るものが、哲學者であると云ふことになる。ところでモウ一歩進んで考へると、此の狂氣の高調して來る其の高調はプラトーが豫言者的の態度を以て世俗に對し、これを覺醒させようとする熱血が迸つて曝露したものであつて、プラトー自身が自分を眞に反省して、其所に直觀し得たところの自己の姿は何であるかと云へば、人間の靈魂の比喩と、靈性の惱みとの中に現れて居るものこそはプラトー自身を物語つて居るのではないかと思ふ。成程哲學者は人間界に於ては最上地位になつて居るかも知れぬ。然し其の哲學者の靈魂も亦不完全であつて惱みに充ちたものである。人間界に於て最上の靈魂を惠まれて居ればこそ、鮮かに絕對美の世界を想起することが出來る、從つて惱みも深い。故に人間の靈に絢はれた流轉の運命と云ふものは、哲學者も亦免かれることは出來ない。哲學者の靈魂の流轉は短いけれども其の流轉の間に自己の魂を直觀する、その惱みが深いから他に比して流轉の間は短くして、早く永遠の美の世界に歸ることを許されると言ふて居るのではないかと思ふ。詰り哲學者が眞の美を見ることが出來るのは、自己を見ることが痛切であるからと云ふことに基くことになる。さうするとプラトーの所謂美の神髓とはいかなるものであるかと云ふことを考へなければならぬ。之を概言するとどこまでも際限なく流轉して行く自己に與へらるゝ、プラトーの所謂イデアの世界の回向であると思ふ。又想起と云ふことも同じく回向と云ふことになるやうに思はれる。吾々から之を見れば人間としての心の破れと云ふものが痛切であればこそ、眞の美に眼覺めしめらるゝと云ふことになる。プラトーが譬喩を以て美しく說き出して居る美の世界の全般に於て、吾々相對界に住つて居る人間として自分を其所に寫してあるものゝ如く感せられるのは矢張り靈魂の比喩と、人間の破れと云ふことの外にはないやうに考へられる。プラトーの哲學者と云ふのは、人間界の最高のものとせられて居りながら、其の自覺內容は最下層のドン底に沈淪して自己を見て居るもの、是が哲學者であつて、決して自ら高いものであると許して居るやうなものでないやうである。觀無量壽經を讀

ひと、上品上生、下品下生と云ふやうに、人間の階級を別けてあるやうであるが、其の言葉を用ひると哲學者は下品下生の自覺があるから上品上生である。プラトーが第九の最下位として居る暴君なるものは、自分が上品上生であると自己肯定をして居る爲に下品下生であるとも言はれる。而して美の眞諦は自覺の上の下品下生の人、即ち哲學者に對して開かれる。プラトーも靈魂の階級を九つに別け、觀無量壽經も上品上生から九つに別けて居る。此の九と云ふことをモウ少し精しく考へ合せたなら、面白い味はひがあるやうに思はれるけれども、未だそこまでは及ばぬのであるが、唯プラトーのファイドラスの方はどつちかと云へば、藝術的政治的のやうな色彩が強いやうで、觀無量壽經の方は宗教的、倫理的の色彩が鮮やかに現れて居る。其の樣に九品の別け方に就いても兩方の味ひが違つて居る。どつちが徹底して居るかと云ふと、恐らく觀無量壽經の方が徹底して居るやうにも思はれるけれども、私には未だ斷定することは出來ぬ。兎に角プラトーのファイドラス篇の如きものと、觀無量壽經のやうなものとを十分味ひ較べてさうして我、自己と云ふものゝ本義がどこに寫し出されて居るかと云ふことを兩方對照することによつて、眞の聖美の世界が微かに吾々に分つて來るものであると云ふことを信じて疑はないものである。

【十】結　論

聖美の世界と教育と云ふ題を掲げたのは、それは教育の理想と聖美の理想との交渉、接觸の問題であるが、藝術の世界は眞の意味に於て決して戯れの世界でないと云ふことをいろ〳〵の方面から申して、それから美に關する極めて小さき有りふれた心理的方面から御話して、次に美術の要素と言はれて居るもの、次で自分等の考へ來つた藝術と云ふものも、根柢に於ては我と云ふものゝ根本義に觸れて、宗教と相接するものであると云ふ所まで說き來り、それを少しでも明にする爲にプラトーのファイドラス篇を擧げ、美の中心は詰り自己反省に映じ來る一切醜惡の世界、それと離れない絕對永劫の一切美の世界、プラトーの言葉を以てすれば想起の世界、其の想起と云ふ所に一切美が現れる世界、此所が即ち聖美の世界になる譯であつて、而して是が教育の中心理想である。恩の自覺の世界と云ふも、聖美の世界を離れてあるべきものではない、美の世界は成程雜多であるが、恩の世界は純である、從來は美と云ふことを何か薄絹

一重被せて見るやうに取扱つて居る。未だそれだけでは足らぬと云ふことになつて、近代の藝術と云ふものが起り、それに美の世界が擴張され來つて、所謂古典の藝術世界に於ては醜いものとして取扱はれて居たものも、其の醜いもの其の儘が美しいと云ふ風に取扱はれるやうになつた。斯樣に新しい藝術が發展して來たと共に美の世界が雜多な世界としてありながら、それが其の儘純一な世界に捧げられなければ最後の統一が出來ぬと云ふことになつて居る。而して教育、教化の最後の目的と云ふものが純一の世界にあると云ふ場合に於てはあらゆる藝術と云ふものは、何等かの意味に於て此の教育、教化の世界に捧げられるものである。少くも其の中心焦點に捧げられるものである。苟くも藝術である限り教育、教化の上に於て排斥されるやうなものは一つもないことになる。斯樣な見地から下つて來て、兒童の訓練などは一々考へなければならぬ。一切の藝術は最後に教育、教化の世界に統一されるものである。然らば小學兒童にもあらゆる藝術をそのまゝに與へるかと云ふと、それは問題であらう。それには順序があらうと思ふ。然し最後に於てはあらゆる藝術が聖美の世界の森嚴なる秩序の下に人類の教化のあらゆるものに參加し、悉く取入られなければならぬ。斯樣になると思ふ。さうすると此の藝術の具象性とか、周流性とか種々なことを申したのであるが、斯樣な藝術の特質は教育、教化と云ふものゝ上に於ては、純一な恩の自覺と云ふ中心理想に向つて、いろ〳〵樣々な方面から人格に種々な暗示を與へる。其の一々のものが終局の純一の世界に歸趨する。斯樣な意味で藝術と教育、教化が一に融け合ふことになる。それ故に今日或人によつて言はるゝやうに、藝術は教育の上に於ては恰も敵であるかの如く考へられる。其の樣な思想も誤りであつて、又それに反して藝術は教育の味方である、教育の材料であると云ふことをやたらに振廻すのも間違であらうと思ふ。畢竟藝術と云ふものが最後に聖美の世界に於て統一されないならば教育、教化の上に於て是れ程厄介なものはなからうと思ふ。又藝術と云ふものが最後に聖美の世界に統一せられたとになれば、藝術はピッタリと教育、教化と融け合ひ相ひ副ふと云ふことになる。斯くて普通美學で論ぜられ、或は常識で考へて居るやうな藝術の範圍よりはモウ少し廣いものになるかも知れぬ。然し其の中には凡ての藝術を悉く網羅して居ることは言ふまでもなく、斯樣にして吾々は教育と美との關係の上には利用主義を排斥する、さりとて藝術排斥主義も取らない。十分奥深き所に於て一切の藝術

を味ひ、それに依て美と教育と云ふものが一に融け合ふ所に一の問題として、それを解決すべく、融け合ふて一致する所を見るやうに進んで行きたいと云ふのが、私一個の念願とする所であります。

第二講　兒童の思惟の研究

廣島高等師範學校教授
文學博士　岡部爲吉

一、情意の教育と知識＝二、兒童の思惟作用＝三、思考と思惟＝四、思惟作用の特質（周遍性、思惟の轉移、易簡性、推展性）＝五、智的活動と情意系統＝六、結論

【一】情意の教育と智育

私の演題は「兒童の思惟の研究」と云ふのでありますから、餘りに教室の作業に直接關係があつて、或は國民教育全部の問題としては、少しく偏寄つた題目ではないかと云ふやうに考へますのであります。併し私は兒童の思惟作用、或は思考作用に就ては、興味を以て研究中なのでありますから、斯う云ふ機會を利用して、研究の一端を發表することが出來れば、私に取つては極めて仕合せと思つて此の題目に定めたのであります。所が不幸にして數日來病氣に罹りまして、家に居つては褥の中の生活をや

つて居るので、其の爲に調べた材料は大分ありますけれども目を通すことも出來ず、參考になるものも目を通すことが出來なかつたので、或は一向皆樣の御參考にならぬか知れませぬが、其の點は御承知を願つて置かなければならぬ。

丁度今から三百年前に、教育學の方で有名なコメニユースが「大教授學」と云ふものを書いて、其の中に、人間の知識は、其の知識が大なれば大なる程、神に對する敬虔の念が厚くなる、斯う云ふ事を盛んに主張したことは、是は誰も知つて居る所である。私は此のコメニユースの考が今日の精神現象の研究から致して、直ちに之を採用することは困難であるか知らぬと思ふのであるが、併し若し人間の知識が段々大になるに從つて、宇宙の全智全能の神に對する敬虔の念が段々厚くなる、斯う云ふ事があるとするならば、吾々の知識を獲得することは、極めて大なる意義のあるものと謂はなければならぬ。この間の昇格問題に付て、前の帝國大學の總長であつた山川健次郎男が、高等師範を昇格するのは、甚だ意義の無い事である、高等師範學校は從來道德教育を重んじた學校である。其の學校が文理科大學になつて智育に偏した教育をやると云ふ事は、是は退歩である、決して昇格ではない。斯う云ふ事を堂々と論ぜられたことを聞いて、私は今更の感に堪へないのである。果して人間の學問知識を擴大し、向上すると云ふことが、同時に敬虔の念を厚くし、人格其のものが立派になつて行くと云ふことであるならば、此の山川男の說は根本から覆されなければならぬと思ふ。即ち高等師範を大學に昇格すれば、それだけ道德教育の基礎は固くなつて行く譯である。此の節の學問の研究は、人格の向上、宗教思想の發展と云ふやうな情操の方面に於ては、意味の無い者であると云ふ事を假定して、斯う云ふ事を言はれたのであらうが、是は私は一つの問題ではなからうかと思ふのである。

併しコメニユースの考へから申したならば、人間の知識が段々廣くなるに連れて、吾々の知つて居る事、知識の對象となつて居る所の事柄が、一つとして宇宙を創造する神と關係の無いものはない、一つの事を知るにしても、是は必らず神の造つたものである。又他の事を研究しても、是が又神の總理統制の下にあると云ふ事を益々深く知るに從つて、神に對する信念が厚くなると考へたに相違ないと思ふ。今日の教育は兎角智育に偏して、情操、意思の教育が足りないと云ふ、斯う云ふ非難の聞えるのは、どうもコメニユースの考へと反對して居ると云ふ事を裏書して居ると思ふ。矢張知識

の擴大と云ふことは、必ずしも人間の高尚なる情操、鞏固なる意思を養ふものでない、と斯う云ふ事も、事實上多く吾々の遭遇する事柄であると云ふことを認めなければならぬではないかと思ふ。是が大切なる一つの問題である。

もう一つの問題を擧げると、今から百年前、之も教育學で有名なフレーベルが、「人間の教育」と云ふ非常な、時代を劃する所の著述を出して、其の卷頭に、總ての物には皆統一がある、其の統一は何であるかと云ふと畢竟神である、宇宙は神に依つて統一されたのであるからして、宇宙の事柄をより多く知れば知るだけ其の統一の原理、即ち神を認め得る譯である、と云つて居る。フレーベルは學問の造詣の深い人であるが、又フレーベルの斯う云ふ風な態度と云ふものは、基督教に根柢をおいたものであつて、宗教に對して非常に敬虔の念の厚い人であつた事は、あの人の事業、あの人の著述に於て能く見受けられるが、矢張人間の知識が擴くなるに連れて、敬虔の念が厚くなるべき筈だ、と斯う云ふ事を假定して教育を論じて居る。隨つて學校と云ふものは、どう云ふ意義があるかと言ふと、如何なる種類の學校でも、學校は主に知識を與へるものである。如何に智育に偏すると云はれても、智育を第一に置かなければならぬものであると思ふ。それであるから、フレーベルに云はせると、學校と云ふものは被教育者をして成べく秩序的に宇宙の事を知らせる、宇宙の事を秩序的に知らせるに從つて、益々神に對する敬虔の念が厚くなる。如何なる知識も一として神に關係を持たないものは無いと云ふことを知らせるのが學校の任務である、と斯う云ふ風に說いて居る。フレーベルの此の議論は、近年の幼稚園運動を世界に開始致した幼稚園の研究者としては尠なからず攻擊されて居る、フレーベルの幼稚園を始めた事は、教育上非常な卓見であるけれども、此の統一の原理を知らせると云ふ事が、學校教育の主なる任務であると斯く考へたことは、是は唾棄すべきである。唾棄すべきであると言つては少しひどいが、是はフレーベルの非常なる時代錯誤の考である。併しフレーベルの考の中からして、統一の原理としての神を若し除くならば、甚だフレーベルの名著である「人間の教育」は始めから終り不完全なものである。例へばフレーベルの名著である「人間の教育」は始めから終りまで唯の一頁として天若くは神に淵源し、統一される神を認め、神に對して尊敬を捧げることが人間の任務であると云ふ事を云はない所は無い。

コメニユースは今から三百年前、フレーベルは今から百年前に出て、智育の根柢を

情操意思の根柢の上に置いた事に於て二人とも一致して居る。私は斯う云ふ教育史上の大家の考を、今日の學校教育の偏智育の議論に對して考へて見る時に、非常に大なる感慨に打たれるのである。果して吾々の智育と云ふ事が、情操、意思の教育の根柢に立たなければ、それだけの意味の無いものであるだらうか。或は斯樣な、智育を犧牲にして情意の教育の基礎の上に、立たなければならぬことはない、智育は智育として今日の文化的教育に於て、非常に意味のあるものであると云ふ理由に根據の立たないものであらうか何うか。時代の思潮は非常に變化して、今日の教育思潮がどう云ふ風に向いて居るかと云ふ事は、諸君の御承知の通りであるが、此の問題は今日に於ても尙ほ未解決の問題として、吾々の前に提供されて居るのではないかと、斯う思はれるのである。

然るに、此のコメニュースやフレーベルに對して、注目すべきものはヘルバルトである。此のヘルバルトの考へ方は今日非常に誤解されては居るものゝ、併し實際に於ては非常に世界の教育上に貢献があつたと思はれる。ヘルバルトの考は、今も申す通り非常に誤解されて居るが、併し人間の精神の活動からして考へて見ると、實にヘルバルトと云ふ人は教育の天才であつたと思ふ。教育研究に於てはヘルバルトは非常な天才であつたと云ふ事は否定することは出來ないと思ふ。ヘルバルトは、人間の精神活動は觀念から出來て居る、人間の感情、意思の如きは、全く觀念の關係に依つて始めて起るのである、觀念の相互の關係からして是が出來て居るものであると論じて、主知論に根柢を置いた爲に、今日の教育研究者からして非常な誤解を受けた。今日の教育の思潮は何處に根柢があるかと言ふと、矢張何處までも主情意主義であると思ふ。感情が或は意思を主に置いた所の思想が、教育思想の基調を形作つて居るものであると言つて差支なからう。併しヘルバルトの考を仔細に吟味して見ると、私は、今日は種々の學問が進歩致しても、例の多方興味論と云ふものは、攻擊が出來ないものであると思ふ。一時は嘲笑を以て葬られてしまつたので、其の興味と云ふものは、誤解の上から、さう云ふ事は一向考察に値ひしないと云ふ風に、考へられて居つたやうであるが、今日の精神活動の研究の上から見ると、此のヘルバルトの多方興味論と云ふものは、實に今日の最も進歩した精神活動の研究の上に述べて居る所と吻合して居ると、私は見なければならぬと思ふ。何故誤解を受けたかと言ふと、兎角興味と云ふ事は、

感情と全く同一に見られて居る。今日の心理學の說く所に依ると、興味と云ふものは全く感情と同じことだ、外物の感情と全く同じ意味だと云ふ風に考へて、生徒に興味を持たせると云ふ事は、生徒をして面白がらせると云ふ事だけのやうに、今日の心理學では說いて居るが、それはヘルバルトの云ふ興味とは全く違つて居る。ヘルバルトは興味を決して左樣には觀て居らぬ。ヘルバルトは、人間の精神活動が活動する所の傾向態度を指して興味と云ふのだ、斯う云ふ風に觀て居る。一例を擧げれば、吾々の如き機械學の素養の無い者が或る工場に行くと、澤山の精細な機械があつても少しも之に心が向かぬ、專門以外の者が工場を見ても、工場の機械に付ては全く見ないと同じである。然るに機械學の知識を持つて居る人間、或は職工の生活を送つた人間が、一と度工場に這入ると、小さな機械であつても、悉く興味の種にならぬものはない。或は植物學とか、動物學の知識の無い者が野原を通ると、一向何かあるか知らないで通るけれども、若し動植物學の知識のある者がさう云ふ所を通ると、一つの草、一つの動物と雖も興味の起らないものはない。斯樣な區別の起るのは何の爲かと云ふと、一方の人はそれに對して興味が無い爲め、一方の人はそれに對して興味が有る爲めである、と斯う云ふ風に說いて居る。今日の心理學の語にすると、是は所謂精神活動の態度が出來て居ると云ふのである。機械學の知識の無い者は、其の態度が出來て居らないから工場に行つても何等の精神活動が起らない。機械學の知識の有る者は、唯一の小さい機械を見ても、直ちに精神活動が起つて來る。動植物に就ても同じ譯である。所謂ヘルバルトの多方興味論と云ふものは、人間の精神の活動が多方的に、今言つたやうに態度が出來て居る。如何なる物に接しても、普通の教育を受けない人間から見ると、全く馬耳東風に看過す物を、教育を受けた者は一木一草、如何につまらない物と雖も、精神活動の根元にならない物は無い。斯う云ふ風になるのが所謂教育の結果で、それが目的であると云ふのがヘルバルトの多方興味論だらうと思ふ。最近の精神活動の研究に於ても之と同じ事を云つて居る、少しも今日の心理學に於て、否定する所とはなつて居らぬ。

所でヘルバルトが、人間の精神活動を仔細に吟味して、教育の目的、教育の方法に付て極めて徹底的の意見を立てゝ居るに至つては、實に驚くべきものである。今日より三百年以前に於て斯う云ふ達見を持つて居つたと云ふ事は、實に驚くべきものであ

ると思ふが、其のヘルバルトが教育の目的を論ずるに當りて、折角建設した所の多方興味論は、方法論の目的或は中間目的と云ふものに落ちて了つた。ヘルバルト自身に於ても矢張知識と云ふものは、それ自身に於て獨立の意味を持つて居るものでない。矢張道德教育、又は一歩進んで美的教育の配下に屬すべきものだと云つても、差支ないやうに言つて居るのである。尤もヘルバルトはペスタロッチの説を否定して、其の中に於て決して一つの精神活動は、他の精神活動の配下に屬すべきものでない。それ自身一つの獨立の目的を持つて居るものであると云つて居る。一つの精神活動に他の精神活動が隷屬すると云ふことは、云はぬのであるが、併しコメニュースやヘルバルトの考は、審美教育に隷屬さして居ると云つても差支ない。唯ヘルバルトに至つては極めて精細の議論を述べて居るので、コメニュースの如く大摑みではない。文化を發展させて行くには、如何にすべきかと云ふ事を考へて居つたが、コメニュースは唯漫然と偏知的の考とか偏知説とか述べて居るに過ぎない。ヘルバルトが綿密に、如何にせば一段高い文化を造ることが出來るかと云ふ事を、精細に考察して居つたのは、ヘルバルトの大變な貢献だらうと思ふ。

【三】兒童の思惟作用

私は此の私の「兒童の思惟の研究」に付て、何故コメニュースやヘルバルトのことを引出して來たかと言ふと、兒童の思惟作用を研究するに當つて、第一に起つて來る問題は、兒童の思惟作用は成人の精神の思考活動に比べて、どう云ふ特色があるか、斯う云ふ問題が第一に横はつて居ると思ふからである。特に私はこゝに兒童の思惟作用、及び成人の思考活動、斯う云ふ風な語で現したのであるが、此の兒童の思惟作用には、どうしても成人の思考活動に比べて或る一つの特色がある事は、爭はれぬと思ふ。餘程違つた性質を持つて居る事を、私はどうしても否定することが出來ない。而も其の兒童の思惟作用は、成人の思考活動に比べて決して劣つて居らぬではないか、却つて成人の思考活動の方が、遙に非難すべき點があるのではないかと云ふ點に、考ふべき理由がある。是は前に申した智育と情意の教育との關係に於て、第一に考へられるのである。從來學問的に兒童を研究する所の兒童學に於ては、兒童に對する成人の態度が非常に間違つて居ると云ふことをやかましく論じて居る。近年兒童學は大分

發達して來たものゝ、細かな兒童の研究となると、まだ〳〵前途遼遠であつて、兒童に付て判つた事よりも判らぬ事が遙に多いと思ふのであるが、併し兒童の性質を大體に於て間違はないやうに考へることが、出來るやうにして呉れたのは、兒童學の貢献であらうと思ふ。其の一例を言つて見れば、兒童學をやらない人は、可なり兒童に對して偏見を持つて居る。如何なる學者でも、如何なる思想家でも、兒童學をやらない者は、兒童に對しては一種拔く可からざる偏見を持つて居る。或は、斯う言つたならば私が餘り子供好きであつて、それでさう云ふ馬鹿な事を言ふのではないかと非難をする人があるか知らぬが、どうも私は以前から非常に子供が好きなのであつて、東京で學生をやつて居つて頃、本郷邊に居つて、學校に通ふ途中に其の邊に遊んで居る子供の頭を撫でゝ歩いた。或る時子供の頭を撫でたら其の子供が急に泣き出した。どうしたのかと思つて見ると、其の子供の頭は瘡だらけであつた。それを撫でたものだから痛くて泣出したのであつた。そんな譯で、兒童を愛すると云ふ事からして、矢張兒童を理解することが出來る筈である。或る西洋人で東洋學の研究に名のある人の書いたのを見ると、東洋の文化は、吾々が之を研究する以前には、極めて低級なものであると考へて居つたが、東洋の事柄を段々と調べるに從つて尊くなつて來る。初めは寧ろ敵本主義であつて、東洋の文化を研究して其の缺點を知り、飜つて自分等西洋の文化の短所を補ひ、長所を發揮して行かうと云ふ考でやつたのであるが、段々東洋の研究をやつて見ると、東洋の事物が西洋の事物に優つて居ることに驚いた、と云ふ事を序論に書いてあつた。矢張兒童の研究の如きも此の通りで、兒童の研究をすれば、兒童の價値の益々大なることを認むるやうになることは、どうも疑ひないと思ふ。私は之に就ては始終同僚の人や何かに就ても、さう云ふ觀察をして居るのであつて、澤山さう云ふ例を持つて居る。『どうも自分の家には子供が澤山で困る、少し學問をして見たいと思つて机に向ふと、うしろからやつて來て、お父さんの三階に昇るのだと言つて、頭の上にあがつたり何かする、或は玩具を持つて來てガラ〳〵して困る』と言つて、頻にこぼして居る人があるが、さういふ人は其の人の專門の學問が、餘りに兒童に緣故が遠いからで、兒童の研究を少しもやらぬからして、斯う云ふ苦情が起るのであらうと思ふ。

私は兒童の研究と云ふものは、兒童の價値をして益々高からしむるものであると思

ふ。隨つて自分が子供が多かつたら、多いだけそれだけ知識が大になる可き筈である、賢こくなるべきである。是は女などに取つては殆ど疑ひないと思ふ。三人よりは五人、五人よりは十人と、其の子供に比例して母親が賢こくなると云ふ事は、どうも爭へぬやうである。さうして私は、男の方でも女の方でも、教育家になる第一の資格は、自分が子供を得ると云ふことであると思ふ。此の節の產兒制限論などに對して、一大ヱキセプションを置いてもらはなければならぬのは、教育家でなければならぬと思ふ。隨つて文化運動の第一の項目は、教育家に成べく多く子供を生ませる、斯う云ふ風にどうしてもならなければならぬのである。人の子供を教育する者が、自分の子供を養育しない理窟は無い、それが直に人の子供を教育する上に於て、非常に有益な見識を與へしむるものに相違ない。それで私は、最早、兒童はつまらないものであると云ふやうな考を持つ人は無からうと思ふが、而もそれでも今日に於て、自分の子供の多い事に非常に苦情を言ふ。子供は餓鬼と云つて、餓えた鬼のやうなものであると云ふ風に考へて居る人が、隨分あるのは實に不思議である。どう考へても私は、子供と云ふものは親を非常に賢明にするものであると思ふ。大なる教訓が兒童からして得られて來る、是はどうも爭へぬ。

それで私は、此の理窟からして直ちに推した譯ではないが、兒童の思惟作用を調べて見ると、成人の思考活動に比べて、遙に長所があるやうである。成人の精神活動殊に智的の活動に於ては、極めて抽象的な活動になつて居るが、子供の思惟活動に於ては此の抽象の度が割合に低い。近年物的思考と云つて、抽象的言語的の思考に對して、物的思考と云ふことを、人格的教育學などに於て、非常にやかましく說かれて居る。此の物的思考と云ふものが、兒童の思惟作用に著しく見えるやうに思はれる。私は物的思考からもう一段進んで、身體的思考と云ふことを考へる。子供は實に面白いものであつて、大人になると、笑ふにしても鼻の先で笑つたり、口の先で笑つたり、顏で笑つたりして、一部分で笑ふやうであるが、子供はさうでない。子供は泣く時には身體全體で泣く、笑ふ時には身體全體で笑ふ、考へる時には身體全體で考へる。大人になるに從つて段々ずるくなつて、どこか鼻の先で始終物をやつて居るやうな癖が、絕えないやうである。私は矢張成人の思考と云ふものは、身體的の思考にならなければ、眞の思考にはならないと思ふ。是は思考だけではない、笑ふならば總身で笑つて、泣

くならば總身で泣く。さうして鼻の先や口の先で笑つたりして居る間は到底人間には
なれない。今日の師範教育などに於て、兎角鼻先だけで以て笑ふ教育をやつて居るの
は非常に間違ひであると思ふ。どうしても身體全部で思考し、身體全部で以て笑ふや
うにならなければいかぬと思ふ。是は甚だ獨斷的のやうであるが、尙ほ段々此の話の
進むに從つて說明を加へる積りである。

斯ういふ風に、兒童の思惟作用には、却つて成人に對して教訓を與へることが少く
ない。却つて成人の思考活動よりは、兒童の思惟作用の方が吾々に多くの教訓を與へ
て居る。況んや教育家は斯う云ふやうな、兒童の思惟作用の性質を知らないで、兒童
の思惟作用を練つて行くことは出來ない筈である。若し教育家が、成人の思考活動と
違つた特有な兒童の思惟作用を知らないで、さうして教育が出來ると云ふならば、そ
れは一大矛盾と云はなければならぬ。斯樣な兒童の思惟作用の特質があるのであるが、
それにも拘らず、教育學や心理學の書物に於ては、兒童の思惟作用と云ふものは一體
有ることであるか、と言つて存否を疑ふ議論が非常に多い。甚だ是は妙な議論のやう
であるけれども、實際に於て兒童にも果して思惟作用と云ふものがあるものであらう
かと云ふ疑を持つて居る議論が尠なくないのである。

【三】思考と思惟

前回に、思考活動を特に分つて兒童の思惟作用、成人の思惟活動と區別をして言つ
たのであるが、是は本能と理性である。理性或は悟性と云つた方が宜いかと思ふ。普
通一般人間以外の動物に於ては、本能に依つて活動する、人間に至つて始めて悟性、
理性が發達して、玆に始めて思考活動と云ふものが起る。隨つて人間の幼少の時代に
於ては、眞の思考活動は無い。斯う云ふ議論がやかましく、今迄稱へられて來て居る
のである。此の點からすると、兒童には思考活動と云ふものは全く無いと斯う言つて
も差支ない譯である。

近年思考の形式として稱へられて居る所に依ると、思考は總て問題に始まり解決に
終る。問題と云ふものが自覺され、意識されて、其の意識され自覺された問題が、精
神の活動を促して、さうしてそれが解決になつて止む。斯う云ふのが思考の形式であ
るが、此の思考形式の上から考へても、兒童の精神活動の中には、所謂思考活動と云

ふものは存在せぬ。たかだか兒童の思惟作用には所謂聯想があるだけで、思考と云ふものは形成しない。聯想だけに依つて精神の活動が動いて居るだけであつて、正規の思考と云ふものは出來ないといふ。此の點が兒童の思惟に付て、餘程重大なる事柄であると思ふ。第一には、兒童は本能的の活動はやるけれども、悟性或は理性的の活動はやらぬ。第二には、兒童は、問題から始まつて困難を感じ、此の困難を排除する爲に精神活動が起つて解決に終ると云ふ、此の思考活動が起らぬ。斯う云ふ議論が繰返され、論ぜられて居るやうであるが、斯う云ふ大まかな議論で以て、兒童の思惟作用は全く思考活動とは同時に見られぬと云ふ事を斷定することは、大いに疑はしいと思ふ。まだ〳〵こんな議論では、さう斷定は出來ないのではなからうかと思はれるのである。何故さう云ふ事を私は疑ふかと言ふと、所謂本能と理性、悟性の關係の如きも、兒童の場合には本能だけの働きであつて、理性、悟性は兒童の働きの中には毛頭無いとは言へないと思ふ。思考の形式の上から言つても、兒童の精神活動中に、此の問題が自覺され、其の困難を感じて、それを排除すると云ふ精神活動が無いと云ふことは毛頭ないと思ふ。さうすると矢張是は、精細なる兒童の觀察並に實驗に依つて、之を決定すべきものであつて、つまり兒童の思惟の研究からして、始めて此の斷定が起るべき筈である。斯う云ふやうに申さなければならぬ。それで特に私は、思考と思惟と二つの語を使つて、此の區別を分り易いやうにしたのである。

一體思考活動と云ふ此の思考と云ふことには、樣々の意味がある。どう云ふ意味であるかと言ふと、(一)觀念を有する、(二)聯想を有する、(三)形式を與へたる活動である。世間一般に思考と稱へて居る精神活動の中には、第一に觀念を有して居ると云ふ事、それ自身が思考であるといふ場合がある。「貴方はさう云ふ考が有るか無いか」と斯う言ふ時に、唯さういふ觀念を自分が有つて居ると云ふことだけで以て、已に其の思考活動を有つて居ると云ふ風に、直ちに理解することがある。第二には聯想する事、即ち前に經驗した事を今の場合に聯想すると云ふ事だけで以て、思考活動をしたと云ふ風に考へられることもある。第三には前に言つた思考の形式を取つて、困難を排して問題を解決すると云ふ實際の事實があつて、始めて之を思考と言ふこともある。斯う云ふやうに、普通の言葉の上に於ける思考と云ふものを三種に分けて、さうして第三のものだけを純粹の思考活動だと、斯う云ふやうに論じて居る學者もあるやうで

あるが、是は至極尤もなことである。形式の具はつて居る完全な思考活動と云ふものは、成人の場合には非常にそれが多く現はれるけれども、兒童の場合には非常に少ないと云ふ事は或はあるかも知れぬ。第二の場合には、思考活動の要素と云ふものは、少しも無いと斷言することが出來るかと云ふに、必ずしもさうでない。今擧げた第二第三の區別と云ふものは、極めて區別が困難なのであつて、畢竟第二第三と云ふやうに明瞭に區別されるものではなからうと思ふ。是は所謂心理學の方で、習慣の法則に依つて直ちに第三のものは第二になると云ふことは、說明が出來るのであるから、第二と第三のものは、本質上の區別としては、直ちに之を受取ることは出來ないと云はなければならぬ。それであるから私は、此の研究の初めに於て、假りに兒童の精神活動の第二第三を含蓄させて之を兒童の思考作用と云ひ、特に第三の完全なる思考活動を甄別して、第三の完全なる思考活動を成人の思考活動と云ふ風に、言葉の上に區別してお話して見ようと思つたのである。是は觀察實驗の材料を說明するに付て此の問の關係を明かにして行かうと斯う考へて居るのである。

【四】思惟作用の特質

周遍性——思惟の轉移——易簡性——推展性

今申上げたやうに、兒童の思惟作用に付ては、第一に價値の問題に付ても非常に問題があり、第二には存否の問題——存するか存しないかと云ふ問題もある。第三には、兒童の思惟には、成人の思考作用と比べてどう云ふ特色、特質があるだらうかと云ふ事が、是が極く重大なる問題でないかと思ふ。尠くも第三の問題に付て考へて見なければ、兒童の思惟の性質は、明瞭にならぬだらうと思ふ。それで此の第三の題目の下に、樣々の兒童の思惟の性質を擧げたならば、恐らくは大概の兒童の思惟作用に關する事柄は、之を解決することが出來るのではないかと自分では考へて居る。

尙ほ一寸一言申して置きたいのは、問題の自覺意識と云ふ事からして、思考活動を論ずるやうな論もあるけれども、私はどうも是は不完全なる議論ではないかと思ふ。果して兒童の思惟作用と云ふものには、困難が自覺され、意識されるかどうかと云ふやうな事だけでは、兒童の思惟作用の特色を、見ることは出來ないやうである。困難

と云つても、此の困難と云ふ事からして、所謂陶冶論が出發して、成べく被教育者には困難を自覺させ、困難を意識さして、さうして之を自ら解決せしむると云ふ事が、大切であると論ずる者もあるが、尙ほ仔細に實際の思惟作用を見なければ、困難から出發すると云ふことは出來ない。それから尙ほもう一つ重要なものは、觀念の方からして、兒童の有する所の觀念と云ふものは、恰も游離して居る所の元素のやうに、其の化合力は非常に大であると云ふのである。是は譬喩として隨分ひどい譬喩であるけれども、兒童の有して居る觀念は、成人の有して居る觀念に比して、非常に化合力が强い、結合力が强い、もつと他の言葉で言へば、極めて活き々々して居つて活潑々地である。之に反して成人の觀念は、是は兎角形式化し、抽象化したる觀念である。斯う云ふやうに觀て居る人があるが、之も此の言葉通りに直ちに受取るべきかと云ふ事は、大變問題であらうと思はれるのである。

是等の問題に付ては、尙ほ後に、多少調べた材料を說明した後に、是等の問題の解決を試みようと思ふのである。

被驗者は尋常一年の第三學期三十三名、數は極めて少ないのであつて、私は斯う云ふ事から統計を取らうとは思はぬ。統計を取る事は、私の立場から見て餘り有益だとは思はぬ。先づ一つの組に就てやつて見た結果をあげる。それに斯う云ふ問題を與へて見た。問題は五つあるが、其の第一の問題は、

隣りの家に一つの大事件が起つて澤山の人達が集まつた。先づ第一に巡査が來た、それから醫者が來た、其の次に坊さんが來た。隣りの家には何事が起つたのであらうか。

斯う云ふ問題である。此の問題に對する回答を三十三名に求めた所が、兒童の思惟作用の特色が、之に非常に能く現れて來て居る。三十三名の中、此の問題に就て正しく解釋を下した者が一人しか無かつた。さうして他の者はどう云ふ解釋を下したかと言ふと、樣々の解釋を下して居る。

病氣があつたのだ。

死人があつたのだ。

火事があつたのだ。

此の三つが殊に數多くなつて居る。それから順序で申すと、

泥棒が來たのだ。
喧嘩があつたのだ。
腸窒扶斯があつたのだ。
肺病があつたのだ。
猿が來たのだ。

と云ふのが一名宛ある。どう云ふ譯で「猿が來た」と云つたのか、是はどう云ふ經驗か分らぬ。それから意味の不明な者もある。それで私は之を調べる上に於て、斯う云ふやうに調べて行くことが出來ると思つた。

巡査來……A
醫者來……B
僧侶來……C

と斯樣に觀る。さうすると、此の兒童の思惟作用の第一の特質として認めて宜いと思ふ事は、何故に此の問題に付て正解者が唯一人よりなかつたかと云ふ事を推して考へて見ると、詰り兒童の思惟作用には、所謂周遍性が缺けて居ると云ふ事である。

私は假りに之れを周遍性と名を附けたが、當つて居るのではないかと思ふ。其の周遍性と云ふのは、どう云ふ意味かと言ふと、今の問題の條件は巡査來、醫者來、僧侶來と云ふ三つしか無いのであるが、兒童は心の中に於て三つの條件を遍く考へると云ふことは出來ぬ、それは困難である。其の中或る者はAだけを考へ、或る者はBだけを考へ、或る者はCだけを考へ、或はABだけを考へBCだけを考へて、ABCの有らゆる條件を考へて結論を引出すと云ふことは、兒童には困難であつた。是は周遍性が缺けて居るので、是が兒童の思惟作用の一の特質と見て宜からうと思ふ。それで此の立場からして分析して見ると、BとCとの二つの條件を考へて出來た答が病死である、それが七人あつた。此の外に「隣の赤ン坊が死んだのだ」と云ふのが一人あつた、是は又一つの兒童の具體性である。兒童の觀念は、成人の觀念に比して具體的であり、實物的である。是が其の特質になつて居ると云ふ事は、否定の出來ない事實で、以上は其の一例を示したものである。兎に角BとCの二つの條件を考へて出來た答が、合せて八人、それからBだけから考へて出來た答が病氣であるが、是が九人ある。Aの巡査來とCの僧侶來と云ふ此の二つを考へないで、單にBの醫者來から來た答が九人。

それから第三に、Aは必らず考へられたに相違ないが、Bが併せて考へられたのではないかと思ふ。答が、例へば火事と云ふのが五人、喧嘩が一人、泥棒が二人。AとBの二つから考へられて出來た答と思ふものが腸窒扶斯で、是が一人、それから肺病と云ふ答をしたのが一人ある、是は傳染病であるからと云ふ積りで斯う答へたのでないかと思ふ。

BとCの二つの條件を考へた答　病死　八人
Bのみを考へた答　病・氣　九人

AとBを併せ考へられたと思はるゝ答
- 火事　五人
- 喧嘩　一人
- 泥棒　二人
- 腸窒扶斯　一人
- 肺病　一人

AとBの二つの條件を考へた答

斯う云ふ風に、有らゆる條件をABCと云ふ符號で現して、其の表された要素だけを考へて結論が出來て居る。即ち與へられた問題の構成要素の中の、どれかを考へて結論が出て來たものと、斯う云ふやうに之を分析して考へることが出來るのではないかと思ふ。

それで何故私は此の點を非常に大切であるかと云ふと、是は皆樣も御承知であらうが、ジェームスの議論の中に、適當な推理が下される爲には、大前提と小前提の二つが必要であつて、其の大前提と云はるゝものは所謂博學である。小前提と云ふものは、所謂心の鋭敏である。ジェームスは、人間の推理作用と云ふものは、博學と云つて、多く物事を知つて居る事が、矢張適當の推理を行ふに大切なる一つの條件である、もう一つは精神の鋭敏であつて、心の鋭敏なる働を持つて居ると云ふ事が、正しい推理をするに大切である。極く正しい推理と云ふものは、どう云ふ風にして出來るかと言へば、多くの知識を有し、且つ心の鋭敏なる人が正しい結論を出し得る譯である。と斯う云ふ事をジェームスは書いて居る。私はジェームスの此の考は非常に適當な考で、殊に教育の立場からして考へて、適當な考でないかと思ふのであるが、此のジェームスの所謂博學と云ふことはどう云ふ意味であるかと言ふと、成人に就てはどうしても知識が廣くなかつたならば、一つの問題を解決するに適當な解決が出來ない。併し幾

ら博學であつても多くの知識を有して居つても、或る一つの問題を解決するには、能く之を分析し綜合して、其の問題は果してどう云ふ意味であるか、鋭敏なる精神を以て其の關係を見出さなければ、適當なる解決は出來ないのである。ジエームスの此の二つの方面は、正しき推理を行ふに付ては大切だと思ふ。

そこで之を兒童の思惟作用に付て適用して見ると、前に私が申した周遍性のあると云ふ事は、ジエームスの博學に這入つて居る譯である。兒童の場合に於ては、單に三つの條件であるが、其の三つの條件を十分に考察することが出來なくて、或る者は一つ、或る者は二つの條件だけしか考へることが出來ぬ。それで何故に兒童は唯僅に三つの條件を考へることが出來ないかと言ふに、是は兒童の精神の發達の幼弱、即ち兒童の精神が活動十分でない爲に、斯う云ふやうに三つを見ることが出來ない。是は恰も心理學で盛んに云はれて居る所の瞬間提示、一瞬の間書いた物を見せれば、其の中幾つを見ることが出來るかと云ふ事を實驗して見ると、或る一瞬間に示された物を、數多く見ると云ふ事は、人間の精神の發達に依らなければ是は見られぬ。一定の難かしい物を見るに至るには、兒童が發達しなければ見えないのである。發達の實驗に此の瞬間提示と云ふ事を盛んに使つて居る。それと同じやうに、精神の發達が不十分である爲に、有らゆる條件を考察の下に置くことが出來ない。斯う云ふ事が第一の理由として說明され、又考へられるに相違ないと思はれるのである。而して第二に考ふべき事は、ＡＢＣの三つの構成要素の中で、最も多く考へられるのは何であるかと言ふと、ＢかＣである、ＡよりもＢＣの方を多く考へる。所謂醫者の來たと云ふ事と、坊さんが來たと云ふ事、それが多く考へられる。私は此の子供の心を引附ける相對的の價値と云ふことに付て、非常に參考になる所がありはせぬかと思ふ。坊さんの來たと云ふ事は餘り兒童の注意を惹かないのではないか、寧ろ巡査の來たと云ふ事が、最も注意を惹くのではなからうかと思つたのであるが、此の三つの要素の中に於て、僧侶が來たと云ふ事と、醫者が來たと云ふ事が一番兒童の注意を惹いたものと見える。之を逆に言ふならば、兒童の從來の經驗の中で、現在の問題を解決する爲に、最も引出し得るやうに記憶されて居つた所のものはどれであるか、現在の問題を解決する爲に最も引出すことの出來るやうになつて居つた經驗は、どれかと云ふ事に考へて宜いのである。人間の注意と云ふものは、記憶から對照して見ることも出來れば、現在を注意

して見ることも出來る。是は同一精神活動の兩面であるから、區別する必要は無いと思ふが、是は地方々々に依つて非常に違ひ、學校々々に依つて非常に違ふかと思ふ。先づ私は第一に構成要素と云ふものを分析をして、さうして構成要素の中、どれが最も兒童の注意を喚起し、兒童の經驗の中、現在の問題を解決するに容易く導き出されるかと云ふ事を調べて見ようとしたので、それが今言つたやうな結果になつたのである。私はジエームスが主學と心の鋭敏とを擧げたのは、非常な達見であつて、人間の思考作用を教育から觀る上に於て、非常に有益なるヒントを與へられたと言ふことが出來ると思ふ。尙ほ一段深く考へて見ると、ジエームスの心の鋭敏と博學と云つたのは、餘りに分析し過ぎて居るのであつて、縱令博學であつても或は經驗を澤山持つて居つても、其の經驗が直ちに現在の問題を解決するに、皆同一の力を持つて居るものとは云はれない。同一の經驗、同一の知識を持つて居つても、其の同一の經驗、同一の知識と云ふものは、現在の問題を解決ずるに皆同一と云ふことは出來ない。巡査が來たと云ふのは、どう云ふ事か知らない者は無からう。然るに巡査が來たと云ふ事を考の中に置かないで、さうして其の他の事を考へると云ふことは、詰り吾々は經驗を有するからと云つて、必ずしも之を以て現在の問題を解決するに使はれると云ふことは言はれない。是は教育上非常に大切であらうと思ふ。如何なる知識を與へても、其の知識が現在の問題を解決する時に、直ちに是が出て來て、其の問題を解決するに與かると云ふ狀態に置くことが大事であると思ふ。所謂博學と云ふことは活字引と云ふことであつて、其の知識が現在の問題を解決するに、少しも役立たぬと云ふのは、詰り其の知識が現在與へられた問題を解決するに、直ちに役立つと云ふ狀態に置かれて居ない。甚だ是は言葉が足らぬやうであるが、是は非常に大切な點でないかと考へる。ジエームスの博學と心の鋭敏と云つたのは、是は成人に就て云つたので、大前提と小前提との二つに分けて、博學、心の鋭敏と云ふ事を云つたのであるが、其の多くの知識を持つて居ると云ふ、其の知識は必ずしも問題の解決に役立つと云ふことは云へないのである。昔の格言に Non multe sed multum と云ふことがある。是は、「唯多いだけではいけない、深いものでなければ」いけない斯う云ふ風に譯して宜いと思ふ。數の多い知識を與へただけではいけないので、其の與へられたる知識が役立つやうに、深い知識であつて、それが現在の問題を解決するに役立つものでなければいかぬと云ふ

ので、是は昔から云はれて居る格言であるが、それがこゝに當ると思ふ。兒童に與へた所の經驗知識と云ふものは、唯ジェームスの言葉では、廣い知識と云ふやうに聞えるけれども、問題の解決に直ちに役立つ知識でなければならぬと云ふことになるのである。

今申した事を括つて言ふと、詰り兒童の思惟作用に於ては、第一に周遍性が缺けて居る、兒童は廣く觀ることが出來ない、狹い範圍より外觀ることが出來ない。是だけの說明で以て滿足し得るかと云ふと、それだけでは滿足が出來ない。其の知識は現在の問題を解決し得る狀態に置かれない、唯今迄の經驗の中で、最も活潑潑地である所のものだけが出て來て働くことが出來るやうになつて居る。此の點を私は考へなければならぬと思ふと大體斯樣に申すことが出來ると思ふ。それで前に述べた如く、問題の構成要素を分析して、其の分析された構成要素の中に於て、どれが最も力があるか。其の力ある要素は、如何にして經驗されたものであるかと云ふ事を知ることは、教授學習の上に於て最も大切なる問題であると思ふ。

前に兒童の思惟の作用を檢査する爲に、一つの問題を與へて、それの解答を求めた結果を申して置いたが、其の他にも四つばかり問題を與へてみたところが尋常一年生の中に少し意外な答を出して居るものがあつた。例へば木の枝に五羽の雀が止つて居る、鐵砲で二羽の雀は擊たれたが、あとの雀はどうなつたかと云ふやうな問に對する答を見ると、約十一名ばかり間違つた答を出して居る。鐵砲を擊たれては、雀は逃げない筈はない、逃げないと云ふことは殆ど考へられないことで、どうしても氣が附きさうな事であるのに、三分の二は出來たが三分の一は間違つて居る、其の樣な結果が現れて來た。問題中、最も多くの兒童に能く出來たのは、米國でも斯樣な問題は使はれて居るが、自動車が疾走して誤つて斷崖から墜落し、自動車は勿論乘客の四肢五體もメチャ〳〵になつてしまつた、其所を通りかゝつた人が驚いて、醫者を伴れて來て診せると、醫者の言ふには、是は一ヶ月で必ず全治すると言ふた、此の醫者の言ふたことが正しいかどうかと云ふ問題である。自動車も乘客も斷崖から墜落して、メチャ〳〵になつてしまつたものが、病院へ入ると一ヶ月で全治すると云ふのであるから、いかに小い子供でも、是は間違つて居ると氣附く筈である。今申す如く是れが最もよく兒童の答が出來て居る。次の問題は、父親が一本足の短い低い机を子供に與へた。

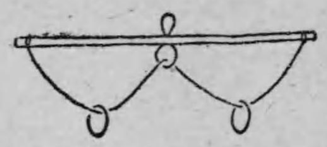
之を恰度好くしやうと云ふので、他の足を切れば宜いと言ふた。父親の言ふことが正しいかどうかと云ふ判斷である。全體低い、短かい机の足を、更に切るのであるから、好くなる譯がない。是も大多數の兒童に答が出來て居ります。是等の問題中、最もむづかしかつたのが、前に擧げた隣家の事件で、是はタツタ一人しか正當の答をするものがなかつた。

それから二番目に出した問題で、是も兒童には餘程難解であつたと見えて、中つたものが少なかつた。それは子供が一本拾錢の筆を買ひ、再び其の店に來りて前に買つた拾錢の筆を出し、前に拾錢の金をやつたのと此の筆を返すから貳拾錢の筆を持て行くと云ふ、是でどつちも損益なしに貳拾錢の筆を貰つて來ることが出來るかと、極めて簡單な問題のやうであるが、兒童には餘程むづかしかつたと見えて、正當の解釋をしたものが極めて少なかつた。此の問題の難易の順序は、

(1)	隣家の事件	正解者　一人
(2)	拾錢の事	同　十二人
(3)	木の枝の雀	同　二十二人
(4)	自動車の事故	同　三十人
(5)	机の足	同　二十五人

兒童數三十三人の中で正解者が是だけであつた。數の思惟は非常に抽象し易いのであるが、式算と運算などの應用問題との差違、懸隔が無くなり易いやうな工合で、此の一年生に於て、斯樣な形式と實際との間に隔離が現れて居る。木の枝に雀が五羽止つて居て二羽鐵砲で擊たれたが、あとの雀はどうなつたかと云ふ問に對して、三羽の雀は木に止つて居ると云ふ答が大分多かつた。唯數を取扱ふ立場から云へば、三羽木に殘つて居ると云ふ考も、無理ならぬやうであるが、實際の經驗上から云へば、鐵砲の音響に驚いて皆な逃げてしまつたと考へられる譯である。思惟の思索、思考と、實地の境遇を基とした思惟、思考と云ふものゝ間には、非常な隔離が出來るやうに思ふ。學校の教育を、實際の經驗から離れないものにしやうとか、或は今日の學校教育を如何にすべきかとか云ふやうな事は、大問題であるが、既に一年生に於て、其の樣な大問題が現はれて居る。更に先年私が創作能の檢査をやつたとき、其の一問題として、左の圖に示すやうな問題を出した。

斯樣な道の割目の奥の方へボールが落ちた。其の穴は曲つて居て、手で取出すことの出來ない程深い。此のボールをどうしたら取出すことが出來るかと質問した所が、若い青年がどうして取出して宜いか答へられなかつた。他の言語、文章、算術に關するやうなものは、立派に答を出したが、之れ一つどうしても答が出せない。餘程其の青年は心にかゝつたものと見えて、檢査室を辭さうとして、再び立歸つて、あれはどうしてボールを取出すことが出來ますかと云ふて尋ねる。ヒントを與へやうとして、ボールと水とどつちが重いかと訊くと、それは水が重いと云ふて、まだそれでも氣が附かない。最後に水を其の穴へ注いだらどうかと云ふと、成程さうであつたか、氣が附かなかつた、と云ふて出て行つた。私は斯樣な働きが、單にウイット即ち頓智と云ふだけのものであらうか、或は學校の教育との關係上、重んじなければならぬ一種の精神上の働きではないだらうか、餘り學校の教育は形式化して、日常吾々の經驗する境遇と云ふものに、それが十分働き得ない狀態になつて居るのではないかといふやうな事を、始終感せしめられるのである。又斯樣な問題も出した。



一方の輪を此方へ通さうとすると、此穴の中を通過することが出來ない。斯樣な種類のものは誰でも訓練を經なければ、いかなる學者でも解くことは出來ない。斯樣な檢査をやつて感ずることは、創作、工夫の事のみならず、斯樣なものゝ中には種々のケースがあつて、非常に種類が多い。是は昔の教育學者が一般智能の陶冶と云つたやうな言葉は、其の字義の通りに適用が出來ない。人間の創作、工夫、思考と云ふやうなことは、矢張り思考さるゝ事、工夫される事柄に依りて非常に差違があつて、決して或る一方の種類の創作、工夫をしたと云ふて、他の種類の創作、工夫に直にそれが轉移することは出來ぬ、と斯ういふ樣な事が著しく眼について來る。

それで兒童の思惟の中に於て、一般的の陶冶とか、又は或る種類の思惟が、他の種

類の思惟に轉移する、其の轉移の度と云ふものが、成人と兒童と比較して、何方が大であるかと云ふ問題が起つて來る。是は學術的に非常に意義あるものであつて、私は他の理由からして、轉移は實際的のものと云ふ說に反對して居るのであるが、矢張り轉移と云ふことは、或る意味に於て出來ると云ふことを主張したいのである。兒童の思惟の場合に於ては、轉移と云ふことは極めて少い。事實轉移の少いのは、正當な解釋をすることが少いのだと云ふと、そこに非常に誤解が起るのである。正當な或る種類の思惟活動に於て、正當な解釋、正當な結論に達した場合は、他の種類の思惟活動に於ても矢張り正しき思惟活動に達する、其の轉移は正しいと云ふことを眼中に置いた其の正當の思惟に於ては、轉移の度が少いものであると、斯う言はなければならぬ。此の立場から兒童の思惟の研究の上に於ても、ヘルバルトなどの言ふ多方興味で、成べく多くの種類の思惟を兒童に行はせると云ふことが、極めて大切である。特に此の種類の思惟が正當に出來れば、他の種類の思惟も自然出來るであらう、自然成功するであらうと云ふやうな想像は、間違が多いことになる。出來るだけ多くの種類のテピカルな表式的の思惟活動の訓練をする必要のあることは爭はれない。前の例を取つても、其の樣に斷言することが出來る。モウ一つ他の例を取れば、是も創作能檢査の時に試みた算術の問題構成の極めて容易であるやうに思はれる、或る式を合せて、其の式に當篏るやうな問題を構成せよ、と斯樣な問題を與へたが、此の問題構成能と云ふものは、經驗の無いものに取ては、非常に困難なものと見えて、それでどうしても算術の問題構成をやらして置かなければ出來ないことが分つた。故に算術の教授上、問題構成は重要な部分の場面であると見なければならぬと思つた。兒童の思惟の性質の上から考へて、決して一方の思惟が堪能になつたから、他の種類の思惟も堪能になれると云ふことは、間違が多いので、成べく多方面の思惟の訓練が必要であることも繰返して言ふて置きたい。是が前に言ふた周遍性の缺如と云ふことに對して、第二の兒童の思惟に付ての特質として考へ得る結論ではないかと思ふ。

次に易簡性とも謂ふべき、一定の問題を與へられ、其の解決するに當つて、自由自在に其の問題を變へられるやうに、或は形容詞になつて居るものを副詞に變へたり、副詞になつて居るものを形容詞に變へたり、極めて自分の解決に都合の宜いやうにする性質が非常に盛んである。言はゞ簡單に容易にして、自分の解決し得るやうに、問

題を變へて行く。伊太利人のバオラー、ロムブロソーと云ふ人の調べたものゝ中に一體子供の發達上に於て、或る問題を與へられ、其の問題に對して答へ易い程度、即ち與へられたる問題に答へらるゝプロバビリティーは、發達の程度によつて違つて居る、或る時は子供は唯だ知らぬ、知りませぬと一點張で答へない場合がある、又或る場合には少し困難な問題でもサラ〳〵と答へる、其の答は多くは間違つて居るけれども、サラ〳〵と答へる場合もある、即ち發達の程度によつて答解の多寡がある、此の點から考へると順序として最初はどんな事でも答へる、其の次は答へなくなる、それから其の上へ行くと答をするやうになる、研究の結果斯樣な法則を述べられて居る。尙ほ兒童の性質は獨逸或は伊太利等に於て研究した結果、民族の性質に依ても大分違ひ、或は國語の性質に依ても大分違ふと云ふことが、追々分つて來たやうであるが、日本の兒童は如何であらうか。例へば伊太利語は韻の同一から、同韻の働きで知らないことでも答へる、韻の同じものは間違つたことまで取扱ふと云ふ性質が伊太利の子供に非常に多い。然るに獨逸の兒童は、伊太利の子供の如く間違つた言葉で答へるものが少い。是は伊太利人と獨逸人の民族性質から來たものであるか、言葉の相違から來たものであるか、此の點に爭ひはあるやうであるが、日本の兒童に就て見ても、ズンズン答へる場合と、答を澁る場合のあることは爭はれぬ事實である。兎に角兒童の問題に對する態度と、成人の問題に對する態度とは非常に相違がある。成人の問題に對する態度は、出來なければどうしても出來ぬと、どこまでも主張するやうである、兒童の場合に於ては、出來ないと言ふても絕對に出來ないと云ふことではないので、判りませぬ、出來ませぬと言ひつゝ、其の答を書くやうな場合が多くある。困難の意識は、思考の重大な項目であるが、思惟の困難の意識は、兒童の思惟に於ける場合と、成人の思考活動の場合とは、意義が違つて居るやうに思ふ。困難の意識が固定的のものでなくして、極めて困難の意識が淺い。困難であると思つたことが直に容易くなる。是が大變成人の思考と違つて居ると言はなければならぬ。唯成人の場合に於ては最初には一旦出來さうもないと思つた事でも、努力して工夫に工夫を重ね、最後に突破して解決を求むると云ふことは、成人の思考の特質であつて、兒童の方には、其の樣な有利的に思考を繼續すると云ふことはない。兒童の場合には、困難が極めて移り變り易い性質を有して居る。斯樣な事からして兒童の思惟には答に窮せぬが、成人であると

どうしても自分に解決が出來ぬと云ふ制限が、判然定つて居るから或る場合には窮するが、兒童には其の制限が無いから、どんなむづかしい問題を與へられても答に窮しない。之に付て非常に興味を感ぜらるゝのは、第四十五議會の速記錄を見ると、質問されると答辯に窮する處から、質問の打切と云ふことを盛んにやつて居るやうであるが、是は子供の思惟には無いことである。どんな困難な質問が來ても窮することがない。其の點になると、堂々たる議會で有名な人の思考活動と雖も、兒童の思惟活動には遠く及ばぬものではないかと思ふ。それは別として兎に角兒童は解答に窮せぬと云ふことは事實である。よく書物の中に、絶對の立場から見れば、アと云ふてもウと云ふても同じことではないかと云ふやうなことが書てあるが、兒童は此の絶對の立場から見て、アと云ふもウと云ふも大した差違がないと云ふことを自覺して、答解に窮さない。いかなる問題に對しても、兒童の態度は暢氣であり樂天的である。斯樣な性質を易簡性と云ふ言葉で現はすことが出來はせぬか。兎に角此の點は檢査實驗の上に於て著しく現はれ來る性質である。

此の易簡性に關聯して注意を願ひたいのは推展性であつて、兒童の思惟作用には驚くべき推展性と云ふものがある。此の言葉の當否は別として、それはいかなる意味かと云ふと、兒童は極めて微細な類似から推展して行く。僅に類似する所があると、それを基として推し開いて行く。成人には餘りそれが微細な類似であるから、到底其の類似を基として推して行くことは出來ぬが、子供にはそれが出來る。前に擧げた隣家の事件と云ふやうな問題に付ても、隣家の猿が來たのだ、と云ふ答を出したのも、嘗て隣家へ猿か逃げ込んで、巡査が來たと云ふやうな事でもあつたので、巡査、僧、醫者と來たと云ふ問題に對して、猿が來たのだと答へるやうに、微細な類似を推して行く。私などは時々子供に苦しめられる。私と同じやうに禿頭で、扮裝の粗末な人を見ると、子供はお父さんが來た、お父さん〳〵とやる。是も先年子供の畫を調べたとき、自分の父親と母親の顔をどう云ふ風に描いたかと云ふと、上圖の樣に描て居る。頭の上の丸い珠は何かと云ふと、

髪を丸めた髷だと云ふ。是に由て觀ると、子供が意識して居る父親、母親の本質は、頭にあると云ふことが明瞭である。畢竟極く微細な類似から推展して行く力が、兒童には非常に偉大である。類似の一點から、違つた多くの點を見遁して、同じ範疇に入れて行かふと云ふ力が大である。之に付て考へると、ヘルバルト派の教育學には、類化、同化と云ふことを非常に重んじて、人間の精神活動は類化、同化作用である、思考活動は全く類化作用であつて、嘗て經驗したものが基となり、それに類似したものを同化して行く、類似が基となつて新らしく與へられたものを類化し同化する、故に兒童の教授には第一に豫備の階級を置て、別に類似した經驗を撰出しなければならぬ、と斯樣な事を言ふて居るのであるが、之に對して、實驗教育學者のメスメルなどは、盛んに之を攻擊して、若し從來の經驗、今までの經驗のみを尊重し偏重して、其の類化作用を重く視るときは、極めて不正確な思想が出て來るのであらう、何故かと云ふと、兒童は從來虎猫と云ふものを知つて居る、其の猫から今度は眞の虎を想像して、虎を知るに方り、いかに新らしき虎の知識を與へても、其の虎の知識にはどこまでも、猫の色彩を脱せざる虎となるであらう。詰り類似の點から類似の點のみ强く見て、些細の點に十分注意せざる結果、新らしく與へられたものの眞相を捉へることが出來ない。前の經驗と云ふものを基として新らしきものを理解するのであるから、類似して居る點のみを重く見て、違た點を考へないと云ふ弊に陷るであらう、而して斯樣な既往の經驗などを重く見ずに、現在の所與物を仔細に觀察することが大切である。之を極く精密に觀察することを教へる、さうしなければいくら正しい虎の知識を與へやうとしても、どこまでも虎を描いて猫に類すで、猫に似た虎しか知り得ないことになると云ふ、これがメスメルの說である。成程既往の經驗のみ基として之を尊重し、類似類推によつて、新らしく與へられたものを理解すると云ふ方面だけを考へると、即ち既往の經驗を偏重すれば、いかにも正確な知識を得難いと云ふことは理由あることゝ思はれる。然し是は其の一方のみ見た議論であつて、他の方面から之を考へると、兒童には前に申す如き推展性で、微細の類似點を辿つて推して行く性質がある、是は兒童に取りて非常に貴重なものであると思ふ。兒童は今言ふ通りいかなる問題に對しても答に窮さない。自由に理路を推して行くから窮することがない。此の思想の發展、勢力は非常に大なるものである。而して兒童の思想と成人の思考と云ふことを考へる

と、非常に差違があると思ふ。自然教育説とか、早教育説の近頃の論者は、兒童は三才位の時から適當な教授をすれば、十才十一才にして非常な知識を得ることが出來て、十七才十八才位で博士になることが出來るとまで、主張せらるゝのは、兒童の推展性によつて、其の發展の勢力が非常に大なることに歸するのではないかと思ふ。從來は兒童の精神活動が成人のやうな發展を遂げざる爲に、又僅かな類似によつて大變間違つた結論を下すことがあると云ふやうにのみ説て居るやうである。モイマン教授の如きは、兒童の精神活動を缺點の方からのみ説て居るやうであるが、それは所謂偏した考方ではないかと思ふ。成程成人に比較すれば發展が十分でないかも知れぬが、併し成人の精神活動は、抽象に過ぎ、言語的思考に餘り偏して、推展性が缺けて居るのではないかと云ふ疑ひを、私は有つて居る。兒童の思惟の發達時期を論ずる上に於て、科學時期と云ふ如き時期を設ける。是れは小學校在學の時期で、七、八、九才から十一、二才位まで、此の間の科學時期に於ては、何事も直に受取ることをしない。直ちに承認することをしない。親が何事を言はふが、先生が何と言はふが、年長者がいかなることを言はふが、直にオーソリティーに依つて之を信憑することをしない。

此の際に使はれる言葉は英語で Silly 日本では馬鹿、何と言はれても自分の腑に落ちない事に對して、馬鹿と言ふやうな言葉を始終使ふやうに言はれて居るが、是は兒童の精神發達の上に於て、必ず避くべからざる一段階であるであらうか。或は今日の世界の普通教育と云ふものは、此のオーソリティーによつて直に受入れない、自分の腑に落ちない事は直に信じないと云ふ點を、餘りに誇張して居りはせぬか、斯樣な疑ひを有つて居る。兒童の發達上に於てオーソリティーに依つて直に信じないと云ふやうになるのは、一面それが發達に相違ないと思ふ、他の半面に於て微細の類似から直ぐ推して行く推展性を去勢したならば、是は大に憂ふべきことであると思ふ。去勢とは甚だ妙な言葉のやうであるが、どうも學校教育を長く受けた人は、何だか去勢されて居る所があるやうに思はれてたまらぬ。其の上〳〵と、だん〳〵學校の梯子を上つて行く人は、言語動作がレファインされて來るやうに、世間では譽めて居るが、言語動作其のものに於ても去勢されて來て居る痕跡が見える。思想其のものに於ても潑溂たる氣風なく、大發見をして世界を動かすやうな大思想家と云ふものは、長い學校教育を受けた人からは產れて來ぬと云ふやうな嫌ひはないであらうか。而し

て是等は思想の去勢から來たものと謂はれはせぬか。英國人の論理學者の言葉の中に、極めて正確な事を言はふとしても、人間は決してAOの命題を定むるものではない、總てのものが斯樣である、總てのものが斯樣でないと云ふやうな命題を使ふことは出來ぬ。若しも斯うであるならば斯うである、若し斯うでなかつたら斯うでない、と云ふ若しと云ふ條件の下にしか言はれぬ、と斯樣な事を言ふて居る人がある。今の學校教育は餘りに若しも的の教育をやつて居るのではないか、モウ少し大膽な思想を構成する、大膽な推展をすることの出來る性質を、學校教育に於て養成することが大切であらうと考へられる。兒童の思惟に付て成人の特に學ばなければならぬ點は、此の推展性であると思ふ。

【五】智的活動と情意系統

兒童の精神活動を調べて行く中に、是はどうしても動かすことの出來ない眞理ではないかと思ふことに屢々逢着する。檢査等により調査を進めるに從ひ、全くそれに相違しないと云ふ確信を起すやうになつて來たのである。兒童にしても、少年にしても

隷才があり、或は成績不良兒がある。之を一般の人は人間の智的活動の性質であつて、智的活動の優れたものが隷才であり、智的活動の劣つて居るものが成績不良兒と斯樣に考へて居るやうである。ところがそれは非常に間違つて居るのではないかと思ふ。いかなる點が間違つて居るかと云ふと、其隷才をして隷才たらしめ、成績不良兒をして成績不良たらしむる眞の原因は、智的活動ではないのである。成程表面に現れた形式の上から云へば、智的活動に於ては隷才とか成績不良とか云ふ區別が出て居るが、其の根源に溯つて考へると、智的活動として認むることの出來ないものが、潛在し伏在して居る。それを情意系統と云ふ言葉で現はしたいと思ふ。隷才兒童と稱するものは、其の兒童の情意系統が隷才的の智的活動をすることが出來るやうに都合よく出來て居る。成績不良兒は其の兒童の情意系統と云ふものが、成績不良の智的活動が行はれるやうに出來て居る。其の樣なものになるものでなくても、情意系統によつて其の樣になる。之を實例に徵して考へると、創作能檢査の場合に多くの兒童に接し一人一人の檢査を遂げて見ると、優秀と云ふ方は必ず其の兒童の情意活動が或る特別な適當な狀態にあつて、成績不良な方は矢張り之に相當した情意活動、情意系統が不適當に

出來て居る。其の檢査をした中に、小學一、二年の時には優等であつたが、三年四年となつて急に成績不良になつたものがあつた。是れなどは確に情意系統の差違であつて、今までは乘氣になつて居たものが、何等かの原因によつて情意系統が全然變つて居て、他の方面に興味を持ち、他のものに絶對價値を置くやうになつて來たと云ふことが、成績不良を來たした原因であると思ふ。表面から見た隷才或は成績不良と云ふものは、其の內面に於ては情意系統の適當、或は不適當に組織、構成されて居ると云ふことが、之をさうする原因になつて居るのだ。故に兒童の智的活動を優秀ならしむるには、どうしても兒童の情意性質を適當に整理し、按排しなければ、決して其の兒童の智的活動を良好ならしむることは出來ぬ。從來の言葉を以てすれば、訓練的の知識を與へ、知能を啓發する、其の教授は必ず訓練的でなければならぬ。訓練とは情意活動を整理し、情意活動を適當にする教育作用を謂ふのであるが、教授の中には必ず訓練と云ふものが含まれて居なければならぬ、而して其の訓練が適當でなければ、教授は成功するものではない。斯樣な意味をどこまでも主張したいと思ふ。單り學校教育に於て然るのみならず、家庭教育に於ても勿論さうでなければならぬ。若し家庭教育に於て此の意味を沒却したならば、家庭教育は成功しないことになる。又社會教育に於ても同樣であつて、此の情意活動、情意系統が人格の基礎であり、人格の活動を左右する原動力であると云ふやうに見なければならぬ。それで前に言ふた隷才、成績不良兒と岐るゝ原因は、智的活動其のものでないと云ふ矛盾したやうな言葉も、其の意味から考へれば理解することが出來ることゝ思ふ。世の中には訓練と教授を別けたり、道德教育と智育教育を別ける人のあるのは、それは教育の理想の上から言ふと、正しい道ではない。どこまでも教授と訓練は一體とならなければならぬので、或は訓練のみを偏重し、或は教授のみを偏重する人があるけれども、それは間違ひであつて、眞に教授を成功せしむるのは訓練に待たなければならぬ、訓練が十分整はなければ教授は成功する筈がない。教育の思想がいかに變らうとも、斯の如き事は問はずして明かなりと斷定したい。此の訓練的教授と云ふものは、更に今日の精神現象の最後の結論と見て宜いと思ふ。前にヘルバルトの興味性に參考となるものがあると言ふた。それは趣味性の態度であつて、興味心的活動の態度とも言ふたのであるが、吾々の精神活動と云ふものゝ最後のターム、即ち言葉は、今日に於ては人生の活動の態度と云ふこ

とではないかと思ふ。人世活動の態度を定めて行くと云ふことが、所謂それが教育である。路傍に至極憐れな貧しい不具の人などが居ると、其の側を通るとき、急いであるく爲に二三歩通り越すが、どうしても見捨てることが出來ないので、再び立歸つて自分の財嚢を皆な施したりする。それは何であるかと云ふと、其の人の人生活動態度が博愛心と云ふ方に向つて居る、斯樣に見るべきものではなからうか。乃木大將が明治天皇の御跡を慕ひて殉死されたのも、明治天皇の崩御に當つて、乃木大將の心中にはどうしても切腹しなければならぬと云ふ、人生活動の態度を定められたものだと、斯樣に考へると、一切の教育と云ふものは、人生の活動態度を決定すると云ふ意味にならなければ、眞の教育とは謂はれぬ。唯多くの事を知つたとか、見たと云ふても、其の人の人生の活動態度を決定する點にまで進まなければ、何の效能もないことになる。若し適當な人世の活動態度が決定せられた場合は、即ち情意系統が出來たと云ふことになる。感情意思の系統が出來て、假令外部から見れば一簞食、一瓢飲、陋巷に在りと云ふやうな生活の如き、實業家の成金から見れば見すぼらしい生活のやうであるけれども、其の人がそれで非常な樂みを得て居ると云ふのは、教育の仕事、教育の成績、教育に對して無限の渴を感ずる爲に、喜んで其の職に在るに相違ない。それは其の人の情意系統が、眞の教育家たるべき情意系統に出來て居ると云ふことになる。斯樣に考へて來ると、人生の活動態度を決定する努力、換言すれば情意系統が適當に出來て居ると云ふことになる。學校に於て隷才で成績優良な兒童の出來るのは、其の兒童の情意系統が適當に出來て、學校の授業に對して絶對の價値を感じて居る。斯樣な點が所謂隷才兒童、或は模範兒童の出る所以であると考へる。コメニユースやフレーベルの言ふた、一片の知識を得ると云ふことは、宇宙の創造者たる神に對する敬虔の念を增す所以である。之から推すと一の仕事を究むることによつて、神を此處に認むることが出來ると言ひ得られる。若し情意系統を造ると云ふことが、教育の結局であり、智育は一の手段即ちミーンズでありとすれば、智能を啓發することは、吾々の人格を築くべき基礎として、情意系統を造る爲にするのであらうか、或は其の樣な手段と見ずして他に之を考へる途があるであらうか。前に述べたヘルバルトの考の如き、所謂觀念とか知識の如きは、世の中の文化を向上せしめ、個人々々の向上の爲のミーンズであり、手段である。人間の智能を啓發しなければ、世の文化は向上しない

し、又個人の向上も出來ない。知識、智能が發達せずして一足飛に人間の向上、世界の進歩と云ふことは出來ぬ。そこで其の中間に於ける智育と云ふものが、結局ミーンズとなり、手段となる、智能に賴らなければ世界並に個人の向上が出來ぬ、之を經驗的にヘルバルトが考へたのは非常に意味のあることゝ思ふ。之を一括して言ふと、兒童並に成人にしても、智的活動の優秀に出來るのは、智的活動其のものに原因があるのでなく、其の背景となつて居る情意系統が、適當であるから出來るのである。智的活動が一歩々々進み行くに從つて、背景たるべき情意系統が、一歩々々構成されて行く、斯樣に見るのが至當であらうと思ふ。之を圖解にすると、上圖の如く、斯樣に智的活動は反射的に情意系統によつて、一歩々々高いものにされて進んで行く、ヘルバルトの言ふが如く人間の人格向上、社會進歩の爲めの必須的條件、即ちネツスルミーンズである。基督が世の中へ出て高尚な知識、高尚な知德を世に啓發した爲に、其の導きによつてどれだけ人間が高くなつたか知れぬと言ふて居るが、私も同感

だ。個人にしても世界にしても智的活動の働きは、其の基礎たる情意系統に依り、一歩々々情意系統を益々高くさせて行く性質のものである、斯樣に少くとも私としては斷定したい。

【六】結　論

そこで此の點に於て兒童思惟と云ふものは、いかなる意味を有して居るかと云ふと、兒童の思惟位具體的のものはなく、或は物的、或は情意的のものはないのであつて、人間は老成すればする程抽象的となり、言語的になる。是に於て進歩と復古と云ふことを比較して考へると、ヘーゲルの言ふ如く、兒童の思惟作用を考へると、成人が思考活動を進めて、其の理想的狀態に達した狀態が、恰も兒童の思惟の中に現はれて居る。眞に思考活動が理想的の境地に達すれば、矢張り兒童の生活のやうになりはせぬか。基督の側へ子供が來たのを弟子が遠ざけやうとしたのを止めて、其の子供を近づかしめ、子供のやうな心にならなければ、天國へ行かれぬと言ふたのと同じやうに、又佛敎の方で延命地藏菩薩が子供を愛したと云ふのも、同じ意味であると思ふ。兒童

は成人の發達した極度の狀態を表徵して居る。然し子供の狀態其の儘が人間の進歩の極致其のものであるかと云ふとさうではない。兒童の狀態其の儘が人間の進歩の極致の狀態其の儘を現はして居るかと云ふと、決してさうではない。即ちヘーゲルの言ふ如く、正から反に至り中に至り、中は正と同じ性質を有するものと似たものが出來ると云ふ、此の辨正法を、兒童の思惟、成人の思考活動に應用することが出來ると思ふ。尙ほ他に申上たいと思ふ事が多くあつて、殊に兒童の思惟作用の形式と成人の思考活動の形式等とに就て、申上たいと思ふ事もあるが、何分此の度は病氣中であつて、十分徹底的に申上ることの出來ぬのは遺憾に存ずる次第で、然し是で御話致さうとした中の二、三點は申上げ得たことゝ存じまして、是で失禮致します。（完）

◇故岡部教授を悼む◇

岡部教授は之を最後の講演として、病床に就きましたが、間もなく廣島病院に入院。療養に手に手を盡しましたけれども、遂に胃癌で亡くなられました。

岡部教授は學生時代から苦學難行、私費を以て留學を決行した程の篤學の士で、行住坐臥常に書物を離さず、我國の教育學界に於て、大に囑目されて居つたのでありましたが、若くして此の世を去られたのは、誠に惜しみても猶餘りある事と思ひます。恰度是より先き氏の提出した論文により、博士號を授與する事になつて居たので、病氣危篤ときいて文部省では直に其の手續に及んださうです。今や此の書を編纂するに當り、追懷の情禁ずる能はず、聊か一言を記して敬で弔意を表する次第であります。（編者敬白）

第三講　文化と教育

廣嶋高等師範學校
教授　佐藤熊治郎

一、文化の意義＝二、價値＝三、生命＝四、實用主義の價値觀＝五、批判＝六、理想主義の價値觀＝七、價値の體系＝八、文化價値と教育の內容

私は斯樣な題で案を立てゝみたが、其の後を顧ると、自分の畑以外の哲學の事を、主もに申さなければならぬやうになつたので。諸君の期待に背くやうになるのは恐縮であるが、彼は陳汾漢を言ふて居る位に、御聽取を願つて置きます。

文化と云ふ言葉は、自由或は平等、或は又生命と云ふやうな言葉と相駢んで、人の注意を惹く一の標語になつて居ると思ふ。家庭生活の改善を說く人は、家庭の文化生活などと言ひ、社會の改造を唱ふる人は、民衆の文化生活と云ふことを叫ぶ。軍國主義の打破を說く人、或は階級制度の顚覆を說く人、或は又因習傳統の根本的改造を唱ふる人、凡て文化を旗幟として居るもの、如く見える。加之科學の科學たる哲學は、文化の價値と云ふことを以て根本の研究問題として居る。尙ほ法學者、社會學者、經濟學者等も亦文化哲學と云ふことを以て、其の問題の解決の根據としやうと云ふことを努めて居るやうに思はれる。斯かる場合に於て、教育のみ獨り文化の問題から離れて居るべき筈はない。固より過去の教育にしても、全然文化と沒交涉であつた譯ではなく、寧ろいかなる時代、いかなる場所に於ても、文化を離れた教育の在り得る道理はないのである。然し今日は哲學の進歩によつて、文化と云ふことに新たなる意味が與へられ、又國民の思想生活を意識的に說くに、文化と云ふことを中心問題として居る。今日の世の中に於て過去の教育も文化の教育であつたと言ふて濟まし込んで居る譯にはいかぬと考へる。斯樣な點から自ら菲才を顧みず、玆に文化を中心問題として、教育の有ゆる問題を考へて見やうと、心窺かに企圖致したので。此の題目の下にホンの其の端緒だけ御話したいと考へる。

【一】文化の意義

凡そ何事によらず學問的に研究せんとする場合に於ては、其の考を進め行く途中に

起り來る思想の混亂を避くる爲に、豫め其の意義を明にして置くことが便宜であると考へる。仍て茲に先以て文化の意義と云ふことを一言して置きたいと思ふ。此の文化が思想家の間に問題とされた以來、既に數年を經過して居る。故に其の意味がいろいろ多岐に應用されて來て居るけれども、今日に於ては大同小異自から其の基礎に於て一致して居るものがあるやうに思はれる。今日學者の間に使用されて居る文化と云ふ言葉は、獨逸語のクルツールと云ふ言葉を譯したものと見て宜いと思ふ。そこで此のクルツールの語義を詮索して見ると、之には二樣の意味が含まれて居るやうである。其の一は吾々がいろ〳〵手を掛け、世話を燒てやることに依つて、現在より完全なものとならしめたる或るものが有る場合、其の現在より完全ならしめたる或るものがある場合に、其のものに手を掛け世話を燒てやる働きを文化の意味とする。此の意味から云へば、原野に鋤鍬を入れて、五穀蔬菜を造るところの田畑に加ふる働きも文化となる譯であるし、又山野に植林して立派な材木を造り、或は薪炭の料として伐り出す其の植林の働きも文化である。或は牛、馬、豚、羊の如き家畜を飼育して、それ等をより良き家畜とする其の働きも亦、文化を意味することになる。更に又人間の精神生活を啓發培養して、良知、良能ならしむる働きも文化でなければならぬ。斯樣な意味になる譯であるが、歷史的には最初は彼國に於て、全く耕作の方を意味するものであつた。それがだん〳〵擴張されて、一般的に動植物の培養飼育と云ふことにも應用せらるゝやうになり、更に擴張されて人間の敎化、人間の精神を培養することにも用ひらるゝやうになつた。第二の意味は今申した如く、自然とか人間とか云ふものを、より完全ならしむる爲に働く、其の働きの結果を意味する。此の意味から言ふと、通例吾吾が概括的に物質的財產及び精神的財產と言ふて居るものゝ總てが文化である。斯樣な意味になる譯であるが、第一の意味を主觀的文化生活と謂ひ、第二の意味を客觀的文化財と呼ぶことが出來やうと思ふ。獨逸に於ては此のクルツールと言ふ語と駢べてチキリザチオン、シビリゼーションと云ふ言葉が使はれて居る。此の方はクルツールの文化に對して、文明と云ふ意味のものと見て、此の文明の方に當るものが、物質的、財的生活の方を意味することになり、文化の方に當るものが、精神的、理想的生活を意味して居る。斯樣に見ると文化と云ふ言葉には、廣い意味と狹い意味と二樣ある譯であつて、第一に擧げた文化の意味は、最も廣義な意味であるが、文明と對立して讀

まるゝときの文化は、狹義の方になつて、精神的、理想的生活だけを意味すると云ふ譯になる。今私は暫く文化と云ふ言葉を廣い意味の方に取つて話を進めて行きたいと思ふ。

【二】價　値

文化を廣い意味に解釋すると、或る時代に於ける或る國民生活の內容をなして居るところの科學、技術、道德、慣習、藝術、政治、法律、軍事、敎育、衞生、保險と云ふが如き問題は、悉く文化であると云ふ譯になる。加之通例吾々文化人から區別されて居るところの野蠻人、例へば臺灣の生蕃の如きものゝ間にも文化が存することになる。勿論其の程度は違つて居る。私は先頃臺灣へ行つて生蕃を見たのであるが、其の程度は違つても、生蕃の如き野蠻人の間にも耕作が行はれ、粟を蒔くとか、豆を蒔くこともやつて居る。又技術もありて家具其の他の日常用品を製造して居る、又音樂もあつて杵つき唄と云ふ特有の音樂も聽くことが出來る。道德に至りては吾々文化人をして愧死せしむるやうな立派な道德もある。臺灣生蕃は非常に正直であつて、決して嘘はつかぬ、と云ふ位。到底吾々の及ばぬ程正直の德義が守られて居る。又男女の關係は極めて淸らかなものであると云ふ。故に野蠻人の間にも、文化と云ふものは立派に存して居る。それで野蠻人と文化人とを區別すると云ふことは、是は相對的の意味であつて、絕對的の區別にはならぬので、單に程度の上の區別と云ふことに過ぎない。然らば野蠻人の文化は、吾々文化人の文化に對して低いと云ふ、其の低いとか高いと云ふことは何に由て定めることが出來るか、此の問題に解答を與ふるものは文化價値論である。

前に述べたる如く、物にしても人にしても、より完全ならしむる爲の働きが文化生活であつて、此の働きに依つて產み出されたものが文化財であるとすれば、より完全と云ふことの中には、既に價値と云ふことが含まれて居る譯で、此の物が其の物より完全であると云ふことは換言すればアノ物より此の物の方がより價値があると云ふことを意味するものであると思ふ。何によつてより完全とか、より有價値であると云ふことを言ひ得るか。此の問題は畢竟價値其のものゝ本質を明にすることに因てのみ解決されることになる。今假りに價値の定義を吾々の意欲に相對する目的物と云ふこと

にして置く。此の意味から言ふと、私が今此所で饒舌つて居て、咽喉が渇すれば一杯の白湯、一杯の水が私に取て價値となる譯である。若し空腹を感じたときならば一片の麵麭が價値となる。名譽を欲する人に取ては名譽が價値となり、貪欲の人に取ては金銀財寶が價値となる譯である。然るに斯く個人々々の意欲を基礎として考へられた價値と云ふものは、總て條件的、相對的價値であると謂はなければならぬ。全く下戸の人に取りては、灘の芳醇ありとても、一椀の水に如かずと考へるであらう。貪欲飽くことを知らざる人間に取ては、金銀財寶が利用價値でなくして目的物其のものになる。然し顏回の如き清士に取りては、巨萬の富も些々たる利用價値に過ぎざるものとなるであらう。要するに價値を漠然と吾々の意欲に相對する目的物と云ふやうに定義して考へると、其の價値は個人限りの意欲としても、多數の人の意欲としても、條件的或は相對的で、其の價値に變動を起し易いもの、數多くが含まれて居る。吾々の欲望の目的物となる利益或は快樂の如きは、總てさう云ふ性質のものである。そこで斯樣な條件的相對的價値に對して、絶對的の價値、即ち普遍的に妥當する價値の有無を考へざるを得ない。其の樣な事を考へる人が有つても無くても、斯樣な普遍的に妥當する價値の有無と云ふことは、確に問題になる。私は此の問題に對して二樣の解釋を下すと、一は理想主義哲學の敎へるところのもの、他の一は經驗主義哲學の示す解釋である。理想主義の方は有ゆる價値の歸趨を眞、善、美、又は眞、善、美、聖にありとする。それに普遍的妥當性を認める。經驗主義の方は之に反して、絶對的價値を否認して、相對的價値のみを認むるものである。內外共に今日行れて居るところの代表的の敎育學說の何れかを根據として建設されて居る。此の敎育學說の基礎的に利用されて居る經驗主義の世界觀の中から、特に實用主義プラグマチズムを取出し、是と理想主義の哲學との根本的差別を、諸君と共に理解して見たいと思ふ。

【三】生命

私は出發點に於て、今日文化と相駢んで一種の標語となつて居るものは、生命であると云ふことを申して置たが、實用主義の中心問題を爲して居るものも生命である。それで玆に實用主義を理會せんとする上から簡單に生命、或は生活と云ふても差支ないか知らぬが、此の生命の意義を詮索して置く必要がある。

アリストテレスは斯樣に考へて居た、自分で營養するもの、自分で發育し又生産するもの、自分で感覺し又思想するもの、總て之を生命と見る。斯樣な機能の所有者であるところの生物を概して分類すれば、營養的、生産的機能を有するところの植物と、營養的、生産的機能の上に、更に感覺的機能を具へて居る動物と、營養的、生産的機能と感覺的機能を有する以上に、精神的、理性的機能を備へて居る人間、斯樣に三つに別けることが出來ると思ふ。然し動物の高等なものには智慧の働きがある。叡智の働きがあると稱へて居る動物心理學者の說を眞實なりとすれば、今私が概括的に分類したことは、それは人間の自己中心主義から出た勝手な分類法であると言はるゝ譯になるが、兎に角斯樣な詮議立ては、當面の問題に對しては左程關係がないので、此所では今概括的に擧げた機能の一切を具備して居るものが人間であつて、人間としての生命、或は實用主義の所謂生命も之を意味するに外ならぬ、斯樣な事を申して置けば事足るのである。然し全く是とは別種の生命と云ふものも考へられて居る。今申した生命は、科學的分析によつて、捉へらるゝ生命であるが、科學や論理の力を藉ることなくして、主として直覺によつて捉へらるゝ生命、直接に體驗される、直感されるものが、それが眞の生命であつて、眞の實用である。斯樣な說は所謂ベルグソンのエランビタールと云ふものであつて、エランビタールは生命であるが、生的跳躍と譯されて居るもので、物理的見地の實際の存在から區別される有機的の全生命であり、所謂刻々に創造して進化する生命である。教育の新象徵と謂はれて居るものゝ中には、實用主義とベルグソンのエランビタールが繼ぎ合はさつて出來て居るものもあるやうに見えるけれども、其の細工は甚だ巧みならざるやうに考へる。

【四】實用主義の價値觀

前に生命の意義に付て、實用主義の所謂生命も、之を意味するのであらうと云ふことを申して置たのであるが、實用主義に於て、唯一の意義あり價値あるものは、生物學的心理學の生命である。吾々人間に取りて意義ある生活は、いかなる生活であるかと云ふことを考ふる場合に、一歩も經驗上の事實以外には出ない、斯う云ふのが實用主義の立場である。生活或は生命の意義の根據を人間とかけ離れた超世界、例へば神と云ふやうなものにありとする、舊き形而上學は勿論の事、アリオリと云ふやう

なカント派の哲學も、實用主義者の眼には一種の獨斷論と映ずるのである。斯樣に經驗的事實の範圍外に出ずることを排斥する以上、生命の問題、換言すれば世界觀を說くべく寧ろ生命の問題を說くべき鍵も、經驗科學であるところの生物學と心理學と此の二つより外に仰ぐべきものがないと云ふ譯になる。と云ふ理由は、此の二つの科學が、吾々の生命と云ふものを研究して事實を統卒して居る科學であるからである。斯くして實用主義は生物主義となり、心理主義になる、寧ろ其の論理を進めて行くプロセスから云へば、生物主義が實用主義となつて居るので、直に其の點を申述なければならぬと思ふ。

生物の示す所によれば、個體の種類も環境に順應することによつて、初めて其の生命を維持し、而して此の變化極りなき環境に順應する其の事が、矢張り生命其のものを進化せしめる。凡そ生を現世に受けて居るものにして、此自然の大法以外に立つことの出來るものは一もあり得ないのである。そこで個體と種族との維持と、進化と云ふことは、一般生命に內在する目的であると見ることが出來るやうに、人間に取ても強く深く豐かに健全に、啻に現在に於て生きるのみでなく、將來に向つて層一層生命の向上進步を圖ることが、生命に取りて唯一の目的であり理想である。斯樣な事になつて來る。生命の問題を說くべき唯一の鑰となるものは、生物學なりとする生物主義から言へば、眞の實在と言ひ得べき實在が生命であり、眞の價値と言ひ得べき價値を有するものが生命である。「一切の財——文化財——一切の財の基礎となるものは生命である」。個人も民族又は國民も、自己の生命の維持と更進とに重きを置かぬものは、それは天賦の權利を拋棄したものに等しいことになるのである。斯樣に强く深く豐かに健全に生きることが、生命の理想であり、而して日に新たに、日日に新たにすることが生命の進むべき方向であるとするならば、此の理想を達成するに付ての軌範がなければならぬ譯である。而して此の生命主義に取ては、此の軌範とても矢張生物學以外から仰ぐと云ふことは出來ない譯であつて、乃ち自然淘汰の法則がそれである。「生物學に於ては適者は生存し、變化極りなき環境に順應せざるものは死滅すると敎へて居る。そこで生命の維持と更新と云ふことは、積極的に物理的並に社會的の環境に順應することに因て遂げられ、即ち其の事が軌範となると云ふ譯である」。更に此の見地から理想主義の方で絕對價値と認められて居る眞善美と云ふものが如何に見られるか

と云ふことを一言しなければならぬ。

此の生物主義の立場から云へば、只今申したやうに、價値と言ひ得べき唯一の價値は生命であつて、其の他の價値は何等か此の生命と交渉する限りに於てのみ成立することになり、眞、善、美と云ふが如きもの亦然りと云ふことになる。而して世の中には絶對の眞、善、美と言ひ得べきものは無いのである。眞理と云ふのは積極的に順應を遂げしめた吾々の智慧の働きに對する名稱に過ぎぬ。智慧の働き――叡智の働きが、今遭遇した物理的、社會的の環境に順應して、而して積極的に當面の問題を解決し得たときに、其の智慧の働き、其の執つた方法に對して眞理と云ふ名稱が用ひられるだけである。即ち知識と云ふものは、積極的順應に因て生命の問題を解き、其の更新を圖る爲めの單なる道具に過ぎぬ。重ねて言へば進化の道具に過ぎない。道具としての知識は道具として用を爲す間のみ眞理たり得るもので、尚ほ進化した事情の下には、それに應ずるだけの眞理――道具を要する。進化した生命には進化した道具でなければ役に立たぬ。故に眞理は相對的價値を有するに過ぎぬものとなる。

そこで知識は道具に過ぎぬと云ふ道具論は暫く措て、實用主義の言ふが如き相對性と云ふものは、何人も認めざるを得ないと思ふ。是は自然科學の方で闡明して居る物理の法則にしても、生物學に關する法則にしても、絶對性はなくして斷えず建設されては破壞され、破壞されては建設されて進歩發展して居る。天動説がコペルニコス氏の地動説に依て排除された如く、或は分子説から原子説に移り、更に電子説に位置を讓らなければならぬやうになつた如く。又ニユートンの重力説がアインスタインの相對性原理の爲に、其の光輝を失したるが如き、總て現在吾々の有する價値の相對性を示して居るものである。斯の如き進歩の流れの中に於て、甲の説が乙の説より眞であると認められるには、之を認らるゝだけの動かざる根據がなければならぬ。それを論理の根本軌範と云ふ、AはAであつてBでないと云ふ如きも論理の根本軌範である。然るに一切の知識は、生命の問題を解決する用をなす場合に於てのみ眞理たり得る、と云ふ實用主義の論法から推せば、所謂條件附のものであつて、絶對の眞理とは言はれぬことになる。未だ直接に其の書物は讀まぬが、アベナリユース氏一派の見解は、論理の根本軌範の如きも、生命の用であると云ふことに説明して居る。プラグマチストも其の選に漏れない。斯樣に實用主義の立場から眞の價値の相對性に付て述べたことは、

善に付ても當嵌ることになる。生物學を根據とする實用主義の見地から言へば、吾々の社會生活の複雜なる根柢から起つて來る、道德の要求と云ふことも、矢張り社會的の生命である。個人の理想から起る要求である、而して積極的の物理的社會的の環境に順應して、生命の問題を解決し、其の更新を遂げしめたる行爲が、善として評價されるのみであると云ふことになる、而して吾々と環境との關係から起る生活の變化が多樣であるだけ、それだけ順應する吾々の行爲も、無限に多樣である譯になる。斯く無限に多樣であるところの行爲が、生命の更新を遂げしめた結果に基いて判斷が下されるだけであつて、絕對的に眞とか正と稱すべきものは、何ものも認められない。實用主義から言へば良心の絕對的命令とか、或は又普遍的に妥當するものとしての無上命令の如きは、哲學者の迷語に過ぎぬと云ふことになるだらうと思ふ。此もそれと同樣であつて、何等かの意味に於て生命の條件となる美は、固より之を認むるけれども絕對價値としての美、其の絕對價値を實現するに付ての根本軌範となる　即ち美的法則、普遍的に妥當する美の法則と云ふ如きものは之を認め得ない、斯樣になる譯である。之を要するに生物學を根柢として居る實用主義に取て、唯一の絕對價値と見らるべきものは生命である。理想主義の絕對價値と認めて居る眞、善、美も生命價値の條件としての價値に過ぎないことになる。文化價値は生命價値に從屬することに依てのみ成立する、斯樣な事になつて來る。

【五】批判

以上極めて概略ながら、實用主義の世界觀は斯んなものであらうと云ふことを申したのであるが、それに付て私の貧弱な頭で考へた批評を少しく加へたいと思ふ。實用主義は吾々の生活の理想と、其の理想を實現するに付ての軌範と云ふものを、生物學から導いて居るのであるが、斯樣な理想や軌範と云ふものを、自然科學であるところの生物學から導く、其の事の當否が第一の疑問となつて來る。リップスと云ふ美學者が、其の美學の中に於て、力學の方で斯うだと見定めた知見、例へば左から來た力と右から來た力と同じ場合はどうであるとか、或は斜めの方向から來て突當つたときはどうなると云ふやうな一の法則、斯樣に力學の方で斯うだと見定めた知見は、直に建築上の技術の軌範となると云ふて居る。實際建築物を造るときは、物理學の法則、力

學上の法則に從はざるを得ないのであつて、今のやうな知見が建築上の技術の軌範となることは明かである。又生理學に於て斯樣であると考へ定めた知見、或は法則は、直に醫術の軌範となる。斯樣な考からして、吾々は如何なるものに對して美を感ずるであらうか。審美學的に美的感情を研究して、斯樣であると定めた法則が其の儘美の軌範となる、斯樣に言ふて居るのであるが、此の意味よりすれば生命に關して生物學の示して居る法則は其の儘生活に關する理想であり、又軌範であると言ひ得るやうに思はれる。然しそれには尙ほ解き明さなければならぬ謎が潛んで居る。醫術或は建築上の技術が從ふべき法則は、之を軌範とも言ひ得るやうであるが、其の實是は目的と手段との關係を言ふて居るものではなくして、原因と結果との關係を語つて居るに過ぎぬのである。力學或は生理學に於ては、甲なる原因に乙なる結果が伴ひ來ると斯樣に敎へて居るのであるから、言はゞ結果を齎らすべく原因の手を借り來るので、醫者はどう云ふ病氣に如何な藥劑を投ずると云ふことは、詰り其の原因を與ふれば其の結果が齎らせられるのであるから、單に原因と結果のみを考へてやつて居るので、何の爲に醫者が藥劑を投ずるのであるか、何の爲に建築家が建物を造るのであるか、と云ふことは是は醫者、或は建築家の意思に問はなければ解らぬことである。力學も生理學も其の目的に付ては全然我不關焉である。生物學も亦同樣で、生物學は自然科學としては個體と種族の維持と進化と云ふことが、其の生命に內在する目的であると云ふやうに見ることが、既に自然科學としては行き過ぎて居るのである。自然科學の一たる生物學としては、事實を其の儘に、即ち生命の維持と進化の行はれる其の條件を示せば宜い。斯樣な條件の下に斯樣な結果が起り來ると云ふ、條件を示せば事足るのである。勿論假りに動物などを取り來つて、其の生命の完全なる機能と云ふものを想定して、而して此の機能を具備する爲には、いかなる條件を充たさなければならぬかと云ふて考へることは妨げないけれども、此の場合には嚴密なる意味に於ける目的と手段との關係は無いものであつて、恰も力學の建築術に於ける、生理學の醫術に於ける場合と同樣に、因果關係を敎へて居るに過ぎない。來るべき結果の條件となることを示すに過ぎぬのである。何故に生命自身に價値があるか、又いかに活きるのが生命自身の價値であるか、之を評價するのは人間の意思に依て、初めて決せらるゝことである。斯の如き意思に關しては生物學は平然として無關心である。否寧ろ無關心でなけ

ればならぬ。是が第一に疑問とする所であつて、第二には生きることそれ自身を價値と見ることが大なる疑問となる。單に生きることが目的であるならば、動植物の生命と吾々人間の生命との間に、價値の高下は全く無いことになり、寧ろ一千年の長い間生きて居る阿里山の檜の方が、遙に吾々の生命より價値あるものと見なければならぬことになる。生物主義者と雖も斯の如き幼稚な論を立てる道理はない。然らば吾々は一體如何に生きるのが最も價値ある生命であるか、斯う問はざるを得ないことになる。此の設問に對して生物主義者の側からして次の如き回答が與へられやうと思ふ。即ち近頃用ひられる言葉で、より強く、より豐かに、より健全に生きるのが、生命としての價値であつて、日に新たに、日々に新たに向上するのが、生命としての價値である、斯樣に言ふより外になからうと思ふ。然し此の種の概念は其の内容が示されない以上は空疎である。假令物理的の意味があつても、價値的見地から何等意味を有しないことになる。恐らく生物學者としても之を總括的に言ふたならば、眞、善、美に生きるのが生命の價値であり、隨つて是等の價値の具體的に顯現されて、科學、道德、藝術、其の他の文化が生命をして價値あらしむる根據である。斯樣に考へしむるを得ないと思ふ。文化價値が生きることの條件價値でなくして、文化に價値がある故に生命にも價値がある、斯う見なければならぬことになつて來る。生物主義、即實用主義の價値觀は私をして言はしむれば、冠屐顚倒の價値觀である。

第三に指摘して見たいと思ふことは、自然科學を根據として居る實用主義、生物學の說て居る事柄の價値ある點で、啻に生命の生成發展を說いて居る點に於て、現代人の要求に合するのみでなく、盛に生へ立つ子供を敎育する上に、參考となる事の多き學說であるには相違ないが、吾々は生物學の敎へに耳を傾くるに先立つて、生物學が何に因て其の眞理價値を保障されるかと云ふことを說かなければならぬ。生物學が眞理として敎へて居る事柄が、何の保障を得て眞理たり得るか、斯樣に反問せざるを得ないことになる。實用主義を根據として敎育を說て居る人の中には、今言ふ如き疑問を殆ど無用視して、斯の如き事は無用の詮議立てゞあると排斥して居る人がある。然し多數のそれに滿足することの出來ない人に取ては、當然の疑問と謂はなければならぬ。而して此の疑問に對して唯一の回答となるものは、論理の根本軌範である。生物がアミーバ時代から動植物乃至人間に進化したと敎へて居る其の說、直接吾々が經驗の

出來得ることでない、直接經驗に上る事實でなくして、生物を因果的に考察する一の假說に過ぎない、故に此の因果的の見方其のものが眞であり、價値あるものであつて、初めて生物學と云ふものも意味があり、價値あることになつて來る。逆に生物學の見方によつて因果的見方の價値が定まるものではない。因果的見方の根據をなして居るものは何であるかと云ふと、それは論理の軌範であつて理由律である。原因あり必ず結果がなければならぬと云ふ結論は、此の根據の下に起らなければならぬ、而して斯樣な事は總て論理の理由律、軌範として言ひ得ることである。斯樣な譯で論理の根本軌範なるものは、論理的生物學の原理の先立となつて、初めて生物學の說くところは、眞であるか僞であるかゞ保障されることになつて來る。然るに論理の根本軌範まで、生物學の原理によつて說明せんとする所に、實用主義は明に首尾顚倒の學說であると云ふことが出來ると思ふ。第四に假りに、從つて世に絕對眞理なるものは存しないと云ふ信仰の上に立つとして、此の場合其の信仰の對照となるところの實用主義其のものも亦絕對眞理でない。隨つて自己限りの信仰か、或は實用上比較的誠に取ても有效な眞理であると云ふ位になつて來る。自分限りの眞理は眞理でなくして、眞理は普遍的の妥當を意味する、何所へ持て行ても動かぬと云ふ普遍的妥當を意味する。若し實用上の道具として比較的有效であると云ふことならば、より有效でないと云ふ事を定むる標準がなければならぬ。有效で有る無しと云ふことを比較商量すべき基準がなければならぬと云ふことになつて來る。然し實用主義の理論から推すと、假りに此の種の基準ありとしても、それも矢張り絕對性のものではない。結局是は多數決を以て定むるより外には、眞か僞かの區別をする方法がないと云ふことになつて來る。

第五に善と美に關する實用主義の見解は、事實に合しないことがある。事實を根據とし、經驗上の事實以外に一歩も出ないと云ふのが其の立場であるが、全く事實に合しない事が起つて來る。總じて絕對價値と普遍的に妥當する軌範とを認めざるところの實用主義の見地から言へば、道德例へば約束の履行と云ふことの如きも、生命の生成發展に對して、何等かの結果を齎らす場合に於てのみ價値があると云ふ。然るに事實は容赦なく裏切つて居る。生存競爭の激烈なる今日に於ては、約束の履行と云ふことは必ずしも生きる爲めの最も有利な武器ではない、少くとも社會生活の一切に當篏まる通則ではない事になる。ヴインデルバンドと云ふ哲學者の口吻を眞似て言へば、

道德上の軌範を遵奉するのが、激烈なる生存競爭上に於ける最も賢い生活法であると、斯う敎へるほど馬鹿氣きつたことはないと云ふことになる。斯樣に吾々自ら認めて以て實踐上の軌範として居る約束履行の如き事が、必ずしも生きることの用をなさざる場合に、實用主義者は、斯の如き軌範を以て、最早道德の價値無きものであると言ひ得るや否や。之に對する實用主義者の回答如何に拘らず。次の如き事實を擧げることが出來る。假令道德が必ずしも生存に最も有利なる武器でない場合に於ても、而も無條件的に之を遵奉しやうと云ふ要求を自覺する、靈的生活と云ふものもあると思ふ。斯樣な靈的生活に於ては、道德が生命に取ての條件でなくして、逆に寧ろ生命の方が道德に對する條件になつて來る。美に付ても同樣であつて、美と云ふものは必ずしも自然淘汰に最も有利な武器ではない。內外の歷史は蠻力の前に美的文化の屈服した多くの例を示して居る。然るにも拘らず吾々は、眞と善に對すると同樣に、美其のものに對する强い要求と云ふものがある。最近擡頭し來りたる敎育說中の一として、藝術敎育と云ふものを擧ぐることが出來ると思ふ。恐らく此の藝術敎育を提唱して居る本旨も、藝術を生活の條件と見るのでなくして、藝術に生きるのが最も强く、最も深く生きる所以であると云ふ考であらうと察せられる。生命の條件として美を要求するのでなくして、美があればこそ生命に價値がある。美的に生きるのが最も强く、最も深く生きる所以である。斯樣な考であらうと思ふ。第六に絕對の價値も普遍的に妥當する軌範も認めざる實用主義は、當然論理主義とならざるを得ない。實用主義の見地から云へば、通例吾々の間に自明のものと考へられて論證を待たないのは、論理の軌範で、長い生命の進化の途上經驗を積み、練習を重ねる間に、直接の要求を離れ、當面の實用を超えて、それ自身秩序ある考へ方として認めらるゝやうになつた、斯樣に言ふより外はない。即ち吾々が自明と考へて居る論理の根本軌範も、普遍的に妥當する軌範ではないと云ふことにならざるを得ない。既に普遍的に妥當する軌範と云ふものを認むることが出來ぬとすれば、個人的にも或は種族的にも、眞理、非眞理の唯一の基準となるものは其の時其の場合に於ける生命の意嚮、或は趣味の外には無いと云ふことになる。隨つて眞理と云ふものは個人的に團體的に變化し、時間的、空間的に動搖して歸一する所を知らずと云ふことになつて來る。善と美に付ても同樣であつて、何を善として選び、何を美として要求すべきかと云ふことは、一に其の時其の場合に於け

る主觀の內面經驗に待つ外はない。假令事實に鑑みて善とし美とする所に從ふとしても、何ものもそれが善である美であると保障して呉れるものがないのであるから、結局雷同附和と選ぶところなしと云ふことになる。實用主義者は近代のソフイストと云ふ非難を受けて居るが、斯樣な非難を受くるのも無理からぬことゝ考へられる。斯樣に對立して御話したのは、經驗主義の哲學として、實用主義に付て概畧申し述べたので、尙ほ明日は理想主義の方に移つて御話したいと思ふ。

〔六〕理想主義の價値觀

昨日は、プラグマチズムに付て、其の趣旨の梗概を申して、私の貧弱なる頭で考へた批判を申して置いたのでありますが、今日は更に理想主義の方へ這入つて、理想主義の方で價値をどう云ふ風に觀て居るかと云ふ事を申して見ようと思ふ。

生命の哲學と稱すべき所の實用主義が、發生的の見地に立つて居るに對して、價値の哲學である所の理想主義は、目的論的見地に立つものである。其の目的論的見地とはどう云ふ意味であるかと云ふ事は、是から申上げる所で御諒解下さることであらうと思ふ。具體的な、實際の科學とか或は道德とか、或は藝術と云ふものに、絕對性の具はらないと云ふことは申すまでもないことである。其等の何れもの過去を振返つて見た上で現在を眺めたならば、現在の科學とか道德とか、或は藝術とか云ふやうなものは、畢竟是は歷史的發達の所產に過ぎないのである。更に將來を見て現在を眺めたならば、現在の科學、道德、藝術と云ふものは、今發達の途上にある所の一ポイントである。斯う云ふことに觀られるのである。けれども、斯樣なる變轉に拘らず、其の到達し得た現在の科學なり道德なり藝術なりに對して、是は眞であるとか僞であるとか、或は是は正であるとか不正であるとか、或は善であるとか惡であるとか、或は美であるとか醜であるとか云つて、評價を下して居ると云ふことも疑ひなき事實である。而して一切の評價には、其の評價の原理がなければならぬ、原理なくしての評價は、是は水掛論に了つてしまふのである。眞僞の差別を附ける其の原理とするものは、何であるかと申すと、申すまでもなく眞理の根本規範である。善惡の境を劃する原理となるものは何であるかと申すと、それは倫理の根本規範である。美醜の判斷を立つる場合の基準となるものは何であるかと申せば、申すまでもなくそれは美の根本規範

である。此の規範は是は事實ではない、豫定である、命令である。事實に就て申せば吾々には屢々論理的に矛盾をなして、而も氣付かないで過す場合も多々あるのである。尙亦藝術などのやうに、論理の矛盾には一切頓著しないものもあるのである。是は善と美とに付ても矢張同であつて、良心の命令を意識しながら、自分の良心に咎められながら、而も自分の義務を怠り勝になるのが世俗の常である。であるから、斯うなければならぬ、斯うせよと云ふ規範は、是は事實ではなくて理想的のものである。實用主義は、其の必然的の歸結として、理想的の規範までも相對性に墮せしめるのであるが、然るに批判的に價値の基礎付けを爲したる理想主義に取つては、規範は普遍的に妥當する所のものになるのである。どう云ふ意味で規範と云ふものは普遍的に妥當することになるのであるが。其の點を申さなければならぬ。

論理の根本規範と云ふものは眞理を豫想する。或る種の藝術活動、例へば子供に對してお伽噺をするやうな場合、此の場合に何人も其の觀念の結合、話して行く場合の觀念の結合の論理的聯關と云ふことを、話手に對して要求する人はないだらうと思ふ。この世界からして、月の世界に旅行をすると云ふやうな事を、平然として話すのである。即ち論理的の聯關と云ふ事は何等頓著しない。之に反して眞理を要求する場合には、必らず論理の規範に從はなければならぬと云ふ要求が、そこに起つて來るのである。論理の規範に從へと云ふ要求は、觀念の結合、眞であらんことを要する場合に限ることである。即ち論理の根本規範は、眞理を目的とするものに對する要求である。眞理を目的としない場合に於ては、論理の根本規範なるものは無用の長物である。斯う言ふことが出來ると思ふ。所が眞理を目的とするものに取つては、普遍的に妥當する所の規範の要求は必然的である。と云ふ譯は、此の論理の根本規範は普遍的に妥當することを承認しない以上、其の目的とする所の眞理の探究を果すことが出來ないからである。即ち論理の根本規範は事實でなくて必然的の假定である、必然的の假說であるPostulateである、是は公準とも譯しますが、必然的の假定である。論理の根本規範は、眞理を目的とするものに取つては必然的假定である。

實用主義は發生的の見地に立つて、論理の根本規範も實用に依つて說かんとするのであるが、事實に就て云へば、成程人間と云ふものには、實用の爲に眞理を要求する所の動機も存する。是は疑のなき事實である。けれども眞理の發生的見地と、其の假

定として成立する根據を混同することは容されないことである。人間がどう云ふ風にして一體眞理を要求するやうになつたか、どう云ふ所から眞理を眞理として意識するやうになつたものであるか、斯う云つた事を研究するのは、是が發生的の見地である。さう云ふ發生的の見地を是非する謂はれは無論無い、それも一つの研究法である。併しながら斯樣にして經驗上の事實と云ふものを發生的に研究して行く場合に、論理の根本規範を豫想して居るのである。論理の根本規範無くしては、發生的の研究は出來ないのである。眞理に關する問題に、若し此の論理の根本規範を缺いたならば、萬事休すと云ふことになるのである。斯樣に論理の根本規範は、知識に關係する所の一切の論證の根據になるのであるからして、是は自明でなければならぬ、性質は自明の性質のものでなければならぬ。さうでなければ論證の根據、其の又根據の其の又根據と云つて、際限なく遡らなければならぬと云ふことになる。とゞの詰りは論證の根據となるものを斷念しなければならぬ、斯樣に相成るのである。實用主義の側に立つて之を批評するならば、論理の根本規範の自明性を論證せんとして、之を容さゞれば萬事休するが故にと云ふやうな主張の仕方では、一種の循環論である。けれども自殺的の相對論に比較すると、哲學者の申して居る避く可からざる循環論と云ふものは、洵に安全なる立場であると云ふことになる。

同樣の論理が善と美に付ても矢張繰返される。善に對する、或は善に對する要求を持たぬ人は是は格別であるが、苟も善を理想とし、美を理想とする人に取つては、普遍的に妥當する所の論理の規範、普遍的に妥當する所の美の根本的規範を容すと云ふことは必然的である。之を容さゞれば其の目的とする所の善を達することが出來ず、其の目的とする所の美を實現するによしない、斯う云ふ事になるのである。美の根本規範に付ては色々と學者の間に異說がある。のみならず美の法則と云ふものは先驗性のものでない、それは寧ろ經驗的に決定されるものであると云ふ、心理的立場を執る人も多いのである。美の法則と云ふものは、實際の藝術に當つてどう云ふ性を具へて居るものが美として感ぜらるゝかと云ふ事は、心理的に研究して、それに依つて美の法則は立つて來る。それが即ち規範になる。さう云ふ心理學的規範に立つ人がなかなか多いのである。けれども今私は、其の點まで深入りして申上げる必要は無いだらうと思ふ。

それから善の根本規範と致しては、所謂カントの定限命令無上命令がそれであると考へられて居る。カントの定限命令とは、汝の行ひの格率が、普遍的に妥當するやうなさう云ふ格率に從つて行へ、斯う云ふのである。お前の行ひの規律として居る事が、何處へ持つて行つても當嵌まるやうな、さう云ふ規律に從つて行爲をせよ、斯う云ふ意味である。であるから、是は格率の格率である。日常吾々の行ひの規範として居る格率の其の格率であると云ふことになる。之を極く平たく申せば、良心の絶對命令と申しても宜からうと思ふ。

之を要するに、吾々の思惟、意志、感情の此の三つの方面に亘つて、それ〴〵普遍的に妥當する規範と云ふものが支配して居る。此の規範は、實用主義の考へて居るやうに、生命に依つて實用上の便宜の爲に設けられるものではない。吾々の論理的、倫理的、審美的の意識其のものゝ立法である。論理的、倫理的、審美的意識が、自分の目的を達成する必須の要件として、自律的に之を立てゝ居るのである。目的は今申したやうに、眞、善、美の名を以て呼ばれて居る。其の眞、善、美と云ふものは一個の理念である。理念としての眞、善、美は事實ではなくて、事實の目標點として描かれたる完全なる模範であり、理想であるのである。理想は終點ではない。理想と云ふものは終點ではなくて、無限の方向を唯象徴的に言ひ表して居るに過ぎないのである。數學に於て無限と云ふことを云ふ、何處にも吾々は無限を捉まへることは出來ない。吾々の規範に於て無限と云ふものを捉まへることは出來ない。無限はそれこそ無限で、要するに是は數學的の一個の局限概念である。同樣に、理想としての眞、善、美も、吾々の實際持つて居る科學、道德、藝術の局限概念に過ぎないのである。思惟に於ては觀念の完全なる統一、意志に於ては吾々の動機の完全なる統一、感情に於ては吾々の感情活動の完全なる統一、其の完全なる統一と云ふ事を思想上に描いたものが、即ち眞、善、美である。眞、善、美と云ふものを、絶對の價値であると稱するのも其の點からである。特殊具體の科學、道德、藝術も、此の絶對價値と云ふものは附著して居るから、其の時其の場合に於て眞である、善である、美であると云つて評價することになる。哲學者が自然の理想化、或は又逆に普遍の特殊化と申て居るのも、要するに今申した事を云つて居るのである。即ち普遍は絶對價値としての眞、善、美である。其の絶對の價値たる眞、善、美が、特殊化されたものが、吾々が現に所有して居る所の科學、道德、藝術である。

私は歴史的に發達して來た所の文化の相對性と云ふものに對して、其の根據となる所の絶對價値と云ふものが有るか無いか、斯う云ふ事を問題として段々論究して來たのであるが、歸納哲學から教を受くることに依つて、次のやうな結論に達したと、斯う申上げることが出來るのである。結論とは何であるかと言ふと、吾々の意識の根本方向である所の思惟、意志、感情の三方向に亘つて、それ〳〵其の理想となる所の絶對の價値と云ふものが存する、即ち眞善美と云ふ絶對の價値が存する。さうして此の理想を實現する必須の手段、無くてならぬ所の手段として、普遍的に妥當する所の根本規範なるものが、それ〳〵の領域に於て承認される。之を承認することに依つて始めて吾々の特殊具體の科學、道德、藝術が安全なる基礎を得ることになる。斯う云ふ事に論結し得た譯である。勿論此の結論に達する其の途中に殘されて居る幾つかの極めて難解なる問題が存して居るのである。で、私は其等の問題を解く力も無く、又私の當面の問題として居る事に、左程關係も無いのであるから、其等は省いて來たのである。

そこで今申上げた結論の結果として、更に斯う云ふ問題が起つて來るのである。吾吾の所謂文化價値と稱へて居るものゝ其の歸趨となるものは、眞、善、美であると云ふのであるが、然らば其の眞、善、美の相互の關係はどうであるか、斯う云ふ問題が起るのである。所が是は哲學者が頭腦を惱まして居る所の極めて難解なる問題であつて、價値體系論と云ふことになるのである。

【七】價値の體系

私は此の問題に付て解決を與へると云ふやうな力を持つて居る者では固より無い。であるから、唯私は學者の述べて居る說を採つて來て、それを色々とつぎはぎして、私の目的として居る所に、役立つやうに構成して見ると云ふことに止まらざるを得ないのである。

此の價値の體系を明かに致すことは、矢張教育の內容を明かにする第一步になるのである。我國の教育者の中には、一切の價値を文化價値と經濟價値、斯う云ふ風に分けて、さうして其の文化價値の方は理性の要求として起る所の眞、善、美であり、經濟價値の方は理性に對して自然性の要求として起る所の衣食住である。斯う云ふ風な說を

なして居る人もある。即ち一切の價値を文化價値と經濟價値に分けて居る人もある。或は又科學的の價値は、之を論理的の價値と申しても宜しいのである。科學的の價値、論理的の價値、審美的の價値、宗教的の價値、此の四つの價値の外に生物的價値と經濟的價値を擧げて六つにして居る人もある。所が斯樣に彙類すべき根據に付ては何等語る所が無い。唯斯うなると云つて居るだけである。私は此の教育の內容を明かにする爲に、それに先立つて價値の體系を究め、然る後に各價値の本質を明かにすることが、吾々教育者に取つて極めて大事なことであると、斯う考へて居る一人であるから、少しく其の點に付て述べて見ようと思ふ。

單に生物的に活さると云ふ事が生活ではないのである。價値を改造し價値を創造する、それが眞の生活である。申すまでもなく價値創造の衝に當る主體は自我である。一個の統一體である所の自我である。但し此の場合に於ける自我は、心理學上の研究の對象として居る所の自我ではないので、一切の事實、一切の存在、一切の與へられたるもの、一切の現象の由つて成立する所の基礎となる純粹の自我である。是はナトルプから藉りて申したのである。心理學が自我を研究の對象とする場合に於ては、此の自我は其の研究の衝に當る、自我に對しては與へられたる自我になる。此の關係を別の語で申すと、意識するものと意識されるものと云ふことになる。そこで意識するものが何であるかと繹ねて見ると、こゝに意識される所の自我があるから、意識其のものは何であるかと繹ねることが出來る。斯う云つて繹ねた時には此の物が復た對象になつてしまふ。此の物は何であるかと言ふと、復たそれが研究の對象になつて來るのであるから、研究の主體が又其の奧にある。是は何處迄往つても其の通りである。であるから、意識するものと意識されるものとの對立は、是は最後の根本的のものである。若くは還元することの出來ない最後のものである。其の意識するものと、意識されるものと對立する時に、意識するものは純粹の自我である。之をカントの語で言へば意識一般である。誰の意識彼の意識と云ふのでなくして、意識一般と云ふのである。

此の絕對の價値である眞、善、美は、純粹自我の要求する理念である。或る個人何某と云ふやうなことに關係の無い純粹自我、意識一般の要求は、理念理想である。此の理念を目指して進んで行く、之を目的として自我は進んで行く。自我は他律的でなくし

て自律的に立法する。即ち根本規範と云ふものを自分で立てゝ、さうして事實の世界と云ふものを統制するのである。それが具體的の吾々の科學であり、藝術である。科學、道德、藝術と云ふ是等の價値は、同一の根元から發展する、方向としてはそれぞれ獨立の領域を成すものである。他を以て置き換へることの出來ない獨立の領域を成すものである。どう云ふ意味に於て獨立の領域を成すか、價値體系の研究は第一に此の點を明かにしなければならぬのである。それで私は科學的價値から、獨立の領域を成すと云ふ意味を漸次申して見たいと思ふ。

科學的價値は、論理の根本規範に依つて、統一されたる事實の世界である。而して此の場合に規範に依つて事實を統一したる所の主觀の態度は、靜觀的である。と云ふ意味は、事實に對して何等實際的に働き掛けることをしない。單に事實相互の關係を見るだけである。ツイこの程、この學校の傍の建物が暴風の爲に倒されたとか申すことでありますが、之を科學的に研究すると云ふ場合には、風力と其の建築の仕方との關係を考へるだけである、即ち事實と事實との關係を考へるだけである。傍觀的に事實と事實との關係だけを考へるのが科學的の態度である。であるから、人間を研究の對象と致す場合でも、其の對象とされた所の人間は、自然と擇ぶ所はないと云ふことになる。心理學者が人間を研究致す場合の態度が即ちそれである。何も事實的にそれに働き掛けることはしない、人間の心の作用はどう云ふ風に働いて行くものであらうかと云つて、傍觀的に研究するのである。觀念と觀念との關係、觀念と意志、或は感情との關係を傍觀的に研究するだけである、即ち物として研究すると同樣である。要するに眞と云ふものを現して居る所の科學的の價値、眞と云ふものゝ附著して居る所の科學的價値と云ふものは、客觀化された所の價値である。

右に反して、論理規範意識の對象となるものは人格である。他人を賞讃したり、或は他人を非難したり、或は自分を責めたり、或は自分を匡したりすると云ふ場合に於ては、心理學者が人間を研究の對象とする場合とは全然違ふのである。文相が二枚舌を使つたと云つて、非難をする人の態度は、心理學者が心理作用を研究する態度とは違ふのである。即ち自分でも他人でも、義務を履行する、又履行すべき人格として之に接するのである。であるから、科學的價値の場合のやうに、靜觀的に、我れと無關係として取扱ふのでなくして、活動的の態度で之に接するのである。カントの所謂自

分及び他人の人格を目的として取扱へ、斯う云ふ態度で接するのである。而して其の價値と云ふものは、人間の上に體現されるのである。科學的價値のやうに、客觀化されるのでなくして人間の上に體現するのである。

もう一つ審美的の價値の創造に付ては、二樣の態度が考へられる。藝術家が、自然は勿論人間を其の藝術創作の內容と致す場合には、人間であつても之を褒めるとか貶すと云ふことは致さぬのである。唯其の人間の背後にある理想、或は理念と云ふものを捉へて——直感に依つて其の理念と云ふものを捉へて、それを表現するだけである。であるから是は、科學的態度の場合同樣靜觀的である、働き掛けると云ふことを致さぬのである。其の作品も科學的價値同樣に客觀化されるものである。それが一つ、之と相駢んで、吾々は人間を美化して見ることがある「あの人はどうも心の美しい人だ。」と斯う言ふ。或は人の行ひを見て「實に崇高な行ひだ。」と言ふ。斯ふ云ふ風に美しい心であるとか、崇高な行ひであるとか言つて人間を見る場合に、是は美化して見て居るのである。シラーと云ふ人は美魂と云ふことを云つて居る。是は丁度孔子の所謂心の欲する所に從つて矩を超へずの境地に達した其の魂と云ふものは美しい魂と斯う見ることが出來ると思ふ。斯う云ふやうに人間を見た時には、矢張人間を美化して言つて居るのである。此の場合の態度は、最早單なる靜觀的ではなくして、倫理的の態度と同樣、人間を人格として之に接するのである。美は人間の上に體現されて來るのである。斯樣な譯であるから、美的價値の創造には、二樣の態度が現れる、斯う考へることが出來ると思ふ。

斯樣な意味に於て、吾々の意識の三つの根本方向を取つて發展する所の價値と云ふものは、それ〳〵他を以て置き換へることの出來ない、獨立の領域を成して居るのである。此の獨立の領域を有する所の價値の間に、共通なる基礎を求め、之を統一しようとするのが價値體系論である。是が最も難解な問題であつて、到底私などの解決し得る所ではないが、何等か之に付て述べなければならぬのであるから、矢張學者の說を藉りて其の一般を述べようと思ふのであるが、私は其の問題に入るに先立つて、、こまで嘗て一言もしなかつた所の聖に付て申述べて置かなければならぬと思ふ。

此の聖を理想とする所の宗教的生活は、前に擧げた眞善美の三つの領域から離れて獨存するものでなくて、寧ろ論理的、倫理的、審美的規範意識の必然の要求として發

現するものである。繰返して申すと、其等の規範意識の極致として顯現するものである。斯う云ふ風に考へられて居るのである。どう云ふ意味で聖と云ふものは、眞善美の極致として顯現すると云はれるのであるか。野蕃未開の種族の間にも、神と云ふものに對する信仰がある。固より其の信仰は極めて初心なもので、或は食物を與へて貰ひたいとか云つたやうな、感覺的の願ひとか、或は恐ろしいと云ふ、自然の脅威に對する所の恐怖と云ふやうなものに基くものであらうと思はれる。けれども文化人の宗教的生活の萠芽は、已にそこに潜んで居ると思はれるのである。神の恩惠に依つて願を果さんとしたり、或は又神の惠みに依つて、神の保護に依つて、自然の脅威を脱しようとする生活と云ふものは、自己の有限性を意識することゝ、此の有限性を打破せんとする努力、それから起るのであると觀られるのである。自己の有限性の意識と、其の有限性を打破せんとする努力との結合から起るのである、斯う觀られると思ふ。文化人をして、論理的、倫理的審美的生活の極致として、聖の信仰と云ふものに到達せしむるものも亦、吾々に存在する有限性である。

既に述べた通り、論理的意識は、自分の立てた所の規範に依つて、或は自分の立てた法則に依つて、與へられたる事實の完全なる統一を理想として、努力するものである。然るに、統一さるべき所の事實の世界は無盡藏である。統一さるべき事實の世界の無盡藏に對して、統一に當る所の主觀は有限的である。隨つて論理的價値の創造には終極と云ふことが無い、こゝでお終いに達したと云ふことが無いのである。哲學者の所謂無限の課題のあるのみである。今日迄に到達したる所の科學的の價値と云ふものは、無限の進歩の過程中にある、或る通過點に過ぎない、無限の進歩の或るポイントに過ぎないのである——是はリッカードの言を藉りて言ふのであります。それ故に、吾々の論理的意識の理想と云ふものが、事實の世界の完全な統一と云ふことに存する限り、そこには永久滿たされざる不安が附纏うて居る、斯う云ふことになるのである。是は倫理的の意識の方に付ても矢張同樣である。倫理的意識の努力にも、完結の時機、終點と云ふものが來ない。こゝにも亦無限の努力、無限の闘ひと云ふものがある。と云ふ譯は、倫理的規範意識に依つて統一すべき事實と云ふものも、亦無盡藏であるからである。假りに孔子のやうな、己れの欲する所に從うて矩を超へずと云ふ、或る個人があつても、それに依つて倫理的價値の創造が、完結したと云ふことにはならない

のである。有限的な吾々の意志を以てして、未來は勿論のこと、現在に於ても事實の一切を盡すと云ふことは不可能であるからである。どんな人事關係が此の後現れて來るか、豫想はせられぬ。現に刻々新たな事情と云ふものは起つて來て居る。であるから、倫理的規範意識に依つて統一すると云ふことにも、完結と云ふことは無いのである。即ちこゝにも論理的意識に附纏ふ所の不安と云ふものが、倫理的の意識にも避けることが出來ないと云ふことになる。

審美的意識に付てはどうであるか。審美的意識に於ては、其の本質である所の直感の表現、自然でも何でも、其の背後にある理念と云ふものを直感に依つて捉へて、其の理念を表現する。强い意志なら意志を理念としてそれを表現する。其の表現された所のものは常に一個の完結したものになるのである。科學の方の無限の課題、倫理の方の無限の闘とは違つて、美的表現と云ふものは他に俟つことなく、それ自身だけで以て完結した狀態に達する。是は美の特色、藝術の特色である。であるから、雅邦の作であつても、芳涯の作であつても、そこには他を以て置き換へることの出來ない一の藝術品と云ふものになつて、所謂哲學の永久の今の中に活きて行くのである。之を鑑賞する方の側に取つても矢張同樣である。此の自足の狀態が美の人生に對する所の大なる意義である。ニイチェの口吻を眞似て申すならば、吾々の生活と云ふものは議論ではなく戰ひである。戰ひに疲れた者は、疲れたと云つてそれでお終いにする譯にはいかない、再び勇氣を皷舞して戰ひの野に向つて出陣しなければならぬ。美々しき裝ひを以て戰ひの野に出陣せしむるものが藝術である。けれども此の審美的意識と云ふものも亦、人間の有限性の故に完結に達することが出來ない。完全な美の表現と云ふものは、到底是は人間の能くする所ではないのである。世の中に藝術史と云ふものが存することが表明して居るのである。

斯樣に何れの規範意識も、論理的規範意識も、倫理的規範意識も、審美的規範意識も、完全なる統一を理想として努力するのであるが、而も此の努力と云ふものは、吾々人間の有限性の爲に、一大障壁に出會する。こゝに一大障壁に出會して始めて神的、創造的、直覺的の論理的、倫理的、審美的意識が捉へられる、斯う云ふことになつて來る。それが即ち聖であるのである。即ち其の障壁を飛躍してこゝに始めて圓滿缺くる所なき論理的、倫理的、審美的意識と云ふものを捉へる、斯う云ふことになつて來

る、それが聖である。此の聖と云ふものは概念の世界の對象ではない。論理的世界の對象でもない。吾々の自我の最も奥深い所に根ざして居る感情の要求である。即ち體驗に依つてのみ肯かれる絶對的のものである。絶對的の要求である。斯う云ふ意味に於て、認識の完全な理想と云ふものは、其の認識を超えて占める、斯う云ふことが出來ると思ふ。斯樣にして完全な統一を理想とする所の論理的、倫理的、審美的規範意識は、其の窮極する所に聖を捉へると云ふことになると、それを象徴化して圓滿具足の人格として、信仰すると云ふことになつて來る。さうして自分も有限性を帶びた儘、其の捉へるものと人格的に關係することになつて來る。言ひ換へると、神の懷の中に神と共に、活きることが出來るやうになつて來る。斯樣な境地に到達すると、最早果しの無い無限の課題にも附き纏ふ所の不安と云ふものは無い、生活の戰ひにも克復することの出來ない脅威と云ふものが存しない、斯う云ふことになつて來る。自分の中に無限の力を蓄へて、常に青年のやうな若々しさを以て、科學の研究、善の實現、美の表現に從事することが出來る、斯う云ふことになつて來る。斯樣にして聖と云ふものが說明されて居るのである。私は主として、リツカートの說を藉りて申述べたのである。

斯樣にして私は、眞、善、美、聖の四つに付て大體を申し了つたのであるが、更に殘されて居る所の事がある。それは是まで申した所の眞、善、美、聖の價値の間の關係、即ち價値體系論である。後に福島君が美の方面から敎育を述べられるやうであるから、私共より述べたよりは、福島君に述べて貰つた方が宜いのであるが、順序として申述べようと思ふ。

カント以來哲學者の間に、善の倫理的價値、言ひ換へると道德的意志の優位が認められて來て居る。併し之に對しては異說が無い譯ではないが「哲學研究」等に現れた左右田博士の論文を御覽になつた方は、直ちにそれに氣付くだらうと思ふが、價値體系論は非常に難かしい問題であつて、倫理的規範意識の優位を認めることに付ても、色々異說があるのである。矢張此の種の難問は私の力の及ぶ所ではないから、私は學者の說を引いて申すだけである。哲學者は――と申してもウインデルバルドを指すのであるが――科學者に科學的の良心、藝術家に藝術的良心が働くと斯う申して居る。科學者が眞理の研究に當る場合に、必らずそれが自分の義務であるとか、責任であると云ふや

うな事を意識するものではなからうと考へる。寧ろ義務とか責任と云ふことは一切やめて、さうして自分の研究の對象に向つて專念沒頭するのが、其の場合に於ける科學者の意識の內部狀態であらうと考へる。けれども科學者とても人間であるから、時々私慾と云ふものゝ萠して來ないものとも限らぬ。即ち私慾の爲に眞理を曲げんとする動機などが、萠す場合がないとも限らぬのである。縱令斯樣な動機が萠す場合が無いと致しても、輕忽な憶斷に滿足すると云つたやうな場合が無いとは限らぬ。斯る場合には、之を押除けて、眞理の闡明に向つて驀進する所に、科學者としての良心の閃きが現れて來るのである。數學の問題、或は自然科學の問題を研究致す時には、其の意識の向ふ方向と云ふものは、數學の問題であれば根據と歸結、自然科學の問題であれば原因と結果の關係の思索であると思ふ。此の原因と結果の關係を索るとか、根據と歸結の關係を索ると云ふ此の思索も良心の働である譯ではないのである。是は論理的の働である。併ながら其の背後に憶斷、忘想に陷ることを避けて、論理的規範の要求に從つて專念せよと云ふ命令が働かざるを得ないであらうと思ふ。此の論理的規範に從つて專念せよと云ふのが、即ち科學的良心の働く所である。科學者が其の研究の目的に向つて努力致す場合に、尠くも道德的に純潔ならずして、眞に科學的價値の創造は望まれないであらう。此の意味に於て科學的の價値は、論理的規範意識の創造であると共に、倫理的規範意識の創造である。斯う見られると思ふ。論理的規範意識の方は倫理的規範意識を助けることはある。援助することはあるけれども、之を統一することは出來ない。原因と結果、根據と歸結の關係を考へる論理的意識は、倫理的意識を統一することは出來ない。けれども反對に倫理的規範意識の方は、論理規範意識を統一することが出來る。之を統一して同じき方向に向はしむることが出來る。さう云ふ働を有する。美の表現に付ても矢張同樣の事が云はれると思ふ。藝術家も道德的に純にして、努めて眞の美の表現と云ふことが出來る。劣惡なる傾向に誘はれての藝術と云ふものは、眞の藝術ではあり得ない。即ち藝術家をして美の法則に純一ならしむるものは、矢張藝術的の良心である。斯樣な意味に於て道德的意志の優位と云ふものを認むることが出來ると云ふのが、哲學者の考である。但し優位を認むると云ふことは、至上權を認むると云ふ事ではない。道德的意志の至上權を認めると云ふことになると、丁度ヘルバルト、チラー派の認めたやうに、知的陶冶、美的陶冶、道德的陶冶の

單なる手段に過ぎない、斯う云ふやうに考へられるのである。けれども眞も美も倫理的意識の要求に合するの故に、眞たり美たり得るのではないのである。眞は論理の規範意識に合するの故に眞である。美は美の法則に合するの故に美たるのである。眞も美もそれ〴〵それ自身だけで以て無條件に妥當するのである。道德意志の優位を認めると云ふ事は、其の各〻に獨立を認め、而も其の中に於て主位を占める、斯く云ふ意味に過ぎないのである。ナトルプは之を劇の主人公に譬へて居る。例へばドラマに於て主人公を中心に色々の人物が現れて來る。其の現れて來る所の色々の人物の性格と か運命とか云ふやうなものは、何も其のドラマの主人公の性格や運命に勝手に規定されるものではない。他の人物は主人公と對立して、それ〴〵矢張相對的の獨立を保つて強いコントラストを爲すのである。其の間の關係は、目的に對する單なる手段ではない。主人は目的で他の人物は其の手段である。斯う云つた譯のものでない。主人公を中心にして他の人物の一切をこめて、こゝに一つの統一のあるドラマと云ふものが出來て居るのである。言ひ換へると、主人公を籠めて一切の人物が相俟つて、こゝにドラマの現さんとした一の理念が表現される、斯う云ふ性質のものである。丁度此のドラマの主人公に當るものが善である。さうして他の色々の人物に該當するものが眞であり美である。斯う云ふ關係に立つて居るものであると云ふのが、ナトルプの價値の體系に對する考である。

斯樣な意味に於て、道德的意志の優位と云ふものを認むることが出來ると斯ういふように致して、そこで宗教的生活と云ふものに、與へられた所の位地がどうなつて來るか。吾々のこの世の中に於て實現することの出來る價値と云ふものは、眞善美に盡きて居る。之を實現するに付て、其の窮極する所を體現されたものは聖である。であるから、聖と云ふものは、眞善美の領域以外に別箇の領域を占めて居るのではない。自然科學者が自然現象の背後に神の姿を見ると云ふのも、是は知を致しての極致神を直覺するのである。自分の作品の前に禮拜する藝術家も、自分の技術が神に入つて聖と云ふものを體現したのである。此の點から見ると、聖と云ふものは最上位を占むる價値である。斯う云ふ風に考へられることにもなるのであるが、どうもさうは云はれない。即ち聖と云ふものは目的で、其の他のものは總て手段であると斯樣に云ふことは出來ない。そこで寧ろ人間の有限性を支へて、之に無限の力を附與して、さうして

價値創造の働に當らしむるものが聖である。斯う解釋して置くより致し方が無いであらうと私は思ふのである。

【八】文化價値と教育の內容

吾々人間の生活は、文化價値を俟つて始めて意義のある生活になる。單なる生物的の生命と云ふものには何の意味も無い。實用主義に取つては、文化價値は生命價値の條件たるに過ぎないのであるが、理想主義に取つては、生命價値の方が文化價値の條件である。生命無くして文化價値の實現を期する譯にはいかぬからである。而して有らゆる價値の歸趨となるものは、前に段々申したことに依つて眞善美である、或は眞善美であつても、其の背後に顯現して來るものは聖である。文化生活を理想とする所の教育の內容と云ふものは、此の眞善美聖の範圍には出でないのである。であるから、此の教育の內容の本質を明かにすることを要する所の吾々教育者に取りては、文化價値の本質を先づ以て明かにして、其の上で吾々の教育の內容の本質を明かにせんければならぬ。

私は其の眞善美聖の一切の價値を明かにして、さうして其の價値と吾々の實際今現に使つて居る所の教育內容と云ふものと、どう云ふ關係に立つものであらうかと斯う考へて見たのである、それは次の如きものである。

- 文化價値
  - 論理的價値（眞）
    - 理論
      - 先驗科學（數學）……算術
      - 自然科學……理科
    - 技術
      - 經驗科學
        - 文化科學……地理
        - 歷史……身體
  - 倫理的價値（善）
    - 情操
      - 道德……修身
    - 實行
      - 法……制度
      - 經濟……經濟的材料
  - 審美的價値（美）
    - 鑑賞
      - 空間藝術
        - 繪畫……圖畫
        - 彫刻……工作
        - 建築……手工
    - 創作
      - 時間藝術
        - 音樂……唱歌
        - 詩……文章的材料
        - 綜合藝術
          - 劇……綴り方
          - 舞踊（運動美）……體操
  - 宗教的價値（聖）……國語體操

なか〳〵勝手な配列法を取る譯にいかぬのであつて、私は自分で斯う云ふ風に立てゝ見たのであるけれども、隨分是は間違があるか知らぬが、現在では私は是れ以外には考へやうがない。此の教科と云ふものは、教育學に依つて色々に分類されて居る。是までの教育學は人毎に教科の分類を異にして居る。或る人は知的教科に言語科、道德科、技能科、斯う云ふ風に分けて居るが、それを一々擧げる譯にいかぬから、我國に最も多く用ひられて居るラインの教育學には、人文教科と自然的教科との二つに分けて居る。人文的教科は人間の關係から起る所の教科、自然的教科と云ふのは、自然相互の間だけから起つて來るもの、斯う云ふ風に限つて、さうして自然的教科の分は地理とか理科とか數學で、他のものは一切人文的教科で、技能でも何でも其の中に入れて居る。斯う云ふ譯で教育の內容の分類は人毎に違ふ。私は假りに文化生活と云ふものを離れて教育と云ふものはない、さうすると文化價値の體系の下に教育の內容を配列することが出來る、斯う云ふ考で、斯の如き表を作つて見たのである。是は色々の哲學者の述べて居る所の價値の體系を、繼ぎはぎして拵へたものであるから、隨分ほころびもあらうと思ふ。私は今此の配列の仕方に付て細かく說明する暇はないが、大

體に於て餘り間違はなからうと思ふ。唯之に付ては國語を入れる所に窮したのである。何處へ國語を入れるか。國語は學問とすると文化科學に這入る。學問としての言語學と云ふものは、古來の言語、現在の言語であつても、有らゆる言語の特質を研究し、さうしてそれを支配して居る所の通則を研究するのは言語學である。けれども言語學を吾々が學んでも異つた言語を使ふものをどうすることも出來ないのである。言語學が文化科學であるからと云つて、國語をそこに入れる譯にはいかない。寧ろ國語と云ふものは、是れは人間の創造する文化價値の中で、最も驚異に價ひする所の一つである。人間は言語を創造することに依つて始めて自由の境地を得た。言語を發明することに依つて、始めて文化價値を創造することが出來るやうになつたのである。學者は人間と動物の區別を言語に依つて立てゝ居る人さへある。言語は動物に取つて越ゆる能はざるルビコン河である。ベルグソンは、人間と動物の違ひは程度の差ではない、本質上の差である。斯う云ふ事を申して、其の本質上の違ひとなる根本のものは言語であると云つて、其の人間と動物との區別を巧妙なる譬喩を以て述べて居る。生命が大きな跳ね板の末端から飛び出す時に、有ゆる動物は悉く落ちてしまつたのに、獨り

人間のみ、其の前にぶら下つて居つた所の繩に取縋つて危險を免れることが出來た。其の取り縋ることの出來た、前にぶら下つて居つた繩は何であるかと言ふと、それは言語である、斯う云つて居る。即ち言語を發明することに依つて人間と云ふことになつた。さう云ふ意味から國語を此の文化科學の中に入れてしまふよりは、一切に關係することにした方が適當であると思つたのである。體操はどうなるか。體操は、文化價値を六つに分けるとすれば、生物價値に當るのであるが、是は身體を強くする條件としても考へられる、有らゆる價値を創造する所の條件としても考へられる。さうかと思ふと、吾々の身體を完全なる身體にすると云ふことは一個の美の創造である。完全なる身體は一個の藝術である。さうなつて來ると審美的價値と云ふ所へ入れることも出來る。斯う云ふことになつて來る。で是は、有らゆる價値の創造に關係すると云ふ點から國語と同じやうに、總てに關係すると云ふ風に、現はした方が宜からうと云ふので、右のやうにしたのである。

斯くして私は、是から更に文化價値の內容に付て、論理的價値の中で先驗科學はどう云ふ性質のものであるか、どう云ふ本質のものであるか、經驗科學はどうであるか、倫理的價値の中で道德、法、經濟は如何なる點に於て分れるか。審美的價値の空間藝術、時間藝術、綜合藝術の各〻の特色は何處に在るか。斯う云ふ事を考へた上で、今度は吾々の教育の內容に移つて來て、教育の內容と云ふものは、斯う云ふ價値の本質からのみ見ることが出來るが、教育の材料としては寧ろ美の觀方と云ふものを加へて來なければならぬのであると云ふ風にして之を考へて、知の問題を考へ、こゝに始めて教科の要旨、教育の本旨と云ふものが、明かになつて來るものであると、斯う云ふ風に考へるのである。少しく其の點も研究して見て居るのであるが、此の四時間の講演では、そこまでお話を申上げる餘地はなかつたのである。

是で私の文化と教育と云ふ題に付ての講演は、終結するのであります。（了）

第四講　國際教育及國際道德

文學博士　吉田熊治

一、國際主義の意義――二、國際主義の由來――三、國際主義と道德及教育

私の演題は、「國民教育及國際道德」と云ふのであるが、それを大體四つに分けて申上げて見たいと思ふ。(一)國際主義の意義、(二)國際主義の由來、(三)國際主義と道德、(四)國際主義と教育である。けれども其の一々を章に分けて申上げるよりも、第一と第二を續けて申上げ、第三と第四とを亦併せて申上げやうと思ふ。

先づ初めに國際主義の意義に付てお話しようと思ふ。

【一】國際主義の意義

國際主義なる語は、近頃流行の新熟語の一つである。而して國際主義と云へば直ちにワシントン會議を聯想することであらうと思はれる。又ワシントン會議と云ふ事を耳にし易い當時に於ては、平和主義を聯想するであらうと思ふ。そこで國際主義を、平和主義と同意義であると解釋することが、先づ思ひ付き易い解釋であらうかと考へる。如何にも國際主義と平和主義とは、過去の沿革に顧みても極めて緣の近いことであつて、西暦一八九九年、我國に於ては明治三十二年に露西亞のツアーの招待に依つて開かれた第一回のヘーグの萬國會議なるものが、即ち平和の爲の會議であつたのである。平和會議幷に萬國會議に就ての起原なり理論なりは、餘程久しき以前に於て其の萌芽を見て居るのであるが、社會上の一の活きた力として是が實現せられたのは、ヘーグの萬國會議又は平和會議であつたと言つて宜からうと思ふ。尙又第二回のヘーグの平和會議なるものは、一九〇七年に同じく露西亞のツアーに依りて招集された。而して此の會議に於ては、最初から所謂仲裁々判と云ふやうな事が問題になり、そこに或る形に於ける仲裁々判所と云ふものが出來たのである。勿論是は、第二回の會議、即ち一九〇七年に於て、永久的の仲裁々判所となさんとするの提議があつたが、獨逸及び墺地利の反對に依つてそれは成立しなかつた。是等の沿革を考へれば、何人も國際主義と云へば平和主義のこと、隨つて之を、私の掲げて居る標題に、其の意味を應用

致したならば、國際主義と云ふのは、平和主義のことである。更に、國際道德及び國際教育と云ふのは、平和道德及び平和教育のことであるかと、想像せられるかも知れぬ。所が必ずしもさうでないのである。兎に角國際主義と平和主義との間に緣がある と云ふ事は、今申上げた所でも分ると思ふが、尙ほ其の後に於て、此の度の歐洲大戰亂の結果として、所謂國際聯盟なるものが出來上つた。其の場所は前の平和會議の如く和蘭ではなくして、此の度は瑞西のジュネーヴに常設の理事會を設置することになつて、前よりは尙ほ一層力强き萬國の聯盟が出來た譯である。

所が此の國際聯盟なるものは、成程一面に於ては平和を目的として居るのであるに違ひないが、國際主義と云ふ語が、容易く思ひ起さしむる所の國家主義と云ふものに對立する、或は國家主義を制限する、若くは進んで國家主義を否定する意味を持て居るかどうかと申すと、此の國際主義なるものは、或は國際聯盟なるものは、決してさう云ふ意味を含んで居るものでないと云ふ事を、吾々がはつきりと頭に入れて置くべきだと思ふ。假に國際主義を、萬國會議若くは國際聯盟的の活動を含んで居る主義と解釋致しても、それは少しも國家の獨立と云ふことに、手を觸れようといふのでない と云ふ事を、はつきりと頭に入れて置きたい。と申すのは、後に國際主義の他の意味として、或は他の思想に基く所の國際主義は、國家の獨立を欲しない、所謂國家主義に反對する意味合を含んで居る。所が國際會議、若くは國際聯盟を背景として造上げられて居る所の國際主義は、さう云ふ意味を含んで居るものでないと云ふ事を、吾々教育者ははつきりと頭に入れて置かなければならぬと云ふのである。已に前のヘーグの萬國會議其のものは、國家主義を根柢としての會議であることは申すまでもない。露西亞のツアーは、其の當時に於て決して露西亞の政權を、それに依つて無視せんとするやうな考を持つたものでない。又國際聯盟其のものも各國家の獨立を無視せんとするものでは決してないので、英吉利のマンチェスターの歷史學の教授のラムゼー・ミューアと云ふ人の書いた「國家及國際主義」(ナショナリズム、エンド、インターナショナリズム)と云ふ本がある、其の本の二十六頁の所に、國際主義の性質を說明して居るが、ミューア教授が、此の處に於て說明した國際主義は、萬國會議とか、國際聯盟とかを背景とした國際主義であつて、其の中には少しも非國家主義的の思想が含まれて居るものではないのである。ミューア教授が此國際主義的運動を說明して、大體斯樣

に申して居る。此の運動は所を要求して居るものであるかと言へば、大體に「確實なる基礎の下に萬國公法なるものを打立つて、さうしてそれに力を持たせやうとするものである。即ち公共の利益（コンセンインテレスト）を基礎とする合理的（ラショナル）なる規則（ロー）を一國の範圍よりして萬國の關係にまで押擴めようとする要求に外ならない。」さうして其の次には明かに、「此の運動は國と國との間に於て、自由を確保することを要求するものである、即ち弱い國が其の自由を十分に保障せらるゝが爲に、國際法を確立せしむることが必要である。」即ち國際主義は國の自由獨立を抑へ付けるにあらずして、國の自由獨立を保障せんが爲に、殊に弱い國の自由獨立を保護せんが爲に起つて居るものであると申して居る。之に依つて觀ても、國際主義と云ふこと其の事が、決して一國の自由自決を傷けやうとするものでない。特に斯う云ふ事をお斷りする必要は無いやうであるが、世間で國際主義と云ふ語を聞くと、非國家主義的の語のやうに考へて居る人があるかと思ふので、特に繰り返して申して置くのである。

現に前の北米合衆國の大統領ウイルソン氏が、熱心に國際聯盟を主張したのであるが、其のウイルソン氏は何を一方に於て主張して居つたかと言ふと、所謂民族自決と云ふことを主張して、各民族が自主的に其の主權を維持し、其の自由を保持して行くべきものとさう考へて居たのである。而して此の國際聯盟的の萬國主義が、如何に多く其の國の自事權、即ち國家主義的主張を固執するかと云ふ主は、昨年我國の教育團體よりしてジユネーヴの國際聯盟の理事會に向つて、萬國教育會議を開いて、さうしてそれに依つて、平和的精神を學校教育に於て促進するやうにしたいものである。其の目的に向つて、國際教育會議を開催して欲しいと云ふ事を申込んだのである。所がそれに對する回答が、昨年の十二月の「帝國教育」の末尾の方にあつたと思ふが、國際聯盟の書記長をして居る新渡戸博士よりして、書面を以てそれに對する回答があつた。其の答はどう云ふ事であつたかと言へば、萬國理事會の人々は、一國の教育の昂進に關して、其の國以外の他の勢力に依つて、規定せらるゝことを欲しない狀況にある。それ故に近き將來に於て所望せらるゝ如き所の、萬國教育會議を開き得る望は無い。但し何等か學術上に關して、萬國會議でも開きたいと云ふ計畫はあるが、それも學術研究に關して萬國共同してやらうと云ふやうな事に止まつて、恐らく教育の主義方針に及ぶものではないであらう、と云ふ意味の回答が來て居る。私は此の回答のあ

つた事柄に就て是非善惡の批評をしようとするものでない。唯事實を事實として申上ぐるだけである。今日迄の國際聯盟なるものは、如何に各國の自主獨立を尊重して居るか、教育の事などに關しては、それは國々で定むべきものであると云ふやうな考が、現實に於てどれだけ强いものであるかと云ふ事を、唯證據を擧げて申すに過ぎない。兎に角此の第一の意味に於ける國際主義なるものは、餘程國家主義的の思想を固く持つて居るものであると思はれるのである。

尙ほ引續いてミューア教授が、前に述べた書籍の終りの方に、國際主義の敵となるものは何かと云ふ事を論じて居る一章がある。其の中に數へられて居る主義が三つある。第一はナショナリズムである。即ち是は國家主義であらう。一體ミュール教授は、他の部分に於て、ネーションとステートとは、同一でないと云ふ事を頻に論じて居るが、それはそれに違ひないが、分り易く言へばナショナリズムは國家主義と言つて宜いであらう。第二はコンマーシャリズム、商賣主義である。而して第三はミリタリズム、軍國主義である。此の三つのものは萬國主義、或は國際主義に對して反對するものであると云ふのである。所がミュール教授の說に依ると、其の第一及び第二のものは絕對的に國際主義に反對するものでないと云ふのである。何故ならば、其の第一のものに關しては、國際主義其のものは——ミュール教授の意味する國際主義其のものは、國家の獨立を少しも傷けやうとするものではないからして、國家主義があるから國際主義が出來ないと云ふことはない、唯橫暴なる國家主義、不合理なる政策を行ふ所の國家主義は、萬國との協調を破り、世界の平和を破ると云ふ意味に於て、國際主義と矛盾して來ることはあり得る。即ち國際主義と國家主義と場合に依つては衝突して來る。併ながらいつも衝突するものではない、斯う云ふのである。又次にコンマーシャリズムも同じやうな關係にある。是は例を云つても分る譯である。戰爭などを最も嫌ふ人々の中には商賣人が多い、場合に依つては商賣人が戰爭を起すこともある、戰爭の爲に儲けやうと思つて、陰に陽に戰爭を誘致することもあるけれども、併ながら戰爭をやる時には、平時に榮えた商業關係は持續することが出來ないから、そこで商業本位の考を持つて居る人は、大抵戰爭に反對をする。商賣の爲に戰爭を起すこともあるけれども、商賣の爲に戰爭に反對することもあるのである。ミュール教授は正直に、歐羅巴諸國が東洋諸國に於て戰爭を開いた原因が、商賣主義に基いたと云ふ事